

狂った道化師を拾った話。

親友気取り。

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

路地裏にいた道化師の少女を拾ったお話。

←リゴレーヌ2021

←お竹様 (@takeiti) の描いてくれたリゴレーヌ!!!!!!  
<https://twitter.com/takeiti/sta>  
tus/1410621655345291264?s=20

## 目次

裏路地の道化師。	1
道化師の実力。	9
食事情。	16
道化衣装とお金。	20
武器屋の娘、クラリス。	24
再選再戦	29
弟子は大変。	37
弟子になりたいニコル。	44
10日後。	50
人形劇。	58
ニコルとリゴレーヌ。	63
殺意マシマシ盲目メイド。	69
道化師、心配す。	75
道化飯。	80
ビッグ剣。	86
ベリテット。	91
なり申したりぞて。	96
道化師の新奇術。	101
帽子素材。	106
帽子、大完成！ 大歓声！	111
感染。	115
道化の生き方	120
リゴレーヌ空間。	126
リゴレッタ&リゴレーヌ。	132

影絵	140
道化なし、少し寂しか	146
番外編 黒猫義賊	150
震える山	156
レーヌズ	161
行儀	166
前日	171
リゴレーヌ・ダブル。	178
『悪魔め、鬼め』	184
ねうねう語らいて	189
“アドリブ”	194
非常識な出来事、“偶像”にご感動を！	202
ニコルの劇	207
『何人も語ることなし』	212
『美しい愛らしい娘よ』	217
ひと段落	224
作戦会議	231
月明りの下	237
一座	247
ひと段落と裏切り者の始末	258
カーテンコール！	267

## 裏路地の道化師。

冒険者ギルドへ向かう道中、貧民街に近く治安の悪いこの地区ではあまり似つかわしくないものを見てしまった。

どこかのゴミ捨て場から拾ってきたのであろうボロの木箱を踏み台にして、奇妙な格好をした小汚い少女が廃材でジャグリングをしていた。女子供と見ればすぐに攫われてしまうと言われるような（実際は少ないが）こんな通りで。

こちらが見ているのに気が付くとペこりと頭を下げ、にへらと笑いながら軽い身のこなしで宙を舞ったりと他の芸も出してくる。道化の事は分からないが、本来ならこんな所にいるような技量ではないのは分かる。

汗をにじませながら三度頭を下げ、布切れを縫い合わせて作ったらしいカーテンを建物から飛び出ていた釘に引っ掛けて仕切りを作りその不思議な公演に幕を閉じた。

しばらくカーテンの奥からひらひらと手を振っていたがしばらくしてからそれも引っ込み、入れ替わりでびよこつとカーテンの下から割れたコップが出てくる。

奇妙な物を見させてもらった。色々疑問が残るが、恐らくはどこかの雑技団からあぶれた道化師の物乞いか。銅貨を放り込んでやる。

あの身のこなしなら人攫いにも対応できるだろうし、この地区でも強く生き残るだろう。

俺の名前はマックス。冒険者だ。

冒険者は迷宮の探査や調査、あるいは様々な土地での採取等が主な仕事だが、ただ調べて拾っただけの仕事ではない。

行く先々にはモンスターも蔓延っている。それらの任務に就く際には戦闘が避けられないことも多いし、なんなら最初から討伐がメインの依頼もある。

こないつつ死ぬか分からない仕事に就くのは一攫千金を夢見た田舎者か、あるいは仕事にあぶれた荒くれ者だけだ。

「ようマックス。今日も一人か」

「おはようギルマス。ずいぶんな挨拶だな」

冒険者ギルドの受付へ行くと、珍しくギルマスが表に出ていた。

「で、だ。早速冒険者ランクA。『安定の』マックスに依頼があるんだが、ちよつと良いか」

「指定の依頼か？ 珍しいな」

「依頼、というよりかはお願いだな」

促されるままに奥の応接間で話を聞く。

いつもは酒に焼けてにやけているギルマスの表情も、真面目な顔に変わっていた。よっぽどらしい。

「今朝届いた知らせなんだが、魔王が復活したとの話が出た」

「魔王？」

「そうだ。800年前に勇者が倒して封印した魔王だ」

「俺はどうすれば良いんだ？ 王都に向かえばいいのか？」

今いる町でAランクは俺以外には3人しかいない。Bランクは20人くらいだったはず。他の同じ程度の町と比べて戦力としては多いが、まあまず魔王の軍勢が攻めてきたら確実に落ちる。

人類の存亡がかかっているならこんな小さな町は切り捨てて王都に戦力を集め、決戦に備えるだろう。

「いや。実力的にはSに近いあんたでもソロなら王都に向かった所であぶれるだけだ」

「ひでえ。で、いい加減パーティーを組めと？」

「それも違う。お前さんに釣り合うメンバーがいない」

「じゃあなんだ」

「弟子を取ってもらいたい」

そう言ってギルマスが差し出したのは国からの依頼書だ。拒否ができない。

軽く目を通せば、Aランク並みとは言わないが高い技量の戦士を揃えるためにBランク以上の者は弟子を一人以上取るようにと書いてあった。

代官が来ることもあるだろうし、引き取って終わりじゃなくある程

度教えなければいけないか。

面倒くさいが、反逆罪と言われるのも面倒だ。

「弟子ねえ……。返事は？」

「なるべく早く頼む」

ソロAランクの俺の弟子な訳だから、実力がそれなりでなければすぐ視察か何かでバレる。

かといって元から冒険者の奴を弟子にとっても、活動記録でバレるか言うことを聞かないかで面倒になるだろう。

他人の力に驕るやつなんか弟子に取る気もさらさらない。

「冒険者ではなく、冒険者並みの実力を持ち、かつ俺の邪魔をしない。いるか？」

「無茶を言うな。ある程度はごまかしてやるから」

まあそうだよな。冒険者としてやっていける実力があるならもう一人立ちしてる。

「冒険者志望の孤児でも引き取って、ある程度仕込んで依頼に同行させる。これくらいならやってくれるか？」

「考えとくよ。一応また夜に来るから候補がいれば教えてくれ」

弟子を取るにしても、俺の受けられる依頼ってB以上なんだよな。Aランクになると下位ランクの依頼が取れなくなる。

初心者……それも、冒険者になりたいと喚く子供なら言うことも聞かず相手との力量も分からず突っ込んで死ぬのがオチだ。

となればしばらく依頼も受けず講座に指南をする事になる。気が進まない。

なんならさつき見かけたあの道化師の少女でも引き取った方がマシかもな。

冒険者ギルドで適当な依頼を受けて町から出た。

この町に高ランクの冒険者が多い理由の一つに、町の外に広がり迷宮が点在している魔の森の存在がある。

迷宮が多ければ町へ来てしまう魔物も多くなるので、町を守るために強い冒険者は多くいるのだ。

「はっ、よっ」と

魔法を使うコボルトの眉間を投げナイフで貫き倒し、正面のスケルトンを盾で殴りひるませてから蹴り飛ばし、左にいたオークの首を斬りつける。

連携を取るとはいつても魔物。恐れず大胆にいけば意外と楽。

俺はソロだから投げナイフとか色々持って戦うが、これが2人パーティになるだけでもだいたいぶ楽になるだろう。

俺がそうしないのは、単純に関係作りが苦手というかうまくできそうにないからだ。

「弟子ねえ」

背後から迫っていたスケルトンを返す刃で斬り伏せる。

近くにいられては俺が自由に動けない。邪魔になるし後衛にしようか。

弓は離れすぎて何かあった時俺のサポートが追い付かない。後衛というより中距離？ あー、魔法剣士とか良いかもな。

ただまあ、魔法剣士は適性が必要だし自分には才能のある特別な人間と傲ったやつが多い気がする。

「二応候補を聞いて、マシなのを選ぶか」

人間関係なんて面倒だ。

ともかく弟子なんて俺の邪魔をしなければいい。

……

……

……

「マスター、りんご酒」

「あいよ。どうした、ひどく沈んでるじゃないか」

「まあ色々あるのさ」

裏通りにあるいつもの酒場。こじんまりしているいい所だ。

結局あのあとに候補を聞いてみたが、どれもピンとくる奴はいなかった。



やる気があるのは良い、だが、どいつもやる気があり過ぎる。何が「よろしくお願いします！」だ。堅苦しくてやってらんねえ。

「……なんだ。俺の顔が何か変か」

「最近来なかつたが、見ないうちにマスターの愛想笑いも型についたんじゃないか？」

「ああ。おかげさまでね」

マスターが肩を竦める。

何か面倒な客でも来るようにでもなつてしまったのだろうか。

静かな飲み場だから好きだったが、騒がしくされちゃたまらん。

「違う違う。——そうだな、丁度そろそろか」

手招きされ裏口へ案内される。

日の暮れた薄暗い普通の裏路地だと思つたが、そこには野良猫に混じり今朝見たあの道化師の少女がいた。

こちらに気が付いた少女はぺこりと頭を下げると、足元の猫を踏まないようにステップを踏みながら空き瓶のジャグリングを披露する。

やはりというか、器用だ。

一通りを終えるとマスターが愛想笑いを浮かべ、扉の傍に置いていた腐りかけの果物や生ごみが入った箱をゴミの集約場へ置く。

短い公演を終えた少女はにへらと笑い、ぺこぺこ頭を何度も下げている。

「——あれは？」

店に戻り聞く。

マスターの愛想笑いが良くなった理由は、あの少女に向けてのものだった。

ただ、ゴミを捨てるだけなら笑みを浮かべる理由もない。

聞いてみるとため息とともに教えてくれた。

「結構前の話だ。ゴミを捨てるために扉を開けたらあの子がいてな。ゴミを漁られちゃかなわんと思つてゴミを引つ込めようとしてら、そしたら慌ててさつきみたく芸を披露してな。芸の質と恰好がちぐはぐで笑つちやつたよ」

「確かに、質は高いな」

「物乞いに負けたと思ったよ。そのままゴミを捨ててやった。自由に漁ってくれってな」

それから毎日来るようになったと。

「あいつなりにプライドがあるらしくてな、道化らしく誰かを笑わせないと褒美を受け取らないらしい」

「笑ってやらないと食わないのか。じゃあ放ってゴミ捨てたらいいじゃねえか」

「……情がうつつちまっただらうなあ」

しかし引き取ることはできない。

住民として登録されていない人物を匿うというのは、犯罪者を招き入れたと解釈されても言い逃れできないからだ。

マスターにできるのはあくまでゴミを捨てたら食べられたというてい。それ以上入れ込めば何か言われても仕方ない。

「あんたも大変だな」

「マックスほどじゃねえ。お前さんもパーティーに入らないかと言われ続けているんだろ？」

「今は弟子を取られて言われてるさ。それも、国から」

「お互い難儀だねえ」

「だな」

店を出て少し裏路地を覗くと、座り込んだ少女がりんごをちまちまと小さい口で一生懸命に食べていた。

足にすり寄ってくる猫を撫でて口がにやけていることに気が付くと、大きさにしまったという顔をしてから持っていたりんごの欠片を与えてやる。

人を笑わせたらその褒美に食べ物貰える。逆に笑わせられたら、食べ物を与える。

見ていると胸を締め付けられるような光景に、気が付けば俺は歩み寄り声をかけていた。

「お前、名前は？」

「——名前、お名前？」

「お前の」

「じゃ、の、とす、リゴレーヌー！」

それは名前なのか？

おおよそ人に付ける名前とは思えない。

何か舞台の名前をそのまま覚えてしまっているのだろうか。

「そう名前です。リゴレーヌの名前だよ」

少し喋り方がぎこちない。それでも礼儀はしっかりしているようで、ピンと背を張り目を合わせる。

思ったより背は低いな。……胸はあるが。

「家はあるのか？」

「家？ お家？ 壊れました、ばらばらになりました。リゴレーヌは唯一の生き残り」

「生き残り？」

器用にりんごの芯を指先でくると回しながら教えてくれる。

行儀が良いのは一瞬で、基本的に落ち着きのない方らしい。

「リゴレーヌは旅の一座でした。旅の途中にお客さんがきました。お客さん、笑わせないと殺された。から、笑わせたよ？ そしたら、最後まで残った。ました。めでたしめでたし」

「なるほどね」

どうやって町に来たのかは知らないが、盗賊か山賊に襲われた時に相手を客だとも思ったのだろう。いつものように芸を披露したらその滑稽さから情けをかけられたというところだろうか。

しかし旅の一座か。確かこの町に来るって予定だったのが事故でこれなくなったらしいが、もしかしてそれだろうか。

結構有名どころだったらしいが……。

考えに耽り思わず少女を睨みつける形になってしまうと、少女は慌てて下がりペこりと頭を下げ、瓶を幾つか手に取って宙に放り投げた。

「待て。俺はお前を殺す気はない」

「今は？ 後は？」

少し歪んでいるとは思ったが、そうか。恐らくだが元々はこんな性

格でも口調でもなかったはずだ。

事情も色々あり歪んでしまったのだろう。

誰かを笑わせないと明日を生きられないと思ってしまうほどに。

「冒険者になる気はあるか？」

だから俺は、無意識に手を差し伸べていた。

多少強引ではあるが、弟子にすれば衣食住を保証する保護者として振舞える。

ギルマスに話を通せば何とかしてくれるだろう。

身元の分かっている盗賊に襲われた旅人であれば、保護すると申請して通らないことはない。

……まあ、本当に強引が過ぎてギリギリを攻めてはいるが。

「リゴレーヌは道化師です。永遠の」

「知ってるさ。冒険者のジョブ……役割の一つに道化師がある。お前は道化師として戦場に立って、役に立つ。魔物を倒して皆を笑顔にする。どうだ？」

「道化師は、道化師？ 冒険者？」

だが、リゴレーヌの方は意味が分からないといった風だ。

考えることを放棄してするようにも見える。

「俺が決めた。今日からお前は俺の弟子だ。話を通すからついて来い」

「はい師匠！」

一方的に告げれば断る気もなく、素直に師匠呼びするしついてきた。

気が重い。今更になってどうして拾ってしまったのだろうと後悔している。

俺もお人よしだ。同情でこんな面倒な事を引き入れて。

だが、

「悪い気はしないな」

冒険者として役に立つかは不明だが、こうして俺の弟子は決まった。

## 道化師の実力。

「それでお前、裏路地にいたやつを拾ったってのか。ええ？」

「ちゃんと住民票は何とかできるんだろうな」

「あー。本来なら断りたいが、お前さんの顔を立ってやっといてやるよ」

翌日。

冒険者ギルドへ顔を出しリゴレーヌの事をギルマスに告げ、何とか弟子として認めて貰えた。

先日と俺の面談で弟子として弾かれた連中が数人おり、リゴレーヌの事を睨みつけている。

当然だ。「釣り合わん」といって弾かれたのに、翌日になったらこいつにする裏路地から拾ってきた子供を見せる。どういう事かと思うだろう。

「失礼ですが、その人が弟子ですか？ そんな剣も握った事のない人より、ボクの方が似つかわしいと思うのですが」

当然、突っかかる。

だが相手が悪い。

少年がリゴレーヌの方へ歩み寄ると、リゴレーヌは軽い身のこなしで近くのテーブルへ飛び乗り火のついたロウソクを蹴り上げて手に乗せ口元に寄せると、ふーっと息を拭く。

ロウソクの火は真つすぐ伸び、隣のテーブルで消えていたロウソクへ火を映した。

火炎放射だ。こんな芸も持っていたのか。

「な、な……」

驚く少年を見て気分を良くしたのか、お次は少年の腰に下げられていた剣を引き抜くとワザとらしく「おつとつ」と言いふらふらと振り回す。

しかしどこも傷つけることはなかった。ふらふらとしながらも、剣先はしっかりと制御されている。

「おつとつとー！」

すっぽ抜けた。

剣はひゅんひゅんと回転しながら開いていた窓を抜けて飛んでいき、消えていった。

「何をしているんだ、お前はー」

少年のいう事ももつともだ。

しかしリゴレーヌは慌てず、ゆっくりと少年の腰を指さす。

そこにはしっかりと剣が鞘に収まったままになっていた。

「い、一体いつの間に……」

「道化師っていうより手品師だな」

俺の発言にむっとした表情になるが、手元に小道具の一つもない。

何も出来まいとくくっていたが、何を思ったのか宙返りを繰り返しながらぴよんぴよんとテーブルを歩き来する。

しかしある時、一番目立つ位置でミスをした。

ふちにつま先を着けたがそれだけではバランスを取れず、慌てて手をばたつかせるが意味もなく落ちてしまった。

ドスンと床へ落ち、盛り上がっていたギルド内が静まり返る。

「……お、おい？」

その身のこなしに驚きつつも感心していた少年も、心配した。

だがまあ、心配はいらないだろう。

「失敗しました。失敗です」

床に倒れたまま、ひらひらと手を振っている。

ワザと失敗して笑わせようとしたのだろう。道化らしく。

だがこの場は道化師の舞台ではない。誰も笑う人はいなかった。

「とまあこの通りだ。ちよつと頭はアレだが身体能力は御覧の通り。

さて少年、お前は何ができる」

少年の闘志は消えていなかった。

リゴレーヌから目を離すと真つ直ぐ俺を見て、「剣を見てください」とだけ言った。

正直相手にするのが面倒だな。

「これを貸してやる。——ここに置いた盾の真ん中を狙ってあそこから投げてみる」

俺の戦い方は割とこの町じや有名だ。生き残りたければ「安定」の名を持つマックスの戦い方を参考にしろと言われるほどに。

当然、俺の戦法の中にナイフ投げが含まれているのも知っているだろう。

少年にナイフを三本渡し、安い盾を立てかけ指さす。

「行きます」

一本目は当たるが弾かれ、二本目は握りが当たり、三本目でようやく軽く刺さった。

「あの、ですが——」

「リゴレーヌはどうだ？」

立ち上がったリゴレーヌに三本投げ渡す。

さも当たり前といった風に投げられたそれをジャグリングへ繋げ、そのまま投げた。

まっすぐ放たれたナイフは綺麗に盾へ吸い込まれて行き、真ん中へ三本連なって刺さる。

「ふ、ふふふふ、どうでしょう？ どうでしょう？ 百発百中ナイフ

投げ。リゴレーヌは絶対外しません」

もう一本渡してやる。

「あれま」

次のナイフは盾を逸れて壁に刺さった。

どうせオチに外すと思っただき。

「こういう事だ少年。諦めな」

「どうでもいいんだがなマックス。荒さないでくれ」

普通にギルマスに怒られたのがオチだったがな。

やってきたのは魔の森の入り口。

あまり危険な奴はいないが、何が起るのか分からないのが魔物。

「さてリゴレーヌ。魔物と戦った事はあるか」

「お客さん？」

「おきや……うん。まあ間違っではないが……」

まねかれざる客とは言いが。

そんなことを言っていると、さつそく森からコボルトが出てきた。

コボルトは剣と魔法を使う面倒な相手だ。できるなら先に仕留めたい。

「こういう時にお前の得意なナイフ投げが役に立つ」

「おー」

面倒とは言ってもダンジョンからあふれ出た奴なんて大したことない。低レベルな相手だ。

いざとなれば俺の援護もあるし、大丈夫だろう。

ナイフを渡してやる。

「笑わせない相手、は、殺す?」

そういえばこいつ、笑わせないと明日が無いと思ってやがった。

「魔物は人の笑顔を奪うやつだと思え。奴らを倒せば笑顔になるやつがいる」

「そっか、そっか? ふ、ふふふ、この身は人を笑顔にするのが趣味です仕事です。今は道化で冒険者。魔物討伐なんのその。倒して見せよう笑顔の敵を」

軽くナイフを上へ投げ、前転しながら踵でナイフを放った。

茂みに消えると同時にオークの死体が出てくる。

そいつの存在は気づいていたし向こうも様子を伺うのみだったから放っておいたが、よく気付いたな。

目の前のコボルトは危ないので俺もナイフを投げて倒しておく。

「笑顔の為なら強くなれる、ます! ので!」

「のど〜」

「強いことをしましうか!」

元気よく言っつて両手でナイフを構えるが、残念ながらそれは投げナイフなのであまり接近戦に使える強度のものではない。

……あれ、さつき渡したナイフって一本だけだよな。なんで二本持っているんだ?

自分の手元を確認しても減った様子はない。



魔物に刺さったナイフもそのままだし計三本。あれ、増えてない？

「ふふふふふふ、ふふふ、ふふふふ。笑顔の為なら頑張ります」

「あー、無理はするなよ」

いつの間にか四本まで増やし得意のジャグリングをしている。

まあいいや。技量があるなら身の守り方でも教えよう。攻撃面に  
関しては正直Bランク以上かも知れない。

「リゴレーヌ」

「はい？ なんですか、なんででしょうか？」

一閃。

俺の剣がリゴレーヌの首元を捉える。

「お前は守備に不安が残るな。相手の攻撃は避けるか防ぐかして無傷  
に抑えるのが好ましい。戦闘中は常に警戒しろ」

「おお、恐ろしい。恐ろしや。リゴレーヌは殺されてしまうのか」

「殺されないためにだ」

「なるほどー」

本当にわかっているのだろうか。

六本まで増やしたナイフをしまうと、ペこりと頭を下げる。

ボロ布の軽装だというのにどこへナイフを消したんだろう。

「でもリゴレーヌは平気です。大丈夫です。笑顔の為なら死ぬことは  
ない」

「だと良いがな」

「シヨ一の終わりはカーテンコール、そこまで努めて参ります」

「人生の幕は絶対に降ろすなよ」

「分かっております分かっておりました」

族から逃れ町へ生き延び、治安の悪い所で目立つことをしても平気  
でいたその運があればちよつとやそつとじゃ死にそうにないな。

運というのは意外と必要な物だ。

「だが、運だけでは何ともできないこともある」

リゴレーヌの後ろから飛んできた矢を盾で防ぐ。

スケルトンの中には弓を使うやつもいる。出現確率的には低いが、

故に出た場合は面倒くさい。

「投げる？ 投げます？」

「見えるか？」

「当たります」

もう一つ飛んできた矢を剣で弾く。

リゴレーヌは弾かれた矢を拾うとダーツでもするかのように構え、山なりに投げた。

茂みの向こうで骨に当たる軽い音がするが、致命傷にはならなかったらしい。まだ矢は飛んでくる。

「当たりましたよ素晴らしい。……おやや、当たっても意味がなかった？ これはしまったどうしよう」

「普通にナイフを投げろ」

「はい」

踊るような動きでナイフを八本放り投げ、ジャグリングをしながら一本ずつ順番に投げていく。

もうどうやって増やしたかも仕舞ってたかも気にしないことにした。

そしてこいつの事だ。どうせ……

「全部外したな」

「ありやありや？ ありやりやりやりや？」

原因は何だろうか。

ふざけているっていうより、笑いを取るための道化の癖が抜けていないというか。

いつそのこと、乗ってみるか。それで相手を攻撃するように仕向けてみよう。

「よしリゴレーヌ。よく相手の頭を狙え」

「よくよく」

「投げろ！」

「ほいっ」

カッ！

外れて幹に刺さった。

「やっぱ無理か。ナイフなんて投げ捨ててしまえ」

「ごめんなさーい」

リゴレーヌが肩をすぼめながら相手に背を向けて、手に持っていたナイフを後方に——つまりは相手の方向へ投げ捨てる。

捨てられたナイフはくるくる回転しながら放物線を描き……。

「当たったじゃないか!」

「わーお!」

スケルトンの頭を壊した。

やはりな。

連続で当てたらそのオチに外すのだから、連続で外したオチは命中だ。

道化師リゴレーヌ。使いこなせばかなりの腕になる。

ただ、その動きが予想できないのが残念だ。

## 食事事情。

店に入り椅子に座らせても、パンを目の前にしてもきよろきよると周りを見渡しているリゴレーヌには状況が一切伝わらなかつたらしい。

「メシだ、メシ。お前の」

「おややや、リゴレーヌは笑わない食事でしよう？ まだですすだま。公演は行っておりません」

「人を笑わせなきや食わないってか」

「そう師に教えられたので。おや、でも今は師匠はあなた様でしようでしたかな？ ふむむ」

「今の師匠は俺だ。食っていいつつつたら食え」

「分かりました！」

そう言つて躊躇いなくかぶりつく。

もし俺は公演をしないと云えば餓死するまで食べるつもりもなかつたのだろうか。

「むぐ……。流石にお水は飲みましようですよ、します飲みます。倒れるなんてもつたいたい」

「お前の中の常識が知りたいよ、俺とは全く別な所で生きてる」

「それもそのはず他人です。まさかりゴレーヌが2人？ いえいえどちらか偽物です、当ててみましょうトリックです」

両手を合わせて開くと、中から人形が出てきた。

リゴレーヌの左手の指の動きに合わせて動き、ペこりとお辞儀をする。

道化師の格好をさせているし、これが偽物のつもりだろう。

「おやつや、ややや。残念！ こっちは偽物です」

「あ、おい！」

人形を持っていたリゴレーヌが急に力を抜いて、椅子から転げ落ちる。

慌てて席を立つと、もうどこにもいない。

「じゃんっ」

声がしてテーブルの上を見ると、糸吊り人形がひとりでに動いて両手を広げていた。

「おい、まさかこれがお前だって言うんじゃないだろうな」

問いかけると、人形も力が抜けてへたりこむ。

「正解はこっちでえす！」

何かに釣り上げられたかのように、目の前の席へリゴレーヌが地面から戻ってきた。

動きもそうであるが、今の瞬間は一体その肉体をどこへ消し去っていたのか。

「……かそもそもその人形もどこから出したのか。」

「……食事の時くらい静かに食え」

「あらま、あらまあらま。怒られてしまい申した」

今日のナイフ投げといい、魔法の才能でもあるのか？

王宮の魔術師でも透明になる魔法や複製する魔法なんてものはないと聞くし……。

「焦る事はないか」

「？」

例えとんでもない大天才だとしても、それを活かせる思考はしてない。

リゴレーヌは道化師として何かをしようとする無意識に力を使っているだけだ。

幼少期に偶々魔法を使えたからといってそれが天才だという保証はないという話もある。

「そういえば、お前は どうして道化師を始めたんだ？」

「ふん？」

「答えたくないならいいんだが」

そう聞けばリゴレーヌには珍しく少し悩んだ顔をしたので、先に止めておく。

「道化師とは仮面で素顔を隠したもののなんです。おいそれと話す事ではない」

「理由はともかく、少なくとも事件でも起こしてなきやいいさ」

その帰り道、家へ向かっている途中で突然リゴレーヌが「あつ」といい足を止めた。

「どうした？」

「んーん、ふっふー。ところでリゴレーヌは今日の公演があります。ありました。あれま」

「公演？」

別にそういった話は聞いていなかったが。

というかそもそも、雑技団は解散したんじゃないか。

「猛獣の世話もあります。こればかりは譲れない」

「待て、猛獣ってなんだ」

隠れてどこかに虎でも飼ってたのか？

もしかして俺はとんでもない奴を弟子にとっちまったのか。

いや、もう戻れん。

「……案内してくれ」

「人はそれを楽屋裏と言います。言いました？ 違う気も。ではこちらへ。こちらへではら」

奇妙な言い回しをする小さな背中を追って迷路のような裏路地を進むと、俺でも見覚えのある場所に辿り着いた。

俺が初めてリゴレーヌを見たあの一角だ。

「今日の公演についてくるものは尻尾を立てよう」

「猛獣って、猫の事か」

「良いでしょう良いでしょう？」

声をかける……と言うよりも姿を見せただけですり寄り、屋根に乗っていたのが頭に飛び乗るくらいには懐かれている。

「って事は、それでマスターの所か」

「そうですそうです。観客にいた御師様がリゴレーヌを引き抜いたあの場です」

ちらりとカーテンから覗くりゴレーヌの生活スペースを見れば、芸

に使ったであろう小道具の数々が見えた。

他には替えの服や寝るスペースも見えないし、楽屋と居住スペースは別なのだろうか？

移動した先はやはりマスターの酒場だったので、途中で別れて俺は店内へ行く。

俺は道化師でもないし客席へ行くと言えばひらひらと手を振ってくれた。

「マスター、ちよいと話があるんだが」

「知ってるよマックス。あの子を弟子に取ったんだな」

席に着くと同時にマスターがサービスとして一杯くれる。

「常識のない奴だ。まだしばらくは事あるごとにここの裏手に来るだろうが……」

「ああ、いいのさ。いつの間にかふらつと消えられたらと心配で堪らなかったところだ。マックスが引き取ってみてくれるのなら安心だ」

「……正直、俺もどう接したらいいのかわからんがな」

「子供もいないんだ。手探りでしようがないさ」

さて、と締めてマスターが裏手へ向かう。

公演の時間だ。

## 道化衣装とお金。

「お洋服です衣装です、ふむふむ道化は派手が基本。このこの道化のお目に敵うか？」

「俺がお前に買うのは普段着だ」

「あれま」

買う、といっても古着で流れてくるものだ。

金はあるし新品でもリゴレーヌの欲しがつてる道化の服でも用意できるが、弟子には新品を与えないというのがルールらしい。理由は知らん。

「うむむ。派手でなければ色もない。弟子であるゆえ事は言えぬが、これを着まわせリゴレーヌ？」

「替えの服と下着がありや大丈夫だろ。必需品とかは買ってやるから、他になんか欲しい物は自分の金で買え」

「そうですねでした、弟子でした。仕方あるまし小遣い稼ぎ？　しまつたチケットどこにもない。もぎりと公演同時に進行うむむむむ」

「いや普通に冒険者としての依頼料から小遣いは出さず。タダ働きはさせられないからな」

リゴレーヌ相手には無いと思うが、金が原因で裏切られたなんて話もあるくらいだし。

「そうですね、今は道化で冒険者。笑顔の敵を蹴散らして、稼いで見せようリゴレーヌ」

所でどうして今日のこいつはリズムに乗せて喋ってるんだ？

喋り方が独特なのは前からだが、やけに耳につく。

「御師様は道化に詳しくないご様子。道化師とは芸をするだけが道化にあらず、歌や踊りも得意なのです。歌ってみましょう？　噴水前で公演は好評でした。ありや、あれは酷評？　石が当たるととても痛い」

「ご機嫌とかじゃなくて歌の練習ね。……つか、石ぶつけられたのか」  
「繫げましようジャグリング。お歌と合わせて2つを一つ、続けて続けて記録は何十？　うーん、何個でしょう」



「投げられた石を技に繋げたのか」

「流石に限界ありますか？ いやはや修行不足」

リゴレーヌはやけに気にしてない風だが、絶対にそれは盛り上げる為の追加で投げられたものじゃないと思う。

邪魔だったのかうるさかったのか、ともかく止める為に投げられた石の筈だ。

本題である衣類から外れた頃、露天商の集まる一角へ辿り着いた。いつ来ても熱気にあふれたこの市場は見ていて飽きない。

「あちらのピンは投げるに良さそう。おお、あれは東のチャンバラ！ 珍しい？ いえ珍しい！」

「色々知ってんだな」

「生まれ故郷は知らずとも、旅の一座はあつちにこちらによつこらせつせと歩きます。ふむふむ色々覚えてる」

「余計なものは買わんぞ」

「そりやままいらないものですし」

猫を模した木彫りの置物に興味を引かれたのか止まりかけるが、声をかけると素直に着いてくる。

反発もしなければ不気味な程従順な訳でもないリゴレーヌの距離感は、下手な奴を弟子に取るよりマシだと時折思わせてくれる。

……まあ、言葉も行動も意味不明な事が多いが。

「おっさん、こいつに合うサイズで一式揃えてくれ」

「ん？ ……なんだマックス、弟子ってのはその女の子の話だったのか」

「なんか悪いか？」

「いや。思ったよりべっぴんだって思ってたな」

「そりやどーも。じゃ値引いといってくれ」

「相変わらず雑な交渉だ」

奥の部屋に連れて行った古着屋の店主の言う通り、リゴレーヌは普通に美人の部類には入る。

裏路地においてよく拉致に合わなかったものだ。

もしかしたら合っていたのだろうけど、賊から逃げ出せるリゴレー

又だしな……。

最初に会った時は情けをかけられたと適当に考えていたが、こうも普段の行動というか奇術を見ていると自力で脱出したんじゃないかと思えてきた。

縄に縛られても抜け出せそうだし、牢屋に入れても視界から外せば違うところにいたり。

「……道化師っていうよりか、手品師だな」

「失礼な！ リゴレーヌは誇り高き道化の一人、そこは絶対譲れぬ所。御師様といえど容赦はします？ いえしません」

「悪かったよ」

戻ってきたリゴレーヌに呟きを聞かれて怒られた。こだわりがあるらしい。

「分かればよいよい道化道。我が心は水たまりのように深く広いのです」

「浅すぎ」

「あと先ほどの店主様、御師様にまた来て欲しいとおっしゃってたような？ また来ます？ またどうぞー！」

「それで、おっさんはどこ行つたよ」

「さあさ？ 怒られてました。うむむ、職人も弟子は大変だ」

顔も良くて胸もあるのに無防備なりゴレーヌ相手に何かやらかしたんだらう。

奥さんが怒ってくれるなら俺としてはこれ以上することは無いが、もうこの店にリゴレーヌを連れてくることはない。

うちの弟子はやらん。

「おっさん、代金は置いとくぞ」

カウンターへ適当に銀貨数枚を放ると奥から半泣きで返事が来た。結構ガチ目に怒られてるらしい。

外へ出て歩いていると、くいくいと袖を引っ張られた。

「銀貨です？ いや銀貨！ 結構お高い一式お古」

「お前の価値観は知らんが、こんなもんだぞ」

「ちなみにリゴレーヌのお賃金は？ 昨日も戦いナイフを投げた」

「そうだったな」

正確には依頼で赴いてはいないが、戦ったのは事実だ。それに戦えばお金が貰えると認識させておきたい。

いくらくらいがいいだろうか。初回にあまり多く渡してもな。

「昨日倒したのはオーク一匹にスケルトン一体。依頼抜きの遭遇戦だからまあ、合わせて銅貨10枚って所か」

「おおー！ 初めて稼ぎが生まれた。お金を持ったのは初めて？ そう、今までない」

銅貨を放つてやると嬉しそうにジャグリングを始め、指先に10枚重ねて着地させる。

最初にあつた時に銅貨は投げてやったと思うが、となれば一座にいた時代の話だろう。

「今まで金を貰った事なかったのか？」

「笑わせたら食事が出るのですよ。故に道化は笑わせる、お賃金？ 上納です」

「……お前……」

一座にいた時のこいつがどんな境遇だったのかは分からないが、少なくともお金が貰えない立場にいたわけではないはずだ。

性格を良いように扱われ、ただの見世物にされていたのか？

吊いという訳ではないが賊にお礼参りでもしたい所であつたが、その気も失せた。

「おっと勘違いなさらぬよう。リゴレーヌはおかげで毎日が楽しいのですよ？ 心から笑わぬ者は人を笑わせられぬ。顔も心も笑って道化、さあ！」

「……ふ、それもまた幸せかもな」

いつこいつが自身の不幸さに気が付くか。

それは分からないが、少なくとも今は不幸せな訳ではないと思う。というか、俺はそうはさせない。弟子がそうなつては寝心地が悪いからな。

## 武器屋の娘、クラリス。

朝食を食べながら今日の予定を考える。

馴らしにまた魔物討伐には赴くとして、リゴレーヌの武器をどうするか。

ナイフ投げの腕は確かに良いんだろうが、それを活かせる性格をしてないのが致命的になる。

俺の二つ名として広まっている通り、俺は安定を取った戦い方を好んで行っているため不安定なりゴレーヌは正直合わない。

だったら盾でも持たせて道化師というジョブの役回りの通りヘイトを集める役目を任せたいが……。

「何か不備でも質問を？　まさか追い出す追い出された！」

「そういう訳じゃない。前にも言ったが俺達のメインは魔物討伐だ。お前をどう戦わせようかと思っただけ」

「ふーむ。戦いです、戦いでした。流れて終わるのが流れです。そう、流れ」

「何の話だ？」

「演技とは経って流れて終わるのです。川は止まらずなるように流れるしかないのです」

「意味が分からん」

「あれま。あれまあれま、あまれあれま、あれま」

焼き魚にナイフを刺して宙に放りそのまま口へ。

喉に刺さるんじゃないかと心配になるが、こいつの場合は剣でも飲み込めそうだ。

言ったらやるだろうし言わないが。

というか、そのナイフはいつの間にか大量に増やしてた投げナイフの一つだろう。返してくれ。

「そうだった御師様の持ち物。してリゴレーヌはこれからどうしましょう？　貰った銅貨を投げましょう！」

「その前にどうやって増やしたんだ？　また手品か」

返却されたナイフは合計して20本にもなっていた。

使い捨ての消耗品だから別に多いに越したことは無いが、どうやったんだか。

「奇術の一つです、ほいっとやって目にも止まらぬジャグリング。ぱっとやります」

一本手に取って、右手から左手へ投げると既に増えていた。

まだ動体視力には自信があるのだが、全くタネが分からない。二枚のランプをずらすようにするりと増えてる。

「やっぱ魔法だよなあ」

「行き過ぎた技術は魔法とも呼ばれ蔑み？　いいえ誉め言葉です。でした。なぜなら！　せならせらー！」

「見分けがつかない程うまい、と」

「流石御師様理解力！」

「原理は分かかってないがな」

無意識に魔法を使ってると思えないが、リゴレーヌの言葉だと技術らしい。

これはこういうものとして考えていかないとやはり駄目だな。

「さて、飯も食ったし行くぞ」

「公演です？　よし」

「ちげえよ。武器を見に行くんだよ。一応冒険者だからお前の手に合った物を買うぞ」

「そうでした今は冒険者。なんの冒険でしょう？　そう人生は冒険なのです」

「語るじゃないか」

ぶつかつたり転んだりするんじゃないかと心配になるふらふらとした歩き方のリゴレーヌを引き連れて、大通りから少しそれた所にあるこじんまりとした工房に入る。

特に看板も出していないがここがいい。

扉を開けると背の低い、ドワーフの娘が出迎えた。

「マックスじゃん、久しぶり」

「ようクラリス。相変わらずしけた店だな」

「挨拶だねえ」

「お前が合言葉だっつって言わせてるんだろうが」

「はいはい」

顔なじみだし合言葉もいらないうらなうに。

奥の部屋へ通されると、ここまで黙ってついてきていたりリゴレーヌが飾られている武器や防具の数々に目を輝かせ騒ぎ始めた。

工房は別にあり、そこで作った物の中で選ばれた品質の良い物がここで売られている。

高ランクの冒険者の中でも信頼できる連中同士でこの場所と合言葉を伝え合う為、弟子を連れてくる事はないんだがリゴレーヌなら平気だろう。

といっても、店番をしているクラリスはリゴレーヌの事を知らないので怪訝そうな顔をしているが。

「この子は？」

「名前はリゴレーヌ。国から弟子を取れって言われたから拾ってきた」

「拾ったあ？ 悪い子じゃないんだらうけど、この子大丈夫なの？」

「ある意味大丈夫じゃないが、まあ言いふらしたりはしないだろ」

「ホントに？」

「だったらリゴレーヌとちよつと話して見ろよ。わかるから」

勝手に商品に触ってはいけないと分かっているものの危険意識が低いのか、剣先に顔をものすごく近づけていたリゴレーヌに話しかける。

「ねえ、君はどこから来たの？」

「どこからでしょうか？ リゴレーヌはいつも旅の途中だったので。いえ今も旅の途中？ 旅は道づれ」

「……そっか。この武器を使いたいつてのはあるかな」

「この前はナイフを投げましたよ。ひとつをふたつ、ふたつをよつつ。ほほいと増やして投げました。ぱちぱち」

「ナイフかあ。でもそれってメインじゃないよね」

「メイン？ 主はそう！ リゴレーヌは道化師です。道化は楽しみ楽しいですよ！ 楽しんで！」

「えっと、武器の話をしたいんだけど」

「武器？ リゴレーヌの武器はこの身体！ しかし今は衣装もない。芸には自信がありますりありますすが」

「あー、うん……」

大げさに頭を下げたリゴレーヌを見て、クラリスが諦めて戻ってきた。

「な、大丈夫だろ」

「ある意味大丈夫じゃないけど。よくこんなの拾ってきたね……」

「……ま、な」

拾った直後に後悔もしたが、下手な弟子よりかはマシだ。

確かに会話が成立しない事が多々あるが、行動に裏がないから安心できる。

俺が仲間を欲せずソロで動いたのはそういった人の裏面が怖くてだったのだが、リゴレーヌなら。

「まさか、あのマックスとあろうお方がこの子の身体目当てに浮気？

本人がぼけぼけだからって」

「人聞きの悪いことを言うな。さっさとあいつにお似合いの武器を見繕ってやってくれ」

「さっきのやり取り聞いてたよね。無理だよ」

「それを何とかするのがこの店だろ？」

「無茶ぶりって知ってる？」

「しけた店だな」

「出禁にするよ」

「それは困るな」

リゴレーヌのおふぎけがうつったな。

おふぎけの元凶である道化師様の首根っこを捕まえる。

「おやや御師様。何か御用です？。でした。まあ！」

「お前は身軽だし相手の攻撃を避けるのも得意だろうが、あえて受け止めて隙を作る事も必要だ」

「ほうほうっ！」

なんか分かってなさそうだな。

「避ける一辺倒じゃ客は飽きるから偶には防御を織り込む。どうだ」

「お客さんを飽きさせるなんて！ 流石御師様指摘力……」

「回避と防御、その二つの選択肢があれば負傷も減るだろうし、お客さん〴〵も喜ぶ」

俺の言うお客さんは魔物の事だし、喜ぶと言うのも相手への煽りだ。

……リゴレーヌより、よっぽど俺の方が裏があって嫌な奴だな。

「じゃありゴレーヌちゃんは軽装備ね、任せて！」

クラリスがりゴレーヌの手を引いて防具の置いてある一角へ連れて行った。

サイズの調整と種類の選択は任せていいだろう。

近くに置いてあつた椅子に腰かけ、傍から見て仲良く見える2人の背中を眺める。

会話が噛み合っているようには見えないがまあ問題ないだろう。

「いや問題だらけだよ!! マックスちよつと見てないで来てよ！」

「御師様！ 光る物は？ 光らせてよい？ 光る腕輪！」

「そんなの無いよ！」

……クラリスに任せておけば大丈夫だろう。

「見捨てないでよ！」



## 再選再戦

防具は小手とブーツのセットが一つずつ。胸当ては合うサイズがないとクラリスが吐き捨てるように言っていた。実際の所こいつのスタイルは良いの部類に入るので仕方ないが、私怨が籠り過ぎではなからうか。

武器に関しては結局リゴレーヌの好みも分からないのでとりあえずサーベルとナイフを買ってやった。

一応自身の装備なので袋に入れて持たせているが、歩く度にかちやがちやと音を立てているのは大丈夫だろうか。良いものなのだからもう少し丁寧に扱ってもらいたい。

「剣術武芸、鏢迫り合い。演舞に演武も苦手にあらずのあらずあらず」

「鏢迫り合いは止めておけ。お前の腕じゃ押し切られる」

「でしようか？ なればやめましょう、舞って踊って旋風のごとし。しかとて風は鳴りやまず？ いえ鳴らすのです！」

相変わらず訳が分からん。

ギルドの方へ向かって歩いていると、ふらふらと付いてきていた足が唐突に立ち止まった。

それに気が付き向いている方を見ても雑多な市場しかない。特に気になるようなものはないと思うが。

「やっ、ほっ、うーん……」

「金で遊ぶな。どうした一体」

「いえいえですね、いえですね。そこな雑貨な露天にお一つ売ってましての三角帽。二つ三つのカラフルお山」

「……よく見えたな」

銅貨でジャグリングをしながらつま先で指した方を見れば、確かにリゴレーヌの言った通り道化師の被っついそうな帽子が売られていた。

「買うのか？」

「いえいえそんな、足りません。これが全財産。弟子は薄給、日銭もし

くしく」

投げられた銅貨が手のひらに落ち、縦に12枚重なった。

平たいテーブルの上で数枚重ねるだけでも凄いのに、片足立ちで器用なやつだ。

「……ん？ 12枚？」

「ほにやらら疑問発生学！」

「10枚は昨日渡したし、もう1枚は最初に会った頃に渡した覚えがある。1枚多くないか？」

空いているもう片方の手のひらで上からタワーを崩して、次に開いた時には両手の指の間に銅貨が均等に挟まっている。

「んー？ おひねりですよ？ この前です。道化師最高と歓声受けて投げられました。やりましたねリゴレーヌ！ ええ！ ぱちぱち」

「……もの好きもいたもんだな」

「公演ではありませんでしたかな。そこは残念、芸で褒めて欲しかった。まだまだ弟子では情けない」

「怪しい金じやなきや文句はいわんさ」

「やりましたねありがと御師様感謝の極み？ 感謝忘れず！」

はいはい。

別にこいつがこいつの金でこいつの為に買うのなら俺は文句も言わん。

「足りないならば公演せねば！」

「つか、よく見えるな」

「見えますよ、いつでもどこでもお見通し。顔を覚えて幕後の挨拶！ さようならは忘れません」

最初の戦闘でオークを見つけて倒したのはこの目があったこそか。本当に能力高いな。

俺と接する内に落ち着いてくれるだろうか？

元からこんなではないとは思っているけど、これが恒久的なものになっっていないだろうか。

「心配ですか？ リゴレーヌ。それはされとて心配不要。永遠不滅の有限なりて、天井有つての無窮なり。つまりは渺茫びようぼう運動演者。けれ

ども幕が降りれば道化も人です。カーテンコールはいつですか？それは全く分かりません」

「いつにも増して全くわからない言い回しだな。」

「理解はせずに流れるままのリズムを楽しむが良しし。それが道化を見る基本。頭からつぽで腹から笑うのです。さあ！　ワハハー！」

銅貨を仕舞いくると背を向け、大降りな動作で本来の目的地であつたギルド方面へ歩いていく。

何となくだが、その横顔が寂しげに見えた。

「お前そんなに帽子が気になるのか？」

横にならんで聞いてみると、いつもの何を考えているのかわからない、にへらと笑った顔を傾けながらこちらへ向ける。

「いえいえいえ？　なんでもございませぬよ。ただーし、道化に衣装は付き物です。目立つものは象徴となりて。顔は化粧で塗りましよう？　技術は身体で見せましよう？　でも記憶とは頭に覚えるものです！　頭とは？　道化の帽子！」

「……道化師としての拘りか」

「冒険者は何を誇りに？　剣でしょうか、それとも紋章？　なんでも構わぬ関係ない！　それは例えで例えです。やあー！」

拘りというか誇りというか、いわゆる魂的なものというか。

だが、リゴレーヌの珍しいわがままで。

ちよつとくらい……。

……いやいや、駄目だ。

そういうものは買わないって約束しただろう。

「あまれままれあ。駄目でしよう？　仕方あるまし貯金の我慢。おひねり狙いの公演開始。さあさあさあ！」

「残念だが今日はこれから魔物退治だ」

「むーん、あまり道化の本職ならぬが稼ぎの効率もつとも良きかな。さればハリキリゴゴゴゴ」

無茶をしないといいが。

ギルドで適当な討伐依頼を受けてさっそく赴こうとした矢先、扉を開けたところでいつしかの少年と出くわした。

あの弟子志願でリゴレーヌに勝負を挑んで惨敗した少年だ。

「ま、待ってくださいー！」

声をかけられたくないから早歩きで去ろうとしたんだが、回り込まれる。

というか、リゴレーヌがこの少年を客と捉えて立ち止まっているのでそんなにしなくても声をかけられただけで俺は止まらざる得ないんだが。

「ボクはあなたの弟子になりたいくて、ずっと剣を握ってきたのです！先日は確かにナイフ投げで負けましたが、得意な獲物はこの剣です！」

「つまり？」

「勝負をさせてくださいー！」

良くある返しとして「俺の利益は」と言いたかったが、いつの間にか困んでいた野次馬達が逃がしてくれそうもない。

ため息。

少年への応援ではなく、単純にからかいかいや話題の為だろう。魔王が云々と言われているのに呑気な連中だ。

「良いだろう」

断られると思っていたのか少年は目を見開き、野次馬もどよめいた。

初手で否定の言葉を言えばブーイングをするだろうよ。大げさな。

「制限時間内に勝てなければお前の負けだ」

「……望むところです」

仮にも師匠にしたい相手へ向ける言葉じゃないよなそれ。一応目上だぞ。

まあいいや、リゴレーヌ。

「公演です！ 公演ですね!? 公演！」

落ち着け。

「まあなんだ、模擬戦というかお前の戦いが見たい」

「演武です？ 項目は！」

「流れに身を任せるのは得意だろう？ 避けて弾いて観客を盛り上げさせてやれ」

「はい！」

「それと防具は傷付けるものだからいいが、場が冷める失敗はするな」  
「それは承知のちの承知。大袈裟に転びとも怪我はなく」

少年が気が付いているかわからないが、時間内に勝つという勝利条件は引き分けも負けになるということ。

公演と張り切るリゴレーヌに一太刀浴びせるのは至難だと思う。

当てたと思つたら人形に変わつてた、なんて芸もやれそうだし。

ギルドの裏手にある練習場の一角を借りての模擬戦。武器には2人に同じ木剣を渡した。不公平と言われても困る。

防具に関してはそれぞれの戦闘スタイルもあるのでお任せだ。

リゴレーヌは今日買ったばかりの小手とブーツを装備し、少年は俺の真似なのかレザーアーマーとバックラーを身に付けている。孤児だという話だし、寄付された誰かのお下がりだろう。微妙にサイズが合っていない。

「決闘ではなく模擬戦なので、当ててもいいがなるべく抑えること」

「はい！」「良いですよ、舞いましょう！」

「切っ先を差し向けて勝利アピールは無効だ。実戦寄りで基準を付ける」

「わかりました！」「ふへ、ふへへへ」

その堅苦しいのが嫌で弟子を断つてるといふのに……。

一方のリゴレーヌは真逆もいところだが。

まともな弟子はいないのか？

いや、世間的には少年みたいな態度のやつがまともに当たるんだらうけど。

「構え」

相手が例え誰であつても礼節を忘れず、少年が頭を下げる。

それを見てリゴレーヌもやけに綺麗な姿勢でぺこりとお辞儀をした。

変なところで真面目なやつだ。

「では、始め」

抜剣した少年が盾を前面に出し、果敢に斬りかかることなく動きの読めない相手に様子を伺っている。

じりじりと近づきつつ、時折牽制として軽く剣を見せるのも良い。

一方のリゴレーヌはそんな少年を気にせず剣を軽く宙に放る。

手元に武器がないのが確実になった瞬間、少年が小柄な割に素早い踏み込みで胴を捉えようとした！

「なっ」

少年の驚く声。

リゴレーヌは胴に迫った剣先を身を逸らして避け、そのままくると後方回転しつつ少年の剣を蹴飛ばし、空中にあった自分の剣を手にとると逆に胴を斬り返し戦いを終わらせた。

「あれまっ？」

実践でなら少年の方が安定して戦えるだろう。

しかし、この場はリゴレーヌの勝ちだ。

「あ、あの！ もう一度、今のは不意を突かれて……！」

納得していないらしい。

それもそうだろうな、打ち合いもなく綺麗に返されて負けたのだから。

悪いが、ルールはルールだ。自信があるとか不意とか関係なく負けは認めて……。

「演武はまだまだ序盤も序盤！ さあさ！」

……あいつまだやる気なのか。

蹴り飛ばした木剣を少年へ返却すると再び構えた。

先程の動きを見ていた野次馬達は想像以上のリゴレーヌの動きに盛り上がり、もっとやれと煽る。

盛り上がった原因たる想像以上の動きというのが、リゴレーヌ自体というよりその一部箇所な気がしてならない。

というかヒソヒソと聞こえるし。クラリスがいたら憤慨しそうだ。  
「つ、次は勝てます！」

「でしょうか演武はまだまだこれから！ お客さんも大盛況！ ぽんばかぽんばー！」

リゴレーヌは盛り上がってさえいればいいのか、注目の視線に手を降って応えている。

しばらくすると始まりの気配を察したのか、声援も静まり沈黙がまた訪れた。

「んじゃ、始め」

またも初動は変わらず、盾を前に出す少年。

それを見てリゴレーヌも頷き、剣をまた宙にやった。

「二度は釣られんか」

先程は隙有りを見て手痛い反撃を食らったため、誘いに乗らず見逃す。

折角わかっていている動作なのに、反撃を恐れて動かないのは経験を捨てていることになる。

返ってきた自身の剣を携えたりリゴレーヌを見て、どう攻めようか悩んでいるらしい。

もうここからは未知の領域となり一度目の戦いの経験は生かせない。せめて、予想外の動きをしてくる程度なもの。

そして、その予想外の動きという選択肢の多さが足を止める原因になり戦いにならない。

リゴレーヌは打ち込んでくるのを待っているらしいが、それが少年にとつてもプレッシャーだろう。

「そこまで」

結局、制限時間を越しても少年は動けずだったので終わらせた。

「終わりですか？ まだなにもしてない。緊張はお届けその後はまだですー！」

「模擬戦だと言ったろう。本番じゃないし相手も見習いだ」

「まっはなは。なれば仕方あるまし。ありがとうございました」

「……」

余裕な態度でにへらと笑い、煽るように喋るリゴレーヌに悪態をつく間もなく少年は足早に去っていく。

これで俺に執着する事もなくなつて別の生き方をしてくれればいいが、なんというか少し気分の良いものじゃない。

「あいつ、有力株だったんだがな……」

いつの間にか顔を出していたギルマスがため息をついて、俺の横に並んだ。

「勉強はしてるし手堅い動きは評価できる。二戦目が動けなかったのは安定的な行動を取つてたからだろ？」

一つしかない命を安定的な行動で守るのが信条だが、たまにはあえて釣りに乗つて危険に飛び込む必要もある。

この辺りの踏ん切りは実戦と勘で学ぶしかないから、今回はしょうがないが。

「ああ、そうだ。マックスに憧れててよく話をしてやったもんさ」

「下手に希望を持たせると失望も大きい。ギルマスも知ってるだろ」

「だがな、あいつはな……」

「後で謝つといてくれ。リゴレーヌ、行くぞ」

「次なる公演？ さすれば再び合間見えん！ 不完全燃焼？ そう、まだ演武はまだ！」

ギルマスが何か続けて喋ろうとしたみたいだが、そろそろリゴレーヌが限界らしくふらふら動き出したのでこの場を去る。

少年に何か事情があるだろうにしろ、もう関わらないし関係ないだろう。



弟子は大変。

「弟子とはいっても不憫です？ いえいえ最初はこんなもの。才はいつ頃分かりましょう？ それは誰にも分からじなりて」

「ん？」

「御師様お少し時間をよろしく？ 手間は取らせずせららとはま」

「これから街を出てというところで、リゴレーヌが突然しやがみ込みいつもの通り変な言い回しを披露した。

「先ほどお弟子が泣きましましての駆けまして、そこら泥んこ足跡ありまし心配なります」

「足跡であいつだつて分かるのか？」

「ずうっと続いて一直線」

そのずつとは、まさかギルドからの話じゃないだろうな。

雑多な道通りも歩いたし追うのは不可能だと思うぞ。

「分かりましてよ？ 靴の大きさ歩幅、一緒です。あらま匂いは分かりません。それだけ無念」

「まるで探偵だな。……俺が原因で死なれても目覚めが悪い。少しくらいはいいぞ」

「よし！ お仲間仲間、弟子仲間！ 道化の同期は助け合い！」

「一応言うが、あいつは弟子でもなければ道化でもないぞ」

空回りしているのをそういう役とでも思ってるのか？

両手を振り大股で歩くリゴレーヌの背中を追いつつ気配が無いか確認していくが、今のところは問題ない。

普段であれば寄り道なんてことはしないが、事情が事情だ。

リゴレーヌの空振りだとしても、受けている討伐依頼も簡単なものだし取り返しはつく。

事件だったら依頼失敗だとしても訳ありで不問だ。

「冒険者のジョブに道化師はありましてと話を聞きまして。あの見習いは道化にあらず？」

「俺と同じ装備なら、普通に剣士じゃないか？」

「御師様は剣士！ 剣武は専門あらずもリゴレーヌ、要望とあれば舞ってみましょう！」

そもそもそのジョブというのも申告制で、ギルドカードやパーティー募集の際に「自分はこういう事ができる」と伝える物だ。

あの少年が道化師と申告していなければ道化師ではない。

ちなみにジョブの道化師は攪乱や状態異常付与に長けているされている。

冒険者のな意味で言うとりゴレーヌは見習いどころか道化師失格だが、それを本人に伝えたら何をしでかすか分からないな。

「で、どこまで行くんだ？」

軽く一時間は歩いただろうか。

見晴らしのいい草原へ辿り着き一見平和そうに見えるが、この辺りは地下に遺跡がありそこを拠点にした盗賊がいる。

小賢しい人間という厄介な相手なので、もしここで少年を保護したとなると守りながら撤退するのは少し厳しいかも知れない。

冒険者ランクAとはいえ俺も人間。無理なこともある。

「足跡雑多に増えてごった煮。これは斬撃抜け毛の獣臭？ いえいえ

死んだ毛皮の持ち主です」

「最悪だな」

「でござりますでしようか？」

「捕まったとなれば救助もきついと思つてな。念のため戦闘準備しとけ」

「はい！」

返事をすると同時に自分のナイフを取り出し、当たり前のように増やしてジャグリング。

もう突っ込まないぞ。

「まだ追えるか？」

「にゅーん、同期の足跡痕跡一切無きに無し。雑多な意味ではありません。では何か？ ぱったり途切れて追いあらず！」

「代わりの足跡があるだろう」

「追いましょう数他の別件！」

8つのナイフを回しながら、大股でずんずん進んでいくリゴレーヌを追う。

この場が草原であるにも関わらず、よく足元を注視せず痕跡を追えるものだ。

目が良いという以上に別の能力があるようにしか思えない。

「みっちり手順を詰め込みてもアドリブとは要求されましたよ？」

故に道化は対応が為、視野は広く保つのです」

「ああ、そう」

後ろ歩きになったリゴレーヌの背中の方こう、草むらに見えた盗賊の男にナイフを投げてやる。

一撃で眉間に突き刺さり監視役は息絶えた。

「お、お客さんが！ 事故です！ お、御師様!?!」

相手が人間であつたことに気が付き、リゴレーヌが投げていたがナイフを取り落とし慌てた。

「こいつは盗賊という魔物だ。魔物に身を落としたかわいそうな奴だよ」

「でもでもでもでも、お客さん!」

「リゴレーヌ。こいつは人の笑顔を奪う悪人だ」

言い方は俺が悪人みたいだけどな。

「悪人ですか、笑わせない？ そうでした、笑顔を奪う奴。魔物ですか？ なれば容赦なしも納得なるや、我ら一座の怨敵なりて……」

どうやら悪人と分かれば大丈夫らしい。

一座を壊滅させた連中の事を思い出したのだろう。

リゴレーヌにとつては家族である一座の仇。殺人を強要したい訳ではないが、今この場は抵抗がなければこれ以上言うことはない。

「監視がいるって事は、入り口もこの辺に……」

「タネは仕込みの癖も分かりて。道化は手品はお嫌い？ いえいえ手の内にあります勉強してます」

しゃがみ込んだリゴレーヌが近くの芝をめぐり、その下にあつた扉を指さす。

俺も探すのは得意なつもりだったんだが先を越された。

「中は狭い。剣に変えとけ」

「はい！ 貰いましたサーベル使って剣武を披露。悪人成敗リゴレーヌ！」

「あと大きな声を出すな」

遺跡内の石積み通路は魔法で照らされてはいるがほの暗く、見通しは悪い。

「リゴレーヌに前は歩かせたくないし、どうするか」

「なれば合図！ 示し合わせはお得意道化のアドリブ道！」

「だから静かにしろって」

「はい」

「で、どう合図するんだ？」

リゴレーヌに一任するのは色々怖いので確かめてみると、通路の暗闇へナイフを投げた。

さく、と刺さる音したがまさか石の地面に刺したんじゃないだろうな。

「ふ、ふふ。お忘れ忘れ？ お忘れですか？ 百発百中ナイフ投げ」

敵の気配もしないので疑いつつ進むと、しばらく歩いた先の地面にナイフが刺さっていた。

別に石を割って刺さっていたわけじゃない。石畳の隙間に挟まっている。

暗くて見えない先の、それも不規則に並ぶ石の隙間を狙って投げたらしい。

なんなんだこいつ。

「音は立てずが好ましいと聞きましたの合図にございましたが」

……まあ、できるのならいいか。

「敵がいたら肩でも叩いて教えてくれ」

「はいっ」

相手は魔物ではなく連携の取れる人間。それも、所詮盗賊と油断している腕利きも混じっている事もある。

人命救助とはいえ、情報もなくこうして進むのはとても危険だ。

「……」

数回と後ろから無言でナイフを投げられ、しばらく進み大分奥まったところまでついた。

そこには今までの通路にはない、大きな扉がありその向こうからは人の気配が感じられる。

リゴレーヌを見ると、扉にぴったりと耳をつけてよつつ指を立てた。

「一人は少年か?」

「囲むようにでしょう」

「どうするかな……」

俺もリゴレーヌに習ってというわけではないが、聞き耳を立ててみると少年に何かを聞き出しているのか、ぼそぼそと喋る声は聞こえる。

しばらくはその場を離れそうにないし、強襲するにしても不安が残る。

少しでも成功率の大きい作戦を立てたいが……。

「なればこの場は奇術で勝負。御師様はリゴレーヌの特技をお忘れ?」

「いえいえ道化の手本は見せてません」

「なにか解決できるものがあるのか」

「今この場、道化の奇術をご覧に入れましょう」

具体案が全く提示されず分からないが、何か手はあるらしい。

自分の装備を入れていた袋を取り出した。

「少し失礼。小道具がいりまして」

サーベルで丁寧に開き、大きな一枚の布にしてしまった。

それをどうするといふのか。

両手で左右の端を持って、俺の視線からリゴレーヌの姿が隠れる。

なんだか嫌な予感がしてきたぞ。

前の食事の時、視界から外れた一瞬で消えたことがあったよな

……。

「すりー、とうー、わんっ!」

ぱっと指を放し、ひらりと落ちた布の後ろからはリゴレーヌの姿が消えていた。

「あいつまさか……!」

扉に飛び付き耳をつけると、中から驚きの声と争う音がしている。どうやったとか考えてる場合じゃない。扉を蹴り開け、近くにいた盗賊の男の首を剣の柄で殴り気絶させ一気に少年の横に立つ。

「じゃんじゃかじゃーん! 大成功!」

「じゃねえよ! 先に何するか言え!」

「あらま怒られてしまい申した」

俺の目の前でリゴレーヌは深々とお辞儀をしているが、普通にこういう行為はやめて欲しい。

それと残り2人の盗賊は……。

何をされたのか壁際の樽に収められていた。

本当に何をされたんだ?

「今はいいか。おい、無事か?」

「マックスさん……」

所々に怪我はしているが、まあ大丈夫と言った所か。

「ご、ごめんなさい……」

「まずは街まで戻るぞ。話はその後だ」

樽詰めにされた2人はまだ気絶していないので、帰る前に少し聞いておこう。

剣を首に添え、にっこりと顔を作って話しかけてやる。

「見張りのひとりとその場以外に仲間は?」

「い、いねえよ! 俺等だって最近ここに来ただよ!」

「残ってるのは俺達だけで、親分も……」

知りたい情報は人数だけなのでこいつらの事情は知らん。

剣を引き鞘に納める。

「後は専門職に任せよう。帰るぞ」

「お帰りですか? 帰りましょう! 道化にあらずの同期のお弟子、へこむことはないです。えと、見習いとは失敗はつきものですので迷惑かけるのが若手の務め! リゴレーヌも迷惑ばかりで情けない」

「……ありがとうございます」

分かりやすい言葉を選びつつ、リゴレーヌが頑張つて少年を励まし

ている。

思考は飛んでいるが、元がそういう性格なのか面倒見はいいらしい。

今回の件は少年の動向を察して動いたのはこいつだ。言われなければ俺はそのまま少年が行方不明となるのを「弟子になるのを諦めたか」程度で済ませようとしていた。

「リゴレーヌ」

「何でございましょう？」

「礼は言っておく」

「人のお役に立てて道化道！ 人の笑顔を守る為なら道化はいつでも舞い踊ろう！」

善人質か。

……安定を取るあまり、幾度も大を取って小を切り捨てた俺とは大違いだ。

弟子になりたいニコル。

「——色々言いたいことはあるが」

「なんぞと問われまして？ リゴレーヌには難しい」

少年と盗賊についての情報をギルドに引き渡したあと、最低限の依頼をこなした俺達は食の為にいつもの食堂を訪れた。

そこで今回の件の礼としてリゴレーヌへ何か欲しい物でも買ってやろうかと話を持ち掛けた所、ではと云って少年を連れてきたのだ。

俺もそうだが少年の方も状況が飲み込めず、最初にリゴレーヌをここへ連れてきた時のようにきよろきよろとしている。

「欲しがってた道化師の帽子を買おう口実というか、フリだったんだがな」

「それもそれとてそれもそれ。仲間意識は食卓囲んで同じ飯、故に道化は？ いえいえどの場合もこれは一緒でしょう！ 目につく寂し<sup>げ</sup>気<sup>き</sup>になりますよ」

「あの、これ以上迷惑をかける訳には……」

席を立とうとする少年を手で制する。ここで帰ってもリゴレーヌは納得しないだろう。

あの帽子がどれほどの値段だったのかはしっかりと確認していないので分からないが、一食分には及ばないと考えれば安上がりだ。

別に、金に困ってはいないが。

何かの祝いで大々的に酒場を盛り上げる訳でもなければ、安定した戦いを心掛けている為装備の消耗も少ない。故に金は余っている。

近くを通った店員に三人分の食事を注文して待つ。

……: 会話が一切ない。

リゴレーヌは相変わらずにへらと笑いながらゆらゆら揺れているし、少年も何を話せばいいのか分からず口ごもっている。

呼ばれたにも関わらず沈黙というのも居辛いだろうし俺から切り出そう。

普通は食事に誘ったりリゴレーヌが取り仕切るものじゃないのかと思うが、そこはリゴレーヌなので諦める。



「お前の名前、聞いてなかったな」  
「えっ」

聞けば少年は驚いた顔をして、リゴレーヌは身体ごと首を傾げながらそちらを向いた。

「ニコルです」

「わお！ かわいらしきかやニコル！ お似合いですよ、ニコルです！」

「……ニコルねえ……」

あまりいい思い出の無い名前だ。昔を思い出す。

「で、ニコルはなぜ俺に拘るんだ？」

「憧れだからです」

「……憧れねえ」

「言いたいことは分かります。でも、それでも、マックスさんの下にいたいんです」

「あのな、食事に誘っただけで面談じゃないぞ」

「ままま御師様気を立たせせずさせたせ。ニコルは必死で真面目です」

真剣であれば相手にするとかではなくて、人間関係が一番面倒なんだが。

特に、ニコルのように訳も分からず変な希望を持つてくる奴は。

「仲間にならずと弟子仲間。道化にあらずと仲間です！」

「リゴレーヌが個人で関りを持つというのなら止めはしないさ」

「あの、リゴレーヌさん、これ以上は大丈夫です……」

「んむう。真なる笑顔は心の底、浮かばれず？ 夢破れ？ むむむむ見捨てず見捨てられず」

運ばれてきた食事が並んだので手を付ける。

マナーなんぞ分からないが、戦い方だけではなくしつかり勉強もしているのかニコルの食べ方は上品だ。

その横にいるリゴレーヌは……まずは食べ物で遊ぶと言いたい。

それとせめてナイフで肉を切ってくれ。塊のまま口に運ぶな。

「細かい動作は遠目に分からじ。故に大げさな動作は癖なりて」

「言い訳してるところ悪いが絶対分かってないだろ。ナイフで切れとは言ったが武器のナイフを出すな」

「まあー！」

大きさに両手を挙げて、ちらりとニコルを見る。

恐らく道化師的なお笑いポイントだったのだろうが伝わってないぞ。

「リゴレーヌさん、フォークの持ち方は分かりますか？」

「フォーク？ とはこれ！」

「それは骨です……」

だから、ネタだと伝わってないっての。

「こつちがフォークで……ああ、持ち方が……」

「今度は逆手持ちか。何歳だお前」

前に見たときにちゃんと持ってたのは偶々か。

そういえばリゴレーヌっていくつだ？

背はまだ小柄な少年のニコルより少し高く、俺より低いスタイルは良い。

顔だけ見れば10代前半にも見えるがわからん。

「道化の素性は隠すもの。お気になるなら楽屋にてお答えいたしましょう」

「別にそこまでしなくてもいい」

なんにせよ子供じみているというか、子供であることに違いはない。

冒険者の最低年齢が14歳からなのでそれ以上なのは間違いない……。

あ、申請って俺がやったのか。万が一まさかと思うがそれ以下だったらまずいな。

大丈夫だとは思いますが少し不安になってしまった。

「リゴレーヌさんの能力が高いのは分かりますが、やはりなんとか」

「椅子に座って飯を食うだけまだマシだぞ。最初はいきなり消えたりしてた」

「消え……?」

今日も披露していた奇術らしい。

リゴレーヌがどう現れてどう盗賊を処理したのか気になるが、その辺はニコルから見えてどうだったんだ?

「えーっと、急に近くの樽の中から出てきて、布で視界を塞がれたと思ったら盗賊の2人が樽の中に収められて……」

「……そっちでも視界から消えた隙にか」

「大脱出の応用ですよ、よすででおうおうおうヨウヨウ! ババンと登場ささつと退場、得意奇術の大脱出!」

席を立って歩き、近くのカーテンに包まる。

くぐもった声でカウントする声がして、0になると同時に跳んで唯一出ていた足を仕舞うと消えていた。

抑える力の失われたカーテンがパサリと舞う。

「自慢したいのはわかるが、静かに飯くらい食えないのかあいつは……」

「え? え? ど、どこに?」

リゴレーヌが足元に置いていた荷物の中から、開かれて一枚布となった袋だったものを取り出し、それを先ほどまで道化師様の座っていた椅子に被せる。

「はい、すりーとうーわん」

ぱつと一気に布を剥がせば、当たり前のように両手を広げたりゴレーヌが登場していた。

俺は見慣れたものだが、明らかに何かおかしい奇術を目の当たりにしてニコルは驚きのあまり手に持っていた食器を落とす。

「大成功ですよ、これぞ奇術の瞬間移動! 御師様お手間を取らせまして」

「いいか、飯が食い終わるまでは用もなく席を立つな」

「あれままれまれダメでした? 得意で得意な特技でしたのに」

「時と場所をわきまえろと言ってるんだ。そんなんじや驚かせるだけで笑わせもできないぞ」

「笑わせられない!? それは駄目ダメ死活問題! 反省なりてよりゴ

レーヌ！」

「あと飯の時は静かにしろ」

瞬間移動なら出現するまでの間はどこにいたのやら。

原理を考えるのはもうやめたので俺は溜息しかないが、ニコルの方はぶつぶつと魔法がどうのとかなんだとか考えている。

当たり前のように物理的に存在するナイフを増やせると聞いたら倒れるんじゃないだろうか。

真面目過ぎるのも毒だな。

「諦めろ。リゴレーヌはこういう奴だ」

「ボクがいくら努力したところで、敵わないというのは分かりました……」

「いや俺でも無理だぞ。剣士なら剣士らしい戦いをすればいい」

「あれあれあれま!! 暗い暗いのなぜなにくらくら!」

「だから静かにしろっての」

今日だけで何回静かにしろと注意しただろうか。

これももう諦めるか？

いや流石に弟子って事だし最低限は職務を果たさないと駄目か……。

「マックスさん、今からでも代わりにボクを」

「いや商魂たくましいなお前」

「ふふ、リゴレーヌさんとの関り方を見ると、こういう冗談も好きだと思ってる」

「勘弁してくれ……」

「ニコルも道化にご興味を？ んふふ同期の道化は大歓迎です」

「道化師はあれですけど、リゴレーヌさんの魔法……いや、『技』を教えて欲しいですね」

「んふひひ良き良き感謝なり!」

ああ、面倒なのが増えた……。

「ボクが食事の作法を教える代わりにどうですか?」

「おやま交渉事となりててなりて。御師様どうぞどうしましょう」「いいんじゃないね?」

適当に答える。

別に大丈夫だろ。ニコルにリゴレーヌのような言動が伝播する訳でもないし……。

——いやさつきもう俺に冗談飛ばす位には影響受けてたな。

まさか手遅れか？

10日後。

リゴレーヌが弟子になってから早くも10日が過ぎた。

相変わらず言動も行動も読めないが、戦闘能力だけを見ればやはり優秀ではある。

今日に至るまで毎日魔物と対峙し、与えたサーベルで斬りかかる事もそれなりがあるがこいつはまだ一度も攻撃を食らった事がない。

全て避けるか、あるいは小手で弾くというより逸らして無傷に抑えている。

拾った直後は攻撃だけとは言い防御に不安が残るとは判断したが、こうして見ればランクAくらいの実力は余裕である。

……まあ、結構な確率で道化師の癖というかりゴレーヌの癖というか、意味不明な行動で台無しではあるけど。

「にきにき人気の大人気、今日も見せます道化の奇術、演者その名もリゴレーヌ！ 見事討伐成功なるや、拍手喝采調子を揃えて！」

岩の上に立ち眼下のオーク達に宣言してから足を滑らせ落ちて視界から消えた。

あいつがわざと転ぶのももう見慣れて慌てる事が無くなっただけ、俺も師匠としての貫禄が出て来たんじゃないだろうか。

命令も出してないし、なんなら出しても弟子の行動をあまり制御できなないが。

「いえいえいえいえ大成功！ ばばんと登場ばんばばーん！」  
当たり前のように反対にある木の裏から現れ、ナイフを放ってオークを処理。

今回はちゃんと命中させるらしい。

しかし観客も俺しかいないというのに誰に向けて芸を披露しているのやら。

「んむ？ それはもちろん御師様ですよ？ 見せる人がいてこそ奇術、技を磨かなければ」

「俺に道化師の芸はわからんと言えばわかるんだ」

「でもでも御師様楽しそう。なぜかなんでか問われてみれば、答えら

れぬと首傾げ？　なんでしよう」

……俺が楽しそうだと？

「うーむ何故かなんでか分からじともとも、心の底ではどっかんどっかん大爆発。なんやかんやと御師様満足？　いえいえまだまだ笑顔はこれから！」

「まあ、お前を見て退屈はしないよ」

「退屈させまじなりての道化道！　それ！」

調子よく喋ってからいつものようにナイフでジャグリングを始めた。

ため息と共に剣を抜き、近くの草むらから飛び出したスケルトンを斬り伏せる。

「帰るぞ」

今日の依頼はもう達成しているのでそろそろ切り上げよう。

リゴレーヌの修行だと言えば大丈夫だがあまり場を荒らさない方がいい。

弟子を取ったのは俺だけではないのだし、他の弟子達はリゴレーヌと違いまだ戦いの練習が必要だろうから。

「今日は早めの切り上げなりて。いつも夕暮れのんびり討伐にはなるも気分が乗らず？　そう！　いう日もありますですよねです」

「ああ。少し考えたいことがある」

リゴレーヌの戦闘能力は、傍からして俺の弟子として説得力のあるものだ。

しかし問題は視察が訪れた場合。その時、この道化師様は確実に客と判断して芸を披露する。

なのでこれからはなるべく教育の方へ力を入れようと思うのだ。

教育に力を入れる事で早く精神状態が正常に戻るとも僅かに期待しているが、まあそこはおいおいでいい。

せめて早い所、平時と舞台を分けてくれるようにならないと俺が辛い。

あまりにリゴレーヌが騒ぐからいつもの食堂を出禁になったんだぞ。あの店は結構気に入ってたのに。

「お前がもう少し、小柄であればな……」

「ほほうお好きは小動物？　しかし道化に変化はできぬ。いえいえ見せる事はできませんが。どうです猫耳にやんにやかにゃーん！」

髪の毛を掴み猫を真似ているのは放っておき、いつもの食堂から追い出された後に入った店は酷かった。

店が、というより環境が。つまり客が。

俺の所に来てから身なりも整えてやっているの、スタイルも顔も良いリゴレーヌは注目の的となってしまうのだ。

美人も三日で飽きるという言葉ではないが、見慣れてしまっていたために油断していた。

ただの子供であればその騒がしさも微笑ましいで済むだろう。しかし、こいつはそういう体つきをしている。

そしてその注目も道化師魂へ焚きつける事になったのかこれまたリゴレーヌも落ち着かず……。

悪循環が過ぎ、パンとリゴレーヌをひつつかんですぐに店を後にした俺の判断は間違っていないかと思ふ。

森を抜けて門を超えて、依頼の報告の為にギルドへ向かっている途中に俺の横を歩いてきたリゴレーヌが突然声を上げた。

「ニコルです！　凱旋ですとも我々帰還、さあさ両手を広げなれて！」  
「この声……あ！　おかえりなさい。依頼の帰りですか？」

一つ幸運だったのは、騒がしい道化馬鹿に色々教えに来ていたニコルが料理をできた事だ。孤児院でよく大人を手伝い料理をしていたらしい。

本当は取りたくない手段ではあったが、リゴレーヌを素性も知れない男連中の視線にさらし続けるよりかは俺の家で料理をさせた方がいいと思ふ、現在は依頼という形でニコルを料理番としても雇っている。

弟子にはしたくない、しなないと言い張っていたのにも関わらずこれだ。

昨日久しぶりに路地裏のマスターと話したら諦めろと言われた。味方はいないのか。



「ニコルも見習いなりとも冒険者。近頃戦い赴く事無く退屈ならずや？」

「確かに最近全然剣を握ってはないですけど、それでも満足はしてるから大丈夫だよ」

「剣を」の所でこつちを見るな。お前絶対弟子入りを諦めてないだろ。あと今の環境で満足しているのは上手く俺の下に転がり込めたからだろ。

最初に会った時はもう少し気迫があったというか人が違っていたというのに、今は柔軟な言葉使いで隙あらば弟子になろうとしているのが冗談であろうが俺的に気に入らない。

確かに家事の依頼をしたのは俺だが、それは媚を売らせる為じゃないぞ。

「むむう。未だ師弟に溝有りて、道化は踊り歌いに解決ならずや……」  
「だから弟子じゃねっての」

今は家庭教師兼料理担当ということで金で契約し家に置いてるだけだ。

弟子にするつもりも、まさかパーティーメンバーにするつもりもない。

「分かってます。ただ、ボクはマックスさんのお役に立てるならって」  
「だったら弟子になろうとする必要もなかっただろうが」

「まままお2人喧嘩せず、そう喧嘩せず！ ではどうしよう？ ならばお菓子を食べましょう！」

そう言つて、割って入ったりゴレーヌが細長いパンのような物を差し出した。

「ぽっぽるぽっぽーポップ焼き！ パンです菓子です量もあります、分け合う仲間は喧嘩せず！」

「待て、これが何かはさておきどつから取り出したお前」

怪しむ俺とは真逆に、ニコルは当たり前のように受け取って口へ運ぼうとする。

待て待て待て。

「ありがとうございます。頂き——」

「食うなニコル、腹壊しても知らんぞ」

「でも、出来立てみたいですよ？」

いやどこで作るか買うかしたんだっての。

ずっとリゴレー又は俺と一緒にだっただぞ。

「これ、向こうの出店で売ってる異国のお菓子なんですよ。たぶんですけど、さつき目を離した一瞬で買ってきたんだと思います」

目を離した隙に、と言われて瞬間移動もできるこいつならできそうだと考えてしまった。

普通はあり得ないと首を振りたいがだいぶ毒されてる。

受け取ってみると確かに出来立てとしか思えないし、本当に買ってきたのか？

「いやまあお金を払ったと問われれば、うーむむむむの悩ましき。いえいえ盗みは働きません。それは何故かと問われれば、道化師としての奇術を披露！ 気に入り笑って頂けました」

「はあ……」

「あれま溜息いきめたため？ でもでも喧嘩は静まり静かな笑顔！

奇術で何ともできぬ事、なればならなれ飯を食う！」

常識は確かに抜けているが、仲を取り持つ気も方法も知ってはいるらしい。

本当はそんな気遣いできる訳ないと言いたいが、現にこのよくわからんパン一つで険悪になりかけたニコルとの空気も改善されている。というか、まさかとは思うが弟子入りを拒まれたニコルを俺の近くにいられるようにしたのはこいつの仲介能力だったんじゃないか？

ニコルとはまだ孤児院の手伝いがあるとのこととで別れる。

冒険者が帰ってくるにはまだ早い時間なので空いており報告の窓口も待つことなく通れてた。

何かの回収等なら物品の提示と鑑定で時間はかかるが、今回も受けていたのは一定数の討伐のみなのでギルドカードを提示するだけでいい。

肩書やランクのみだけでなくそういった記録も施される機能は魔法による物なので間違いない。報酬も用意される。倒すだけで記録されるカードの原理はよくわからないが便利なものだ。

俺とリゴレーヌの討伐数を合わせた報酬を受け取り、近くのテーブルに移ってその金の二割をリゴレーヌに分け与える。

働きに対する見返りだとは流石に理解しているのか道化師様も断る事なく恭しく受け取ってくれた。

しかし大した依頼でもなく報酬金も多くないと思っていたが、基準が分からないからなあ。こうして数えてみると弟子という存在に与えるには多かつただろうか。

同じ戦場に身を置いた同士なのだから半々で良いとは思っている。でもこれでも少ないと思っているが……。

「むしろ一割でもいいと思うぞ？ お前はご教授する立場でその分もあるからな」

「なんだギルマス。それだけを言いに来たんじゃないだろう」

「せめて振り返ってくれよマックス。別に面倒事押し付けたい訳じゃない」

「心当たりがあるなら普段から気を付けるんだな」

「手厳しい」

「当たり前のように席に着いたのはギルマスだ。何か話があるらしい。」

「お久しぶりです？ いえ久しぶり！ 冒険者の大頭！ うやみうやまいうやややや！」

「全く敬ってないだろお前さん」

「諦めてくれ。この道化馬鹿はこういう奴だ」

「知ってる」

「どうしたと聞く前にどさりと用意されたのは、昨日の盗賊騒ぎの資料だ。」

「用意されたからには意味があるので目を通して、なるほどと言える。」

捕縛された連中の吐いた事曰く、元々縄張りになっていたところに魔

族が現れたせいで解散。生き延びたのがあの遺跡に残っていた面々らしい。

その魔族が現れた場所というか元の縄張りというか、そこは以前にこの街へ来ようとして事故に遭い行方不明になった旅の一座も通る予定だったという。

何を言いたいかと問うまでもない。

「因縁があるだろうか？ マックスさえ良ければここの調査を紹介できるんだが」

お礼参りもするという気では無いが興味はある。

この10日を通して目についた、リゴレーヌの異常な戦闘能力を保有していた一座を壊滅させた存在。

魔王が復活したとの話も合わせれば、まさかと思うが幹部クラスとまではいかずとも上級魔族が出てきてもおかしくはない。

「まずは様子を見させてくれ。そこから本格的な調査をしていくか決める」

「そう答えると思ってたよ。魔族がいるかも知れないからランクAに調査を依頼しているともう報告を送っているから、向こうからの返事が来るまでは適宜報告でいい」

「拒否権がないなら聞くなよ」

資料は家で確認しよう。束を受け取り席を立つと、静かだったリゴレーヌも付いてくる。

こういう真面目な話をしている時は何故か空気を読んで静かにしてくれているのは助かるが、同時に普段は騒がしいこいつが黙ると何を考えているのか分からず不気味にもなるな。

ギルドを出て少し歩き、ふらふら横を歩く道化師に聞く。

話が理解できなかつた訳ではあるまい。

リゴレーヌにとつて相手は怨敵であり、思うところがないとは言えないはずだ。

「我ら一座は十六夜の晩、我を残して先立ちなりて。悲しみ焦がるる残されひとりリゴレーヌ、まだ何すべきか分からじなりぞや！」

「……気持ちの整理なら時間がかかっても仕方ないか」

元気に振舞うそれも、道化の仮面に隠しているのは分かった。  
聞くまでもなかったか。思うところがなければ、このように精神が  
おかしくなることもなかったのだから。

## 人形劇。

日も暮れ始め訪れたニコルが手際よく料理のする音を背景に、暇を持って余したりゴレーヌが何も無い筈のテーブルの下から当たり前のように続々と何かの木材を取り出し始めた。

何かの部品らしいそれを組み立てていくと、どうやら人形劇の舞台らしい。

ただ、しつかりとした造りというよりも手作り感溢れる少しボロい感じだ。自分で作ったのだろうか。

「ご用意しました。用意です。ご用意容易ではありません？ いえいえ観客いるならば！」

「何をするんだ？」

「要望なりての公演です！ なぜ？ いやはやみなま で言うまいまい。御師様ニコルに多勢に皆様、公演望みとあらればなるまで」

最後に取り出した木箱からは人形がいくつか出てきた。その中には前にも出したことのある糸吊り人形もある。

それらどれも手作り感溢れる、お世辞にも綺麗とは言い難いものだ。

「リゴレーヌさんがまた何かするんですか？」

「知らん。……まあ、暇つぶしにはなるだろ」

にしてもいつ作ったのだろうか。そんなものを作れるのなら、自分で帽子も用意できそうなものだが。

「ごほん！ ごほんうえっほん！ んっんー！」

目を通した書類を置き、暇になったので催しに付き合っただけでやることにした。

そんな俺の観客席に座った様子に満足したのか、いつもの笑みを浮かべ舞台に人形を立たせた。

「よしっ。始まり始まり、どんどんばぶどっかんどん。

今日まで皆様お待ちどう、お伝えしますは一つのお話。

それは今から大昔、いや数年でした？ いえ10年です？ まままそこはさてとて重要ならず、大事大事はその中身。

何の話でございましょうて？ んふふ興味を引かれればこちらの土俵、慌てず慌てずお聞きください。

それはある日ある時ある国の、齡一桁ひとりの少女。

生まれ悲しき血筋の故に、石壁の外を見たこと無きないありません。そんな彼女のお話です。

やんちやなるかなその少女、生まれ恵まれ血筋の為に、なんとなんととなんとまさかに年少されど才能開花！ 親と他従者その諸々自慢をばばん！」

灰色の背景の中、少女人形が立て板の人間へ様々な魔法を披露している。

……仕掛けや演出ではなく、本当に小規模の魔法を発動している。当然だが魔法の制御とはとても難しい。それも繊細となれば。

目の前のリゴレーヌは造作もなくやってのけているが。

「ある日ある日のある某日。才に嫉妬がありました。あった！ あつて、しまった！

そう！ なんとまさかの父でした！ 妬み、裏切り……」

自らの子供の才能に嫉妬する親の話か。

もし俺の子供に才があったのなら、俺はどうしただろう。わからないな。

「……」

「どうした？」

リゴレーヌには珍しく、芸の途中だというのに手が止まった。

できた料理を運んできたニコルも不思議に思ったらしく首をかしげている。

「あののあのあのお開きです。なぜ故それ故アドリブ得意なれど、台本ありきの劇場それにはアドリブなくて」

「まあ、なんにせよ食事ができたから中断させる予定だったかな」

「なんとフォローはありがたい！ すまなくすまないまた次回」

完全に小道具のひとつの化している開いた袋を人形劇の舞台に被せると、当たり前のように全て無くなった。

訳の分からない技術と魔法を持つリゴレーヌであっても、やはり人

間だ。たまには狙っていない失敗くらいある。

というか、ちよつとくらしいの失敗がなければ逆に不気味だ。

「しかし、嫉妬ねえ」

「ボクはちよつと嫉妬しちやいますね」

「自分の座る弟子の椅子を横取りされたからか？」

「違いますよ」

「どうだか。」

「本当です。というのも、実はボクも色んな魔法を使えるんですよ」

「それは初耳だな。魔法使いにでもなればいいだろう？」

「母の魔法を継ぎはしたいですけど、父の剣も継ぎたいんです」

「……そうか」

「だつたら親に弟子入りすればいいとは言いたかったが、それをせず孤児院に在籍しているという事はそういうことなのだろう。」

「弟子にはしたくないが、そういう事情をちらつかせられると揺らいでしまう。」

「ん？ んんん？ ああつー！」

「身体が真横を向くほどに傾げていたりゴレーヌが声を上げた。」

「今度は何だ」

「とは聞いたものものまともな答えが返ってくるとは思えない。」

「事実その通りで、口笛を鳴らすような素ぶりで見事に知らんぷりをされた。」

「何なんだいったい。」

「御師様自らが気が付かなければ、これはこういう問題です。こちら道化師仲介なれど、流石さすさす弁えましょう？ そう！」

「俺が何か見逃してるってのか？」

「リゴレーヌを見て、ニコルを見て、訳が分からん。」

「ニコルが亡くなっただろう両親を継いで戦おうとしてる以上に別に何もないだろう。」

「だが、思考も常識も訳が分からないリゴレーヌではあるが、勘は悪くないと見ている。」

「自身の容姿に無頓着だつたり道化一辺倒な所はあるが、仲を取り持



とうとしたりギルマスとの会話の際に沈黙していたりなど妙な所で気は回る。

気には留めておくか。

「……まるで宮廷道化師のようだな」

普段からおかしな口調と行動をするので怒られない、言ってしまうが相手が君主であろうと何であろうと自由な発言を許されている宮廷道化師。

その立場を利用して申し上げにくい世論や助言を行い、あるいは道化師らしく相手と共通の話を作る為の“道化”を演じて仲介もする。トランプのジョーカーに道化師が描かれている通り、上手く利用すれば利にはなるが活用できなければ不益となる存在だ。

「お気付きなられのなられられ？ 及びとあられば道化の仕事！」

「できればもう少し落ち着いて行動しては欲しいがな」

「楽しませようリゴレーヌ。それはなぜかと道化の仕事」

「いや頼むから店に入る時は静かにしてくれ」

それと食べ方だ食べ方。

口に食い物入れたまま喋るから胸元にぼろぼろこぼしてるぞ。

普通にその汚い食べ方を何とかしてくれ。

「もう。リゴレーヌさん、あとフォークの持ち方また戻ってますよ」

「あれま申し訳なしななしなし！」

「ちよっ」

こぼした物を払って拭いてをしてる間に礼を言いました食べかすをまき散らしてる。

目を覆いたくなるし、相手が知った仲のニコルとはいえもう少しリゴレーヌは身体を気にした方が良いと思う。

というか、ニコルもなぜ気にしてないんだ。孤児院の手伝いをしてるらしいしもう慣れてるのか？

「えっ。まあ、慣れてはいますけど。えっ」

なぜそこまで不思議そうな顔をするんだ。

ともかく、リゴレーヌが成長しないというかなんかアレだから胸元くらいは自分にやらせてくれ。

「あのー……。マックスさん、もしかしてボクの事……。」「  
なんだ。」

「あ、いえ、やっぱいいです」  
なんなんだよ。」

さっきのリゴレーヌの意味深な言葉といい、ニコルになんか秘密で  
もあるのか。」

無いと思うが。」

というか、秘密があるようには思えない。」

「んむう。御師様まさかの愚鈍なり？」

「お前それとんでもなく失礼な言い方だからな？」

## ニコルとリゴレーヌ。

普段は夕刻からお邪魔しているのですが、今日は朝からマックスさんの家に来ています。

というのもマックスさんは指定の依頼で家を空けるので、その間リゴレーヌさんの見守りをして欲しいからだそうです。

確かに今までの行動を見る限りなんとなくふらふらとどこかへ行ってしまうそうですが……。

玄関で嚴重ににへらと笑うリゴレーヌさんに言いつけてから、最後にボクへため息交じりに頼んだと言い残し依頼へ出かけて行きました。

横に立っているリゴレーヌさんの方を見ると、不思議そうな顔でボクを見ます。

何も考えてなさそうに見えて、その実はたぶんボクの正体とどうか、抱えてる問題を見通してなお見逃す考えの持ち主。

地頭が悪くないというのは同じ意見ですが、何をするのか分からなしいのはその通りな訳で。

「今日は何をし何を為そう？ 道化の練習ほほいのほい。右から左へそいそいややつさそいやつき、ニコルもどうですジャグリング！」

「それもいいですけど、今日は街の案内とかどうですか？ お散歩に」「むむ？ この道化に街の案内を？」

「はい。たぶんですけど、リゴレーヌさんってマックスさんに付いて行くしか街を歩いてない気がして」

万が一迷子になったりしたらマックスさんも心配するだろうし。迷子……なるかな。

ふらふら歩いていつの間にか帰ってくるのか、あるいは家の中にいつの間にか戻ってそう……。

リゴレーヌさんを連れてとりあえず家を出たけれど、そう考えれば案内は別に必要ない気がしてきました。

孤児院の子達みたいに対応の仕方だったかも。

「そういえばリゴレーヌさんって、どこ生まれですか？ 全然分かんなくて」

路地裏で見つけた、昔は旅の一座に在籍していたというのは知っているのだけど、それ以前が気になって聞いてみます。

ボクのいる孤児院には様々な地方の子供が来るので肌や髪の色や言葉の訛りでどこ生まれか分かるのだけでも、リゴレーヌさんの場合本当にどこか分からない。

全体的に色彩の薄い感じは北方の地方だろうとは思う。だけど、それにしても訛りが無いというか……。

いや、喋り方が独特過ぎて訛りが分からないのですけれど。

「我は旅する一座の一員、追加公演希望なりてのななりてなりて？」

「えーっと」

「準備台本用意の不用意！ しまったすぐには話せない」

「あの、言いたくなければ別に……」

「その言葉はななんと御師様そっくりそのまま生き写し！」

「あ、ありがとう……」

「生まれ故郷は分からじ分からずいずこへどこへ。しかし公演ならればできる！」

結局どこの生まれかは分かりませんでした。

追加公演って言うのがちよつと分からないけど。いつ最初の公演をしたんでしょうか。

というかそもそも何の公演ですか……。

大通りを歩きます案内したのは、ボクもたまに来る雑貨屋さんだ。

品揃えは少し悪いけど、店主は優しいし悪いお店じゃない。

「こんにちは」

「ん？ おお、ニコルの坊主じゃねえか」

「坊主はやめてくださいって」

「ははは！ それと、そっちの見慣れねえ子は新顔か？」

話を降られたリゴレーヌさんはぺこりと深々と頭を下げて自己紹介をする。

「元は道化師なりぞて今は冒険者。しかししかとて道化師の矜持を忘

ればからず。そんな我が名はリゴレーヌ」

「あ、ああ、リゴレーヌね。……変な子だなまた」

「変と言われて笑ってワハハ。それこそ道化の道化道」

「また濃いやつだな……。ま、いい。ニコルと同じ孤児院なら大丈夫だ、安心して過去は捨てるの良い」

「過去は捨てずに道化師人生！」

「それと、この人は孤児院じゃなくてマックスさんが弟子に取ったんです」

「……あー、うん。悪い、なんかもう訳分かんねえな……」

店主さんを困惑させる結果になってしまいました。

「ふむむふむふむ雑貨は雑なり。帽子は無くて？ なるべく派手さな

派手な帽！」

「派手な帽子？ 流石にねえな……」

「なれば三色様々布地！ 道化に必要な帽子を作ろう！」

「リゴレーヌさんってお裁縫もできるんですか？」

「それが必要とあらばご用意いたします」

「用意って、お裁縫の道具から？」

「いえいえそれには及ばず」

お店の奥から出された布地の方へふらふらと歩いて行く。

ボクはそもそも言葉が通じなかったりとかの子供の世話もすることもあるので慣れてはいるけれど、マックスさんがこういうのらりくりとした話に付き合っているというのが意外に思えました。

人付き合いを人一倍恐れているあの人が。

「ふーむふむむ、ふむんがふむむ」

「どうだお嬢ちゃん」

「派手さは申し分なし。大ききヨシ。ならればなれば、作りよろう！」

「おお、お眼鏡にかなって何よりだ」

気分が良くなったのか両手を上げて跳ねまわるリゴレーヌさん。

そしてその胸元をなるべく見ないようにしつつ、けど視線がバレバレな店主さん。

「いや、ニコルさん、その、違ってね？」

言いたいことは分かりますし本能と言われれば仕方ないですが、もう少し……。

店主さんを睨んでいたら、突然跳ねまわっていたリゴレーヌさんの動きが止まりました。

背を向けていた布地に身体を逸らせて顔を向けて、値段を見て落胆し崩れる。

「しまった。お金がほとんど足りぬぞホトトギス。キープ！」

「あ、あいよりゴレーヌちゃん。その内買いに来てくれ」

「それはありがとうございます、なら値引いといってください」

「雑な交渉っていうか、ニコ坊やっぱ怒ってるよな!？」

坊主はやめてください。

「お次は次はどこでしょう？　こちら町の真ん中ど真ん中」

その後も町を案内して回って、最後に訪れたのはリゴレーヌさんも言った通り町の中心に近い所。

道を間違えた訳ではない。少し本当に良いのかと迷ったけれど、それでもここは来なければと思いません。

「んむう。墓石並びで騒がし申し訳なく」

教会の横に作られた墓地へ入って、流石に声を静めたりゴレーヌさんと歩みを進めて。

辿り着いたのはこじんまりとしつつも手入れのしつかり行き届いている墓石。

ここに収まっているのは、ボクの母親です。

「ニコルの母とな魔法の師？」

「はい。とても凄い魔法使いだったと聞いてます」

ボクが生まれてしばらくしてから起きた大規模な魔物の襲撃――

スタンピードが起きた際、まだ子供だったボクを守って戦い、そして命を落としてしまいました。

当時の記憶は殆ど無いのですが、その命が尽きる直前まで戦っていた光景はしっかりと覚えています。

「して、なぜ魔法を使わず剣を？」

横に立つリゴレーヌさんの目は真剣だ。そして、鋭い。

やっぱりごまかせません。

「母の言い残した、父の剣が人を守るに値すると証明して欲しい……という言葉です」

最期の瞬間、母は自身が亡くなった後を案じてその言葉をボクに託しました。

父に自分が死んだ責任を負わせないでくれと。

「やはりそう？　しかしそう」

「ええ。だから、父の剣を、技を引き継ぎたいんです」

ただその直後に父は、ボクの事を孤児院に預けて姿を消してしまっていました。

当時からそれなりに名の知れていた冒険者ではあったので背中を追うのは簡単でしたけど、直接会おうとすればまたどこかへ行ってしまうだろうし、どう接触していいかというのはとても悩みました  
が。

納得したようにリゴレーヌさんは一つ頷くと、いつものにへらとした顔に戻って墓石に向かい頭を下げる。

そうしてから「失礼」といい残して消えました。

まぎれもなく、ボクの目の前で瞬きする一瞬で消えました。

「ええ……」

今までは何か仕切りで視界から外れている間に消えていましたが、今回は瞬きするだけでいなくなっています。

やはり勝てません。どう勝てと。初めて会った時やその後も勝負を挑みましたが、本気でこの能力を戦いに活かされたらどうなってしまうのでしょうか。

しばらくして後ろからがさりと音がして、振り返ると戻ってきてい

ました。

端から見ている人がいればどう出現したのか聞いてみたいです。というよりも、リゴレーヌさん本人の視点がどうやっているのか知りたいです。

「持つてきましたお花を一輪。二輪、三輪ひとつの束！ これをどこで申します？ お花畑を知っています」

「えっと、今集めてきたんですか？」

「はい。町の向こうの森の向こう、川の向こうの崖の下」

リゴレーヌさんの手には、確かに薄紫の花が握られていました。

どこかで採取してきたらしいのですが、一瞬でそこまで移動したんですか……？」

「この花仏花に合いません？ お花言葉は追憶なりて、お似合いでしょう？ たぶんそう」

「……そうですね」

お供えするには少し寂しいですが、博識な事に花言葉を知っていました。

追憶という言葉は、確かに似合っています。

受け取って一つ添えられていた花束の横に並べます。

「帰りましようか。マックスさんにここにいることを知られたら、たぶん怒られるでしょうから」



## 殺意マシマシ盲目メイド。

敵地偵察なのでリゴレーヌは家に置いてきた。

この戦いには必要ない。

普通に考えて派手な立ち回りを得意とするあいつに隠密行動などできないと踏んだからだ。

何かあった際にフォローが追い付かない。

あいつの過去というか色々な所で関係するしついてきそうな感じがしたのでニコルに留守番の見張りは任せしたが、大丈夫だろうか。

子供相手は慣れてる様だが今更不安になってきた。

……いや、やっぱり大丈夫か。

いくら瞬間移動が可能とはいえ、今まで見てきた限り短距離のみだ。

野外だからという理由だけで弓矢を警戒する必要が無いように、極端に離れば問題ない。

目的地付近に到着し身を隠しつつ歩を進めると、途端に開けた場所へ出た。

ぽつかりと森が開いており、太陽が顔を覗かせ薄紫の花が多く咲き太陽の光を受けて輝いている。

神聖さも感じるその場所の真ん中に誰かがいた。

「……冗談だろ?」

見覚えのあり過ぎるその姿。

当たり前のように、リゴレーヌが背を向けて立っていた。

「お前、家にいたよな?」

声をかけるとゆっくりと振り返り、にへらといつものように笑って手にした花を向ける。

何を考えているのか普段から分からないが、今回ばかりはより一層意味が分からない。

幻覚を疑ったが、特に魔法を掛けられた感覚もない。本物か。

あいつの移動距離には制限がないのか? なんて奴だ。

「お忘れ忘れの手土産忘れ、故に今更お渡し願ひ? いえいえまだま

だ間に合い申す。ニコルにお土産半分残し、これを御師様墓前に添えて」

ぐい、と手元の花を押し付けてきた。

「言いたいことは何となく分かった。仲間の前に添えて来いって事だろ？」

「そう！ この花知ったりは幼年期にて庭師のおじじ。この場所知ったりは過去からの知らせ。故にここまで来たりたり。では！」

花を受け取ると、深々とお辞儀をして横を通り抜け去っていく。

振り返った時には、もうすでにいなくなっていた。

視界を外れた瞬間に消え、そして距離の概念は無いらしい。

「つたく……」

ここからすぐ近い崖の下、そこには襲われた一座の物であっただろう残骸が転がっていた。

「……………」

すでに見かけた盗賊が探りを入れたのか金品や形の残った物は残っていない。

何かあるとすれば、血に濡れて乾き赤黒く染まった衣服と壊された元が何なのか察しにくい木片の数々。

周囲に何者の気配がない事を確認してから慎重に近づく。

これでは誤って崖から落ちた程度にしか思えない。

魔族と言えば変な美学と自信から分かりやすい痕跡を残すものだがそれもない。

気は引けるが、リゴレーヌに詳しい状況と言わずとも敵の特徴程度を聞いてみれば良かった。

「何かあるとしたら崖の上か」

登る所は周辺に無い。

回り道にはなるが迂回するしか……。

「——何者だ」

剣を抜き盾を構える。

気配がしたのは一瞬だけ。すぐに消えたが、遠くに逃げては無い。身を潜めている。

噂の魔族なのか人間なのか、その正体は分からないがただ者ではないな。

どう動く？

警戒を解いたフリをして誘えばそれでいいが、手練れであればその程度で襲い掛からないだろう。

「ここは特別な地。墓荒らしとするのであれば、容赦は致しません。どうか手を引いて頂けませんか？」

聞こえたのは若い女性の声だ。

どこから聞こえたのかは分からない。俺が警戒している、一瞬感じた方向以外の場所から聞こえた気もする。

やはり隠密、あるいは暗殺に長けたアサシンの相手か。

初撃をどうにかして一安心としたいが、まずは話し合いで解決できないか試すか。

「俺は冒険者のマックス、ここへは調査で来た。この状況が知られればすぐ立ち去ると約束する」

どうだ？

「これ以上場を荒すなど申したいのです。足音一つ、匂い一つ増やして欲しくありません」

「何があったか、何に襲われたかを知りたいだけだ」

「そうですか」

殺気が強まる。

足跡や匂いと言っていたがどうしてそこまでして――

「――お悔やみ申し上げます」

無意識の内に反応した腕が、盾が、相手の一撃をすんで止めた。

「おやっ…」

どこから接近したのかも分からないが、何という踏み込みだ。

レイピアのような細さをした繊細な剣を振り抜いた相手は、この場と状況に似合わないメイド服の少女。

俺が今まで見た中で一番早い、それこそ神速とも取れる一撃を放った相手は防がれた事を疑問に思ったのかとぼけた声を出して飛び退き距離を置いた。

「自信はあったのですが、やはり少し鈍りましたね」

「いいや、とんでもなく素晴らしい腕だ」

少女はくるりと剣を回して鞘に納めると、杖のような一本の棒になる。

メイド姿で杖に偽装した暗殺具を持ち先ほどの斬撃を持つとは、とても恐ろしい。

もしどこかの屋敷で出会い狙われたなら疑いなく斬られていた。

不意を突けるのであればランクSの化け物連中相手も恐らく葬れる。

追撃をしなかったことから素早い一撃に特化しているのだろうが、何を隠し持っているか分からないし戦って勝てるかの判断は付かない。この後も考えれば戦闘は避けたい所だ。

話し合いは無理そうだしハツタリしかない。

怖い、相手の要求に効果的であれば……。

「戦ってもいいが、その方が余計に荒れるぞ」

沈黙。

眉一つぴくりとも表情を動かさない少女が何を考えているのか分からないが、やがてため息をついた。

「これ以上荒されてしまうのは本意ではありません。……貴方も悪い人ではないようですし、引きましよう」

斬る前にその判断をして欲しかったが。

「先の見えない盲目の身ゆえに、言葉のみで判断が付かないのです。無礼をお許しください」

盲目？ 目が見えていないのか。

ハンデ有りでこれとは、恐ろしいやつめ。

「それで、お前はこの事故の関係者か？ 何があったか知っているのなら聞いておきたい」

メイド姿の少女は杖で地面を探り、先程俺も見つけていた血染めの布切れを見つけると拾い上げ確かめるように慎重に触っていく。

「恐らく唯一の生き残りですよ。息を潜め危機を脱したのです」

「なにっ？」

まさかりゴレーヌの知り合いか？

「気配とは視線によるものです。相手を見ていなければ、相手に見られないのですよ。一度視線を断てば隠れるのは簡単でして、それですかしながら落ち延びました」

「……この雑技団には、常識外れしかないのか？」

「じゃあさつき俺が見付けられなかったのは、そもそも姿が見えてなかったということか？」

「行動思考がおかしいだけで能力はとんでもないゴレーヌに、隠密の仕方がおかしいメイド服の少女。」

「こんな連中がただ逃げるしかなくなる状況とは、相手が恐ろしい。常識外れ、とは我々を知っておられるのですか？」

「恐らくお前の知り合いだ。自前の奇術で生き延びたらしい。詳しいことを聞かせてくれるのなら会わせても良いが」

「そうですね。……あの状況で逃れられる奇術とは、道化師の彼女の事ですね」

「それだけで分かるのか？」

「脱出奇術は得意としていましたから」

少女は手にしてきた血染めの布を置く。

その横に俺は持っていた薄紫の花を添えて置いた。

「その匂いは、『追憶』ですか」

匂いでどの花か分かるのか。

「ここで何があった？」

「正直な所、分かりかねます。騒がしさに耳を塞がれ、魔獣の類いがいた位しか知り得ませんでしたから」

「情報感謝する。もう少し探りを入れたいし、会っていくなら少し待ってくれないか」

少女の方を向けば、既に立ち去ろうとしていた。

「会っていかないのか？」

「仲間を見捨ておめおめ逃げ出したとなれば、怨みも相当なものでしょう。私が無事を祝うことなどできよう筈がありません」

「……そうか」

状況は違うが気持ちには分かる。

実力を持ち期待されればその分失望も大きい。

そしてそれが取り返しの付かないものであれば、お前のせいだと指をさされる。

リゴレーヌがそれをするとは思えないが、手のひらとはいつでもくると回せるものだ。

「またどこかでお会いいたしましょう。何か手伝えることであればおっしゃってください」

「悪いが、パーティーは組まない主義でね。情報交換は良いが馴れ合う気はない」

「……成る程、似た過去がありましたか」

見通したかのように言い残し、盲目とは思えない真つ直ぐな足取りで森へ消えていった。

せめて名前くらいは聞いておいた方が良かったかも知れないが、どうせリゴレーヌには伝えないことだ。別によかったか。

道化師、心配す。

迂回して崖の上に来てみたが、やはり何者の気配もなかった。

先ほどのような隠密に長け過ぎている相手だと流石に俺も気が付けないが、ここの様子を見るに大丈夫だろう。

というのも、見つけた痕跡が明らかに魔物……それも魔獣がつけたような物だったからだ。

地面を抉った荒々しい巨大な爪痕。ドラゴンではないが、それにしたって大きい。

「意味が分からないな」

最初に会った時リゴレーヌが話していたのは、「笑わせないと殺された」という事。

そんな判断ができるのは人間に違いないとして勝手に賊だと想定していたが、これを見る限り訳が違う。

だからからといって理性を持つ魔獣というのも聞いたことがないし、魔族にしてもそんな痕跡はない。

魔獣使いという線で考えても飼い主はなんだという話になる。飼いは慣らせるようなサイズではない。

「ロクな情報もないか」

敵もなし。正体に繋がる痕跡も殆どなし。

「さっきのメイド服がいるような連中が全滅ねえ……」

戦闘を本職とはしていないにしてもただでやられる訳がなさそうな集団。

Sランクの冒険者すらも葬れるであろう剣技を持つメイド服が、隠密に徹して抵抗もせず逃げ出した相手。

「……それくらいやばい相手がいるってだけで充分か」

リゴレーヌにどれくらい強い奴が身内にいたのか聞いておこう。

一座を襲撃したのみで他に動きがない不気味さもあり場合によっては町が危ないかも知れん。

「帰るか」

日も落ちて暗くなってきた頃、ようやく町へ戻ってこれた。

道中で何もなかったと言えば嘘になるが、何があったと言われても数回魔物に絡まれた程度。報告するまでもないが、一応遭遇し倒したことは伝えなければいけないのが面倒くさい。

ギルドへの報告は簡素に行い、詳細は明日で良いだろう。

「お帰りしました御師様無事に。怪我無くいえいえ盾に傷」

初めから付いてきていたんじゃないかと思うくらい自然に、いつの間にか俺の後ろにリゴレーヌがいた。

ギルドの中にはいなかった。とすればギルドを出たすぐ横にいたのか？

いや、神出鬼没なこいつの事だ。もしかしたら俺と一緒に扉から出てきたのかも知れない。どうやったのかは知らないが。

俺も簡単には後ろを取られない自信はあるし、それだ。いつもの瞬間移動だ。

年齢で衰えたせいじゃない。まだ俺は現役の筈。まだ大丈夫。たぶん。

「ニコルはどうした？」

「置いてきました」

「無慈悲だな……」

恐らく家にいただろうから、リゴレーヌが急にいなくなり慌てたニコルの顔が浮かぶ。

家へ帰る道中、俺の横へ並んだ。

「昼過ぎ日も暮れ心配でした。心配でした。でしたよ？ 御師様、またいなくなる」

「怖かったのか？」

「みんな、死んだ。殺された、よ？ みんな」

「……そうか」

引き取ってから今日までなんだかんだ常に一緒に行動をしていた。

それが今日になって急に離れての行動で、しかも向かった先は自身の人生が一転した現場。心配にもなるか。



「俺も人間だし絶対死なないとは約束できないが、なるべく死なないように立ち回るさ」

「そうです?.. そうです?..」

期待はされたくない。裏切ってしまった時の失望が大きくなる。

だが、しおらしいリゴレーヌを見て突き放す事も出来なかった。

「そうだ。偶然だがお前の知り合いらしい奴にあったぞ。生き残りらしい」

「生き残り! お仲間仲間、生き残り!」

「ごまかすように出た言葉にリゴレーヌが食いつく。

「名前は聞きそびれたが、とんでもない奴だったぞ。仕込み杖を持った盲目の奴に心当たりはないか?」

「アイーダ姉!」

「姉妹だったのか。全然似てないが」

「いえいえ腹減り放浪リゴレーヌ、見つけて拾って姉代わり! 姉ねえ生きて嬉しの嬉し! 今いざこ?」

「お前の話をしたら、逃げ出したのを恨んでるだろうと所在までは聞けなかった。メイド服着てたしどっかの屋敷で働いているんだろうが」

「あ、それ趣味です」

あのメイド服って趣味なのか!?

「演目は剣武。服はひらひら。綺麗で褒めたら着てました」

「聞きたいんだが、お前のいた一座はあんなどんでも連中ばかりなのか?」

「んむう。一芸特化の尖りはいっぱい。いつもどこでも大人気!

どっかんどっかん笑いと感動お届けします」

そうじゃなくて、戦える人材はいたのかと聞きたい。

アイーダやリゴレーヌが目立ってとんでもないのか、それとも他にも強い奴はいたのか。

「むむむう? 戦いなりぞて」

「道中で魔物とかに会ったら、誰が戦ってたんだって話だ」

「なるほど! 他には誰か? 鞭使いのツバキヒメ、演奏のナブコド

？ うんむう、意外と少ない」

「そいつらはアイーダよりも強いのか？」

「戦いメインに添えてはおらず。けれども全員負け知らず。けれども皆……」

鞭使いは分かるが、演奏ってなんだ。何をするんだ。

ともかく、立ち向かっていたのは当時戦っていなかったリゴレーヌと逃げていたアイーダを除いたその二人か。

具体的な強さはともかく、アイーダ並みという事は大抵の敵ではない。

「場合によっちゃ仇討ちに参加する事になる」

「なんと！」

「お前は相手を見てるんだろう？ どんな奴だった」

「どんなど申されましても、お客さんは沢山でした。けれどもけれども、大きな一つの影もあり」

「大きいか」

それが地面に爪痕を残した魔獣か。

お客さんが沢山、というのは人間並の敵が沢山いたという事で良いのか？

「そう！ けれどもけれど、皆様方けむくじやら」

「……獣人？」

「それとも少し違うよな？ なんだか虚ろで歪で綺麗じゃない  
分からないな。」

——いや、まさかと思うがカメラの類か？

魔王軍の中には実験好きな魔族の存在がいたと聞いたことがある。  
魔王復活に合わせてそいつが動き、実験をしていたとなれば……。

少し厄介だな。

「明日まとめてギルマスに詳細を伝えるが、来るか？」

「やりましょう仇討ち！ 今は道化で冒険者、先立った仲間成長した姿を見せ無念を晴らそう！」

空回りにならないといいが、公演となれば失敗はせずかつアドリブも効くこいつの事だ。思っているような心配は必要ないのかも知れ

ない。

「リゴレーヌさあーん！」

話もひと段落着いた頃、遠くからニコルが走ってきた。

走り回っていたらしくものすごく息を切らせている。

「リゴレーヌ」

「なんでござりましょう？」

「今度から緊急時以外はちゃんと人に言ってから席を外すように」

「分かり申した！」

普段からニコルには厳しく言っているが、流石に可哀そうに思えた。

## 道化飯。

「おおー！ なんたる失態なりぞや！」

翌日。朝から騒がしいリゴレーヌの声で目が覚めた。

続いて何か割れたような音が響く。

「今すぐ逃げなくば三味線にされてしまう！ この場はお逃げよ逃げなさい、さーさわわー！」

「——朝からなにやってんだお前……」

慌てて窓を閉めたりリゴレーヌの足元には、瓶の破片が散乱していた。

「これはこのリゴレーヌの失敗にあり、猛獣達に一切の非がないことをここに表明します」

「猛獣って、猫が割つちまったのか」

「なんんななな、なぜにお分かり御師様なぜに！ 猛獣達はみな逃げ仰せたと言いますのに！」

「お前はもう少し自分の発言を見直せ？」

瓶を割ったと言っても、使い終わって空だった奴だけなので別に気にしてはいない。

その場を動かないように釘を刺して箒で破片を片付けようとしたら、近づいた所で箒を奪われた。

高跳びでもするように柄を使って破片だらけの空間を抜け、自分で片付け始める。

責任感はちゃんとあるようだ。猫がやったのだしリゴレーヌのせいではないが。

「いえいえ猛獣の不躰は使い手の責任。今世話しせりはこのリゴレーヌ、故にこの場は収めなり」

「まあ、それで気が済むのならいいさ」

一か所に集めたりリゴレーヌはその上にどこからか取り出した布を被せると、次にはその下にあつたはずの破片を全部どこかへ消した。

瞬間移動の応用なのだろうがどこへやったのだろう。ゴミ箱の中

にもない。

「どこに捨てたんだ？」

「ふ、ふふふ、気になり？ 気になりて？ さき、ご注目！」

ああ、いつものノリだ。何するんだ今度は。

さつき被せていた布を表裏とこちらへ見せる。種も仕掛けもないと言いたいらしい。

「んんー……、じゃんー！」

テーブルの上に布を被せて一気に取り払う。

「拍手ぱちぱち調子を揃え、お褒めにあられば大喝采！」

割れる前の、元の状態の瓶が復活していた。

これは、直したのか？ それともいつものナイフみたく増やしたのを置いているのか？

「あつと驚きお声も出ない？ それはそれとてお褒めの形、この芸つまりは大成功！」

あー、うん。いっか。

そういう事もできるつて事にしておこう。

とりあえず飯にするか。

「お食事ですか飯ですか？ なんとな今日はリゴレーヌがご用意させていただきました」

「お前が？」

「はいー！」

できるとは思わなかったし、そもそもなぜいきなり？

「昨日一日ニコルと過ごして教わりなりたり朝の支度。実践あるのみやってみました」

「そうか」

「では失礼」

と言つて、目の前で布を広げ視界が隠された。

ここまできると何をするのかはもうわかる。この布が取り払われた時、テーブルに色々並んでるつて事だろう。

「さん、にー、いーち！ それっ！」

「はいはい……つて」

テーブルの上は、変わってなかった。

「何も起こってねえじゃねえか」

「あれまー」

いつものからして失敗はないだろうから、こつから何かを仕掛けてくるか。

さあこい。

「うんむう。これはさてなぜ失敗なりて？ 視界は遮り準備も万端、さてはて？」

本当に失敗してたのか？

「パツと払いてパツと姿を現し成功となりななりでございましたがあれまさてはて」

「お前でも失敗する事があるんだな」

「うー」

悔しそうな顔をしてもう一度布を広げた。

今度こそ成功になるのか。というか普通に用意するという事はしないのか。

「さあー」

ぱざりと布が落ちて、今度は成功したようでテーブルの上に食事がついに並んだ。

並んだが、なぜか猫も一緒に付いてきていた。

「ああー、お前が邪魔をして失敗なりてましてたか！ このー！」

口ではそう言うが、やっている事は抱きかかえて頬ずりだ。怒ってはいないらしい。

「というか、猫に邪魔されるような事なのか。お前のそれ」

「奇術とは繊細な技術と準備がおりなすものなりて、こやつでもとて簡単阻害」

そういうえ魔法とかじゃなくて奇術って事だったな。一応。全くどうやってるのかは分からないが。

街と何時間も離れた森の中を気軽に往復できる瞬間移動や、質を変えずいくらでも物を増やせる能力。

それらに種や仕掛けがあるとすれば解説して欲しいものだ。

「培った技術知識とは価値なり商品なり。御師様と言えどそうと気軽に極致を教える訳にはいきません」

「ニコルには教えるんじゃないのか？」

「基礎的簡素なものなりて。それに全部は教えずなりて。それでも良ければ御師様もご一緒なさる？」

「いや、やめとこう」

それより飯にするか。

見た目は悪くないし、ニコルが教えたのだろうそのままなら大丈夫なはず。

野良猫を家の中に招き入れてるのは少し気になるが。

「……うん」

「どうです？ どうでしょう？」

「いや、普通過ぎてなんか」

「面白くないと。いえいえいえ、きちんと弁えまして事ですよ？」

リゴレーヌが普通の事をしただけでなんか感動しそうになった。

「え、リゴレーヌさんが普通の食事を？」

「教えたお前が何で驚いてんだ」

少ししてニコルが家に来た。

今日は朝から猫が瓶を割ったから早起きをしたが、本来ならニコルが食事を用意する予定だったな。

仕事を奪ってしまった感がある。

「教えたと言っても、ボクの一日の流れを何となく会話で伝えた程度です」

「じゃあなんだ。こいつは時間になったから見よう見まねでやったって事か」

「恐らく。それでここまでできるなんて流石ですよ……」

元から簡単な料理位でできたって事か？

「弱点は無いのか弱点は。今の所何やらせても会話以外はそつなくこなすぞ」

「はは……会話以外は……」

ニコルから乾いた笑いが出た。

「……マックスさんは、よく合わせられてますよね、会話」

「どういう意味だ」

「そのままの意味ですよ。今まで人と会話するのも極力避けてたらし  
いじゃないですか」

「ああ、それは……」

見捨てきれずに話しかけ手を伸ばしてしまった。

行き当たりと言えばそうなんだが、ニコルの言う通り昔と比べて俺  
も丸くなったのかも知れない。

丸くなった、か。

リゴレーヌに構う事で過去を忘れたふりしてごまかしていたかも  
な。

「……ニコルを弟子にして家に置くよりマシだ」

「ちよ、突然なんですかそれ！」

「裏表のないリゴレーヌの方が、絶対なんか隠し事してるお前よりマ  
シ」

「いじわるじゃないですかあ」

これだけ言われてくじけないニコルもニコルだ。隙あらば弟子入  
りしようとしやがってからに。

「御師様！ 手紙が届いておりますまし。差出人はクラリス  
！」

「クラリス？ どうせ宣伝だろまた」

リゴレーヌから受け取り、筒状にされた手紙の紐を解いて中身を一  
応確認しておく。

やはりというか入荷品の案内だ。一応リゴレーヌの事を気にか  
けているのか、偶には顔を出してくれと書かれている。

ギルドに調査の詳しい報告とリゴレーヌの証言、主観を伝えたら



寄ってみるか。

戦いが本格的になるなら俺も武器の調整をしておきたい。

「クラリスって、ドワーフのクラリスさんですか？ 背の低い」

「お前知ってたのか」

「昔からの友達です。よく一緒にお買い物とか行くんですよ」

それならよかった。

あの武器屋、というよりクラリスが管理してる店は高ランクのみが利用できるようにしているからな。

ニコルなら下手に言いふらすことは無いが、もしギルマスが漏らしていたなら突つつくべきだった。

「ギルマスさんに武器屋をしてる事も教えて貰いましたけど」

よし、しばくか。

## ビッグ剣。

ギルマスに昨日の顛末、リゴレーヌとアイーダの証言、俺の主観を伝えておいた。

備えておいて損はないと念押しをしておいたので大丈夫だろう。ギルマスも隙あらば酒を飲むが馬鹿ではない。

「アイーダにもう少し聞いて置きたかったが、本人は会いたくないと言ってるし」

「寂しき寂しリゴレーヌ。アイーダ姉とはまた手を取って、暖炉を囲んで語らいたりぞや。やぞかたもう」

「無理強いするな」

「むむむ。御師様肩入れ姉ねえ庇い、何か後ろめたさありたり？ りたありたさー！」

「本人の意思を尊重してるだけだ」

単純に、俺も昔似た事があったって逃げ出した事があるってだけだ。

ひとり生き残ってしまった者へ向けられる感情と言葉がいかに辛いかは分かる。

また偶然会ってしまった場合には仕方ないが、今はいい。

本音としてはやはり色々聞いておきたいが。

「そいさっさよいよい？ したりやなりきてそそいのややや」

「何言ってるんだお前」

「言葉に意味などありません。内に秘めたり感情大事、御師様言葉にごまかし混じり」

「お前の喋りよりは分かりやすいとは思うがな」

「あれままれあれままれあれ」

以前はリズムに乗せて喋っていたが、今日はより一層訳が分からん。

ノリで口ずさんでいるようにも思えるが何か意味があるのだろうか。

「ふ、ふふふふ。御師様困惑言葉を返し、言葉に意味などありません？」

……言葉に意味などないとか言ってたな。

「などあり意味ありに言葉ばばば、言葉を返し困惑御師様ままさまさまま、んふふー！」

「いや本当に意味ないのかよそれ」

「来たぞ」

「来ましたなりぞよクラリス来たよ、こちら道化師リゴレーヌ！」

「いらっしやーい」

合言葉も適当に奥の部屋へ案内される。

リゴレーヌを連れてきた事に歓迎ムードを出してくれているが、以前に来た時は苦手意識を持ってなかったか？

嫌ならわざわざ手紙を出さないか。

「確かに前はリゴちゃんに振り回されたけど、あの子……ニコちゃんに悪い子じゃないって聞いてさ」

「少なくとも悪人じゃないのは確かだな。言ってることは意味不明だが」

「それでもいいでしょー。ね、リゴちゃん」

「リゴちゃんなる者このリゴレーヌ？　なんと可愛いあだ名なりぞで気に入りもーしー！」

「んー！　リゴちゃん可愛い！」

「お前、そんなキャラだったか？」

「おっさんに愛想は振り向かないの」

誰がおっさんだ。誰が。

「で、もっかい聞くけどほんとに浮気はしてないよね？」

「もっかい言うが、人聞きの悪いことを言うな」

昔からの付き合いだから許してはいるが、これを言うのがもしニコルだったらキレてるぞ。

「マックスって本当にニコちゃんに厳しいよねー」

「お前らの仲が良いってが驚きだよ」

「そりゃあ……あ、リゴちゃんその剣危ないから置いてね。というかよく持てるね」

「おや、おやおやおやおや?」

目を離れた隙にリゴレーヌがバカでかい剣を持とうとしてた。

なんだあれ。俺でも持つのは難しいぞ。

「持てまし持てます巨大な大剣。驚きましようか? びっくりでしようー!」

「びっくりしたよー」

「諦めろクラリス」

「まだ何も言っていないよ!」

振り回せるんだっいたらいつもの身軽さと合わさって途轍もない戦力になるんじゃないか?

問題は、道化師の舞台に関連付けないと扱えないだろうということだが。

「リゴちゃん力持ちだねえ」

「本当に会話以外の能力は高いんだよなこいつ」

「使えるなら安く譲るよ? 邪魔だしいらないし」

「何で作ったんだよそんなの」

「知らないよ。趣味じゃない?」

そんなものを店に置くな。

それと、持ち帰った所で床が抜けそうだしいらん。

「それで今日はどうしたの?」

「俺の装備の手入れと、リゴレーヌに新しい武器を頼みたい」

持ってきていた装備の一式を渡す。

仕事となればクラリスも流石に真面目になるので、職人モードに入ってしまったえば静かだ。

……そんな真面目な顔を覗き込む道化師様はもう少し静かにしてくれないだろうか。

「マックスはともかくリゴちゃんも? っとうわ、リゴちゃんのやつ

刃こぼれ酷くてぼろっぼろ」

「相手の攻撃を未だに一撃も食らってない代わりにそれだ。盾もつい



「信用ありか無しか分かりませんがなどうでしょう？　これは身の降り致し方あるまし、しかししかとて道化にしてしようがなき」

「リゴちゃんはまず喋りからしてよくわかんないよねー。噛んでるのかそういう言葉遊びなのか」

「まあそうだが、だからといって普通に喋ってもむしろ気持ち悪いんだよな」

「このへんてこな喋りがアイデンティティーだよな」

「やろうと思えば普通に喋れましことですよ？　なりとて、やりませんだけですことなり」

できてねえし。

アイーダの生存を報告した時は素に戻ってた気がするが、あれは短い文だったから普通に見えていただけか。

以前は辛いことがあって狂ったのかと思っていたけれど最近はこちらが素だと認識している。

尤も、こいつの人生自体が色々あったようで狂いまくってるみたいだが。

「よし。それはさておきこの程度なら明後日くらいに仕上がりかな。それまで替えの物いる？」

「明後日なら別にいいか。いざとなれば予備の剣もあるし」

「あれですか、どでか剣！」

「ちげえよ」

普通に使わなくなったやつだよ。

ベリテツト。

「御師様最近お酒は控えめ？ 健康よしよし、されど我慢はどくどく」  
「……そーういや最近飲んでなかったな」

「しまったもしや藪の突つき！ お忘れ忘れて何でもなし」  
「別に飲みたい訳じゃない」

装備を預けているため今日は休みとしたが、かといって特にするこ  
ともない。

買い物もニコルが担っているので出かける用事もないし。

久しぶりにのんびりするかと目を伏せ休憩とするが、落ち着きなく  
を動き回るリゴレーヌの出す物音が強調されて落ち着かない。

次に目を開けた時、テーブルを挟んで向かいからその道化師様が俺  
の顔を覗き込むようにじっと見ていた。

「むむう。御師様退屈にありけりなりぞや？」

「まあ、暇と言えば暇だな」

「ならばなれば、公演！ この道化師リゴレーヌがいる限り退屈と  
は無縁なりて！」

「公演か」

「前回の続きにございます」

言うが早いか前にもやったようにどこからともなく小道具を取り  
出し始める。

公演とは言っているが、その小劇場で行うのは人形師のする事では  
なからうか。

本人に直接伝えれば道化師という職に誇りを持っているし怒るだ  
ろう。

「さてさて前回あらすじ父の裏切り。嫉妬に狂った父の妬み。高名た  
らりたる父の誇りは視線の数々尊敬の。

とならりやあられま？ そう！ 名声横取りされたるは妬って嫉  
妬の充分理由、石壁の外を見たいその少女、騙して諭して追い出した  
！」

小劇場の少女人形は、男性人形に色々告げられたあとひとつ頷くと

宙に浮かび上がってひよいと簡単に城壁のような物を飛び越えてどこかへ行つた。

少女人形が向かった先は森の中らしく、薄暗い色の木々が左から右へ流れて少女が歩いている様子を描いている。

……どうやって背景を含めてまとめて動かしているのかは分からない。

「父の言葉に疑い持たず素直に従い山林歩き、三千数百数千里。流石に怪しみ振り向くも時遅し、彷徨い歩いて倒れに伏して、ついについにどこまでか！ わおーん、わおーん！

ああ恐ろしきか遠吠え！ 闇夜の月光の下、響き渡る！ ほーほー！ わおーん！ ぐるぐるー！」

倒れた少女人形を獣の影が取り囲む。

ものすごく恐ろしい状況をまくし立てる気迫は充分なのだが、気の抜けた声せいで少し台無しな部分もある。

つい引き込まれてしまう勢いは良いのだけれど、リゴレーヌの演技力不足か。

そもそも台詞回しが独特で分かりにくいし、それに道化師が本業なのだし仕方ない。

「――あ」

ふとりゴレーヌが顔を上げて家の玄関を見た。

「誰か来たのか」

だいたいこういう時はそういう合図だ。

一拍置いて、ノックがしてから開きニコルが顔を覗かせる。

この家に用があるのなんてこいつくらいだろう。

「こんにちはー」

「よう」「来ましたニコル、こんにわにわわ！」

いつも通り食事の用意だとか掃除だとかだが、今日は確かりゴレーヌと手合わせするとか言ってたな。

少しずつ実質的な弟子に歩み寄ってきている。そろそろ線引きしたい。

線引きはしている筈だけど。



懐に潜り込むのが上手い奴だ。

「公演か何かをしてたんですか？」

「ですねでですがおしまいです。本日これにてカーテンコール」

舞台を片付けるリゴレーヌの手元から人形が落ちた。

こちらに來たので拾い上げると、どこか見覚えのある人物に似ている。

どこか見覚えがある。というよりも、これは……。

まじまじと見ていると手元からさつとりゴレーヌが奪い、隠す様にどこかへしまった。

「リゴレーヌ」

「御師様それは無粋というもの。予想考察楽しんで、しかし台本メタ読み楽しみあらず」

一口に言つてなんでもないとするが、どう見てもさつきの人形はリゴレーヌに似ていた。

.....

「よろしくお願いします」

「よろしくでしょう演舞の演習！」

互いに同じ模擬用の装備で向かい合う。

庭でニコルと木剣を打ち合う姿を見つつ、もしリゴレーヌを拾っていなかったら今頃どうなっていただろうか、そんな疑問が浮かんでしまった。

多分、というよりほぼ確実に俺の弟子はニコルとなっていただろう。

俺が勝手に嫌っているだけで十分な教養と剣士としての素質は持ち合わせている。

「とりゃー」

「せいー!」

剣を盾で弾いたニコルは正面から踏み込まず、リゴレーヌの持つ剣を盾で制しつつ側面から回り込んだ。

勝手な応用や挑戦をせずに基礎だけをしっかりと意識している。良い所を見せたくて背伸びをするのが認められた子供つてもものだろうに。

リゴレーヌを拾って一番良かったと思うのは、ニコルを常時家へ置いておくことにならなくて済んだという一点に尽きる。

確かにニコルと比べてリゴレーヌは静かに飯も食えないし、戦い方を教えた所で勝手な事をする。会話も成り立たないことが多いし手間は倍以上かかる。

そこまでしてニコルを家に置いておきたくないのは、何か裏があるという理由もあるがそれ以上に……

「似てるんだよな、あいつ」

顔を見たのはもう何年前になるだろうか。

今頃はニコルと同じくらいの年齢になっているだろう孤児院へ預けた娘に、何となく似ている気がする。

同じく孤児院所属とはいえニコルは男なのだし違うとは分かっているけれど、尊敬を持って接してくるその顔を見ると罪悪感に蝕まれる。

それにその名前もだ。「ニコル」とは俺の妻の名前だ。

あいつに悪気が無いのは分かっているし勝手に俺が嫌っているだけというのも分かる。

分かっているが、俺に甲斐性がないせいでこじれている。

「くやみもうしたもーうー!」

「はやっ!」

アイーダの真似だろうか? あれほどの勢いは流石になかったが、それでも一拍の溜めから放たれる充分な威力の一撃がニコルの盾を弾き飛ばした。

基礎はできてるとはいっても経験の少ないまだまだ子供だ。それにニコルは男にしては細いしあれを防げないのはしょうがない。反応して盾に当てられただけでも充分だろう。

というか、あれの本家は俺でもなんとか直感で防ぐのが精一杯だったし。

「ベリテット……あ、いや」

「?」「え」

——しまった、つい娘の名前を。

突然別の名前を言ってしまったせいでリゴレーヌは首を傾げるしニコルは驚いた顔するし。

「なんでもない。ニコル、もう少し盾を引いて構えてみる」

「……はいっ!」

弟子にするつもりは無いと言いつつも口を出してしまい、勘違いをしたのかニコルは今までで一番元気のいい返事をした。

しかしだ。俺もここまでニコルを邪険にする必要はないんじゃないだろうか。

振り返ってよく考えてみればニコルが裏で何を考えていようが関係ない。

何かのきっかけがあるのが所詮そこまでだ。というよりも、そもそもギルマスだってどこまで俺の事を話したのか。

「御師様御師様! こちらの構えはどうでしょう、どうでしょう!」

「お前はそもそも構えろ」

昨日クラリスに言われた通り、丸くなったのかも知れんな。

あるいは、過去を忘れつつあるか。忘れてはいけないんだがな……。

なり申したりぞて。

やは？ むう。

む？

お客さんには今更いらぬと思ひしなりて、さしているから自己紹介。

吾の名はじゃじゅじよのリゴレーヌ！ こんにちは？ おはようございまして！

しててしてして本日快晴ぽかぽか日和にございましてはお出かけ日和。

なのになぜ故ニコルと留守番任されリゴレーヌ？

いざこと師様は御師様しさま、先日預けし装備を受け取り貰いにお出掛けなりて、置いてかれ。

御師様曰くわくわく稀には離れる話されて。ノンわくわく。

わくノンわくわく曰くわく。

何故なぜ故ゆえ何故なぜ？

それは謎とも呼ばれず何故ならば、吾を拾いし頃よりひとりの時間は少なく慣れろと言いたい恐らくたりや、たぶんそう。いえ絶対。うん。

前の以前のこの前の、御師様帰りが遅くて不安を見せたりぞやそれ原因か。それ原因か。

心配に心配返して心配されるとは、うむむむ見くびられたりたられたり。

りたれたりたれ、見くびられ。む！

さては帰りに酒場に寄りてのお酒飲み。昨日に話を振ったが間違いか！

不安に駆られたりは向かったその場所恐ろしなりて、近づく即ち危険に近づく故に故ゆえなりとていうに。

あの場あの場所あの現場、思い出すのも恐ろしい。

「帰りは少し遅くなるかもと言っていましたし、それまで何してましようか」

「なれば！ 昨日の再公演となりました！」

「昨日の？」

そう！

取り出したりぞは木の劇場。裏路地いた頃作ってそのまま、ついに日の目を見たりの小劇場。

人形ひとつ、人形ふたつ、みつつよつつのいつむつつ。

手作りですよ？ 廃材アート！

廃棄の木材、廃棄の布地、汚れし物とて継ぎはぎパッチのパッチパチ！

小物なりぞはごまかしききて。いえいえごまかしあまり褒められ事ではならぬ。

けれど現在変えあらず。お金を貯めて道化の帽子を手に入れるまでの辛抱！

「さーささ始まりなりぞは前編続き、中編いえいえまだもう少し。

覚えておやりの前回それは、石壁の中の少女がおりまし才ありあまし、父に才能嫉妬され！」

演技は台本なぞつて喋って動かし簡単なれど、手を抜く事を許さぬは吾のプライド。

客人ひとりと席あれば、全力尽くすが道化なり！

短い公演なられどなれど、手順のひとつに誤り無くし。

短い公演ならればゆえに、記憶に残らう演技を見せよう。

「——続きはまた次御師様共に、進行ペースは合わせて進行」

「本当に、凄いですね……」

んふふふふ！ 褒められた！

おひねり以上に喜び上がるはお褒めの挨拶！

注目される声の声！ 声掛かりなるは目に見えての形！

声が目に見える？ 音見える？ そう！

形に残らずしも記憶に残るは即ち記録、取り出し不可ぞて自身で楽しむ不足なし、記憶笑い！

「ありがとうござい、ましたあー」

頭を垂れて一礼ひれふし。

感謝の言葉はお客さんあつての事。声掛けらるるは当たり前と思  
うなかれ。

相手が誰とも関係なしに、公演を見てくれた、聞いてくれた、記憶  
に残してくれた、そして感動してくれた。

そのものへの感謝忘るなかれ。忘れしその時それから道化にあ  
らず、いえ！ 芸人にすらあらず！

「超小規模な風魔法で動かして……いやそれだと発動の……」  
舞台を片付け正面向けば、ニコルは何か細々呟きなりぞや。

ふふふふ、種も仕掛けもござりにますが、そうやすやすとは見破れ  
まいて。

多少の基礎は教えとも、深入り特権教えぬりゴレーヌ。

まま、説明したとて吾以外使えるとも思えぬがな！ むっはっはー  
！

吾の才を過信過剰の自信にあらじも、ただでは習得できぬぞ我が奇  
術。道化の道は千里なり。

「それにしてもリゴレーヌさんのそのお話、何か元があるのですか？」

「これはなんとまとある少女の話実話。その少女とは？ さてさて続  
きをご期待」

「ははは、楽しみにしてます」

「楽しみさるるばこちらも身が入りよう！」

ようが身もこちらも入りさるるば楽しみご期待！

ふんす！

「……それにしても、マックスさん遅いですね」

装備の受け取りのみなれば往復に時間もかからぬよろうと？

ニコルも御師様に似て少し鈍き。どこにおるのか探すまでも無き  
き。

「どこかに寄るとか話してました？」

「いえいえなんとなし」

迎えに上がるなればできますが、そつとす時も偶には必要。

でしょうか？ そつとす。

人と人とは繊細繋がり息抜き偶に、アイーダ姉ねも酒は飲む。絡み

酒。すぐくよわい。

「心配不必要なれば過剰はなしです。御師様押し押し苦手によも」  
「にやも? ……マックスさんが干渉を嫌っているのは確かですけ  
ど。お夕飯どうしましょうか」

「それならちよつとま聞いてみましょう。聞いてきて」  
「え」

「少し席を外します。なり」

「断り入れての席を立ち、席外し。」

家の扉を開いてばばん! そこは御師様の居る酒場! からんこ  
ろーんと扉が開きます。扉を開けます。

公演の数は減りぞてここにはよく来る裏路地の。愛想の良き良き  
おひねりご飯の客さん。

御師様ちゃんとそこにいました。傍わに、装備を置いて、酒一杯。  
ゴーチチゴ。

「リゴレーヌか。……どうしてわかった」

「何となくです何となく? 寄るとこここしか心当たりなく。こここ  
こ」

「そんな遅くはしないが、もう迎えか?」

「いえいえ我らニコルとリゴレーヌ、食事はどうと聞きたくて」

「ああ。すまん、決めてなかったな。そしたら悪いが適当に済ませて  
くれるか。金が足りないなら渡す」

「ふむんふむむむ、その通りに。不具合があらればまたきます。では  
ではおやすおやすのおやすみなさい!」

踵を返してくるりんぱぱは、視線の追っかけあつては移動もでき  
ぬ。

しかし吾はどんななりでも道化師本業。得意の瞬間移動はそれし  
きにて止めらるると思うか?

否否否、いなななな。もつと目のある舞台になりても絶対成功リゴ  
レーヌ!

「わん、つー、わおーん!」

ぱんつと手を叩いで猫だまし。ぴかりぴか。

一瞬視界の逸れた今、消えます消えます吾は消えます。

「これこそ得意の瞬間移動、消えて現れここにいる！」

「ばあっ」

「——うわああ!？」

出た先その場所ニコルの背中。

またまた扉を潜りて出てくると思ひ？ いえいえ後ろの正面やっ  
てきました。

それより夕食適当にしろとお言葉賜り承知仕る。

「適当に、ですか。うーん……」

「適当なりとてどうとも言えぬ？ 御師様急に物申す。けれどお忘れ  
仕方あるまし」

「そしたらボクの孤児院に来てみますか？ ひとり分の食事が増えた  
位大丈夫ですよ」

「ほほう！ ニコルのお家！」



## 道化師の新奇術。

「ニコルの孤児院で？」

「はいですそうですニコルの家です。大好評です道化の演技！」

「迷惑かけてないだろうな」

「いやふふ心配無用」

新しく持たせたダガーの扱いを見る為に適当な依頼で森に向かいつつ昨日の事を聞いてみたら、リゴレーヌはニコルのいる孤児院で食べて来たらしい。

学んできたとはいえ道化師ぶろうとしてテーブルマナーが滅茶苦茶な奴の飛び入り参加なんて迷惑だっただろう。後でいつもより少し多めに寄付して詫びなければ。

「いえいえいえ知っておりますマナーの基本。今までわざとですよ道化の派手による」

「後でニコルに聞くからな」

「驚きますよ？ 真面目な道化！ んんん？ 今までが真面目でない？ いつも真面目な道化道！」

やけに自信満々だな。

確かにワザと崩しているとは言うが、だからといって急にまじめにしようとした所で限度がある。

というかそれに道化の演技が好評と言ってる時点で何かやらかしてる。

やはり寄付は多めにするべきだ。

「今は良いか。帰ってから話そう」

「はいさいのははいー！」

返事も元気だな。

一応師匠の立場であるので叱る時はしっかりと言わねばなるまい。小手の位置を直すとダガーを取り出し、いつものようにジャグリングを開始。

5つに増やしたそれを宙で回しながら歩いているが別に止めない。リゴレーヌの視野の広さ、戦闘能力は知っているしこれがこいつの

戦闘スタイルだとすれば変える必要はないからな。

諦めたともいう。

前に持たせていたサーベルはジャグリングに適してないと思っていたのかやっていたいなかったし、そのおかげで増えていなかったからすぐダメにしていた。

しかし新しく用意したダガーはできると判断したのか増やしてくれたので刃こぼれの心配もないだろう。

投げて良し、斬りかかって良し。最初からこっちにしてあげばよかった。

「索敵能力は流石だな。やるか？」

「任せられされされではではでは、御覧に入れます道化の奇術。本日公演なんでしょう？」

草むらから顔を覗かせたオークと目があう。

最近はまだ魔物を倒すことに抵抗はなく、細かい指示を出さずとも動いてくれるので楽だ。

「本日お見せいたしますはこの道化師リゴレーヌの新たな奇術。それは時間を操りなりて」

は？ 時間？

マジかこいつ。

「んふふおとつとそれでは分からぬか？ それもそのはず初の試み初舞台。刮目拝見驚きなれよ、口伝宣伝千里を駆けるは充分内容驚きなれよ！」

口上を無視して接近したオークが棍棒を振り回してきているが、まるで意に返さずといったように全ていなしながら続ける。

「まずはお手本基本のナイフ投げ！」

跳んで相手の頭を踏みつけてさらに高く跳び、太陽を背に空中で身を翻しながらダガーが放たれた。

両肩に一本ずつ当て、背後に着地したりゴレーヌの手元に残りの三本が落ちてきてジャグリングを再開する。

ここまではまだいつも通りだがどうするつもりだ？

どう時間を操るといえるのだろうか。

俺の事を無視して背後へ向き直ったオークが足を鳴らして怒りを露わにする。

それでも慌てず涼しい顔をしながら残ったダガー全てをオークの足元へ投げた。

地面に刺さっただけのように見えるが、なぜか足が固定されたかのようにオークはもがいている。

「行きますよ？　ご覧あれ！　道化の奇術は時戻し！」

その前に地面に投げたナイフと動けなくなったオークについて説明して欲しい。

「わんとうーさんしー、せーのっ！」

振る手に合わせて、オークと地面に刺さっていたダガーがひとりだけで動いて抜け、そして飛びリゴレーヌの手元に帰ってきた。

時戻しと言われれば確かに投げたものが戻っているが、あまりパツとはしないな。

派手ではないし分かりにくい。

……どうやって手元に戻したのかについてを放棄して芸としての採点を付けている辺り俺も毒されたな。

「んむう。確かにあまり派手にもなく分かりにくきは華やかさもなく。残念なりぞや。そは失敗」

芸を諦めたのか眉間に一本差して止めを刺した。

実戦という観点で見れば投げたものを拾わず回収できるというのは良いと思うが、手持ちの残数を増やすという常識外れの方法で解決できるリゴレーヌにとっては不要なものだろう。

それよりもオークの足止めをしていたあれの方が役に立つと思う。

あれは何なんだ？

「何と問われど影縫いにございましょう？　ぬいぬい」

「いやあたり前のように言うな。なんだそれ」

聞いた事がないぞ。

「御師様はお聞きになられた事ならずには？」

「ああ知らない。説明してくれ」

「影縫いとは！　とはいぬかげ！　わん！」

一本ダガーを取り出し、俺の足元へ放った。  
なるほど。実践してくれるのなら……。

あれ？ 待て、足が動かん。何したお前。

地面に足の裏がくっついてるかのよう動けん。

おい。

「モノ動かねば影動かぬ故に、影動かねばモノ動かず。故に影縫い呼び足りふぞふぞ」

「待て待て待て待て、戦いという目で見る。足が動かない剣士とか戦場じゃ死んだも同然だぞ」

「でももでももお客さんには全く伝わらない！」

さっきの「時戻し」で俺の足元からダガーを回収したりゴレーヌがジャグリングでまた増やし、草むらへ数本放った。

それと同時に鳴き声が出て、がさがさと魔物がもがく音が聞こえる。

姿は見えないが声からしてまたオークだろう。何かいるのは知ってたがまたお前か。

「新芸開発今回失敗、御師様アイデアあられば欲す」

「もう少しあいつについてなんか触れてやれよ」

無視されてるオークがかわいそうだ。俺がナイフを投げて倒す。

「あと倒したと思ってても生きてる場合がある。気を緩める前にしっかりと確認を——」

リゴレーヌが倒した近くの地面を転がってる奴を蹴って転がし、気が付いた。

最初に確か両肩へダガーを刺さしていたと思うが、こいつからは傷がなくなっている。

時戻しの名の通り、ダガーを戻したと同時に傷も治したのか。

……いや、まさか時間が本当に戻って治ったのか？

脳天に突き刺さったままになっている締め的一本。これを時戻しでリゴレーヌが回収したらどうなる……？

まさか、まさかとは思いますが生き返ったりしないだろうな。

……………。

「あ、それ忘れてました」

気が付かれた！

急いで引き抜き血を払い渡してやる。

「うげげ、御師様乱暴酷いなり」

「……時戻しは封印だ」

「ええー。片付け楽になり申すというに！」

「それでもだ！ 絶対使うな！」

何が起こるか分からん！

リゴレーヌなら、死者蘇生とかの方が一をやりかねん！

## 帽子素材。

その後は新技への挑戦もなく、リゴレーヌは普段からしてみれば積極的に交戦を仕掛けておかげで少し早めに依頼は終了となった。

別に急ぐことではないと思うが、どうやら道化師様はすぐ町に戻りたいらしくダガーを数本を宙で回しながら帰ろうと提案している。

何か用事でも、それとも珍しくお願い事でもあるのだろうか。

「公演終わりの賃金貯まり、小遣い貯まりののですよですよ？　なんとそれはななんと帽子のめどー！」

「そういえば欲しがってたな。良かったじゃないか」

「はい！　お山のもこもこカラフル沢山！　目立って道化の象徴なりての誇りになりて！」

「……特にこれ以上狩る必要もないからな。帰るか」

「お聞き入れての感謝に感謝！」

ご機嫌に歌い始めながらジャグリングのダガーを増やし、数えきれないほどを回している。

いつもは多くて10本も行かないというのにこんなできたのか。

「たったたったの、たったー」

御師様従事の幾何何日数えておらぬがなんと帽子、そうです道化の帽子が頭にぽーん。

お披露目公演何ににしましよか？　得意の奇術もそれよし挑戦新た、しましよか何にに公演お披露目。

気持ち新たに洗礼名簿、いえいえ三度目名前はあらず。この名その名はリゴレーヌ！　吾は道化師リゴレーヌ！」

よほど帽子を買い替える事が嬉しいらしい。歌というにはいつもの喋りなせいで意味不明だが。

「お前、それが終わったら何するんだ？」

「といたしますと？　ですよ？」

「次の目標は何かって話だ」

「うんむう。まだまだこれは始まりなりて。帽子のお次は道化師衣装に小道具たたた。それにそれそれまだまだ山済みなりぞやー」

「そうか」

別に意味のある質問ではなく気になったただけだが、リゴレーヌなりに色々考えてるらしい。

最初に会った頃は滅茶苦茶でその日の暮らしすらといった風だったのに、今や先を見据えるまで余裕ができた。

あの時に手を差し伸べていなければ、いつまでもあの即席の舞台で芸をし続け飢えてとなっていただろう。

もしかしたら今はもうかも知れないと考えると偶には良い事をしてみるもんだと自分への慰めになる。

だが同時に無邪気に俺を慕う顔を見る度に後悔と懺悔の気も出てくる。

当然、それは孤児院へ預けている娘のベリテットの事だ。

もし自分を差し置いて知らない娘を引き取っていると知つたらな  
んと思うだろうか。

成り行きとはいえない訳できないだろう。

……俺のようなやつを親だと認めず見切りを付けてくれていれば  
嬉しいが。

「御師様またまた暗い顔。笑顔に変えましましょう？ 風船爆弾カラ  
フルぼんばー！」

先を歩いていたリゴレーヌが振り返り、ダガーを仕舞うと手から  
様々な色をした泡を空に向かって飛ばした。

「お前が気にする事じゃないさ。俺の問題だ」

「ですか？ ですが言いましょお伝えしましょう。大丈夫！」

「大丈夫、ねえ……」

何が分かると言いたいが、こいつに怒った所で意味はない。

いいや、無駄な所で勘のいいリゴレーヌだ。孤児院に行ったときに  
俺が間違えて発したベリテットの名前を覚えていて何か余計な事を  
したのかも知れない。

宮廷道化師のような仕事まがいもできるとは前にも考えたが、流石  
にありえないと思うが。

「どうです綺麗なカラフルばば。気は晴れまして？ しててまれば

はぎ」

「……ひとつ聞きたいが」

「なんででしょう？」

「ベリテットとは、会ったのか？」

「んむう？ その名は記憶にござらなくてござりまするが。以前にも口にしており何かか誰か？」

「いや、聞いてみただけだ」

ニコルとは違い、リゴレーヌは聞けばはぐらかしたりせずしつかり答えてくれるから不快感はない。

あいつはな、ニコルはな、絶対に重要な何かを隠してる。

「リゴレーヌはニコルと仲が良いが、何か俺に隠してることは無いかな？」

「隠し事とは。んむーむ、色々話はしせりとなれど、何ぞと問われれ分からじなりぞや」

質問がなければ答えられないか。

そうこう話している間にも町へ到着し、まずはとりあえずギルドへ。

そろそろリゴレーヌにも依頼の受け方とかも教えるべきだろうか。一応冒険者で弟子な訳だし。

というか今の所は俺の弟子だが、その内にひとり立ちするのか？

元はと言えば魔王が復活したから人間側の戦力増強の為だし、引き抜きとかもあるのだろうか。

あんまりそこら辺の話はしてなかったし後でギルマスに聞いておこう。

「で、だ。お待ちかねの今回の金だ」

万が一計算間違いで足りなかつたら可哀そうなので、気持ち多めに渡しておく。今回くらいは良いだろう。

流星に枚数が枚数なので投げて遊んだりせず、自分用の袋に銭を詰め込んで満足げに領いた。

「早速買いに行くのか？」

「善は急げのせんげせん！」



まだ売ってるのか？

そう思いつつ先を歩くリゴレーヌの背中を追っていくと、辿り着いたのは以前に帽子を見かけた露店ではなく雑貨屋だった。

こんなところに売っているのかと疑問に思っていたら、リゴレーヌを見た店主がにこやかに挨拶をかました。

いつの間にか知り合ってたのか。

「今日はお師匠さんと一緒かい。あー、前に欲しがってた布地だったな」

「はいですそうです小遣い貯まりの欲する材料！」

店主とは話を通していたらしい。すぐに用意がされていく。

「リゴレーヌって裁縫できたのか」

「できますですよよ必要あらればやってのけます。昔に習って役に立つ！」

意外だとは思ったが、そういえば小劇場だのも手作りしてたな。

まさかと思うがこれ道化師の衣装も手作りする気だろうか。

器用だな。

「やりますですよ？ 手作り作り。デザイン色々自由にちよきちよきちよつきん！ 御師様もお洋服欲す？」

「いやいい。いらない」

「まままましばらく先にはなりそうなりそう。素材もそんなに安くはない」

そりやそうだろうな。

店主の持つてきた布地を張り付くようにして厳選し、原色を数枚選択した。

そこそこの大きさなのでそれなりに値段は張るが、元々多めに見積もってたように余裕らしい。

余ったお金で針と糸を買い、それでも余ったらしい金で一見すると使いどころのなさそうなアクセサリにもならない小物も購入していく。

残した金を次の予算にするという考えはないのか。

「んふふふふふ、むふふ、ふー！」

「足りたか？」

「最高ですよ！ 作りますです完成できます！ ですよようさいですますつくり！」

大興奮だな。

「また来てくれよーお嬢ちゃん」

「またのち来ますよお次は衣装！ 覚悟し沢山ご用意布地！」

「待ってるぜ」

さっそく家に戻るようだ。

気持ちは分かる。俺も子供の頃に始めて剣を握った時、早く使って見たいと無邪気に思ったものだ。

休みを続けるのはあまりよくないが、帽子の完成まではすぐ終わるような簡単な依頼にしておくか。

帽子、大完成！　大歓声！

「ちくちくほーし……ちくちくほーし……」

いつも騒がしい道化師様が珍しく比較的大人しい。

素材を引つ提げて家へ帰り、それからずっと夜通し裁縫をしていたのだから流石に疲れて当然か。

見るからにしよぼくれた目と明らかに落ちたペースで作業を続けている。

「しかしお前も人間らしい所があったな。疲れたならちゃんと休め」

「いえいえいえいえ、翌日あるいはすぐにも完成できるとご期待あらればお声に答えてなりによの道化道……」

「誰に期待されたんだ？　ちゃんと寝ろ」

「……道化の帽子は……誇りの冠……」

限界だったのかそのまま寝てしまった。

針を針山に刺して事故を防いでる辺りはちゃっかりしてる。

「……みゆい……」

三角の尖りが二つ伸びた、パツと見ても道化師のものと分かるそれは手作りではなかなか出来が良い。

外観は出来上がっている。後は装飾だけか。というか刺繍をしてたのか。

器用というか、どこで習ってきたんだか。

「習った、か」

椅子で寝かせるのも悪いので抱えてリゴレーヌの部屋に連れて行く。

久しぶりに訪れたこいつの部屋の中には廃材としか思えない物が多く転がり、子供のおもちや箱の中にあるような気分になった。

いつの間にこんな持ち込んだんだといたい。足の踏み場がないぞ。

ベッドに転がして後にする。

リゴレーヌの出自はあまりはつきりしない。

人形劇の内容は確かにあいつ自身の体験談であるだろう。だが、この国でどの立場でといった事ははつきり口にはしていない。

花言葉を知っていたり裁縫を習っていたり、それと料理のひとつをできるのは少なくともそれなりな家に生まれたのだろう。

それなのに父の嫉妬ひとつで追われて今だ。

「父親ってのはロクな事しねえ」

リゴレーヌが作りかけていた帽子の刺繍は、今俺達のいるアガ国の紋章らしい。

町中で見かけない事もないがわざわざ採用しているのは出身の關係か？ 一応同国の出身ではあるのか。

「だからどうしたって感じたが」

家を捨てざるを得ない状況になり、一座に拾われ、色々あつて冒険者になり現在に至る。それだけだ。

恐らくだが昔の名前そのままって事は無いだろう。

もし仮に使用者的な奴に突っ込まれても、自信をもって「こいつはリゴレーヌ」とでも言つてやるか。

「おはようございましての御師様おはよう。こんにちは？」

「起きたか」

「ご迷惑、おかけしましてごめんなさい。次々お仕事貯まりの平気？」

「……休みにする予定だったからいい」

「それならば！」

本当は休む予定ではなかったが、こんな状態で戦わせられん。

「遅刻にありまし現在お昼。まだまだ間に合う明日の公演！」

再び裁縫が開始された。

久しぶりに本を読んでいたし、静かにしてくれるのならいい。

「んふふふふふ、つくつくほーしのちくちくほーし。夏の終わりに針一本、紡いで重ねて色重ね、出来上がりましては国家の紋章アガの国！ ですよですよの愛国心！」

訂正。静かではなかった。

そんなに国に忠誠があるのか？

「裏切り父上以前は優しくいつもも国の為。つくつくほーし尽く尽く奉仕<sup>ほうし</sup>」

「やっぱりあの人形劇、あれはお前だったんだな」

「あぁー！ しまった！ 御師様今のはお聞きにならず、むむむ聞いてしまえば戻すしか！」

時戻しはやめろオ！

「ご冗談。流石の道化も大規模やるには時間がなくて。む？ 大規模時間を戻す為には大規模準備が必要で？ けどけど戻られるばやプラマイゼロゼロ時間はマイナス」

やめろと言っている。

「やりません。御師様やるなど申すはやりません。やりません？ やりませぬ」

「時間関連だけはマジで頼むぞ……」

「ぬせままやりやりませぬのやままー」

それは了承したのか？ 本当に大丈夫なんだろうな？

俺が気が付いてないだけで既に戻ってるってことは無いよな？

……いや、そんなにできてたらそもそも一座を復活させてるか。そうだよな。

「できました！ お次はしやしやしやら裝飾じやらじやらじやんー！」

刺繍が終わったらしい。

今度は一緒に買っていったよくわからない小物を取り付けていく。

この辺は派手さを求めるリゴレー又らしい。細々として集中力のある刺繍よりも生き生きとあーでもないこーでもないと付けていつている。

しかしあれだな。この調子で衣装も作ったらどうなってしまうんだらう。

衣装にもこの調子で小物を付けていくんだらうし。

「んぺー。やっぱりぱりぱりやめときましよう？ 重しは動作の障害になりまし疎外とします。がちやがちやらじやら目立ちはせども映えはせぬ」

……やめておくのか。

できあがった帽子の二つ特徴的な山はそれぞれ真ん中から緑と紫の二色に分かれている。

「自慢げに被ると途中で折れ曲がり、結構なポリウムとなる。

確かに目立つと言えば目立つ。デカイ。

リゴレーヌの頭が倍になったような感じた。

「完成となれば自慢！ 自慢となればニコル！ そして猛獣ども！」

くるくる回るのはいいが、三角の先に付いたぼんぼんが遠心力で俺を殴ってるしもう少し離れて欲しい。

「御師様どうです道化の帽子！ 自信ですよ？ 凄いでしよう！」

「ああ、俺にも自慢はするのな。……上出来じゃないか？ 自分で作ったにしては」

「やった！」

回るのをやめたりリゴレーヌが玄関へ駆けていく。見せに行くらしい。

「いつてきますですよ、はっはー！」

「いつてら……ん？」

帽子の色が変わってる。さっきまで緑と紫だったのに今は青と赤になってる。

さっきの刺繍が代わりに見えなくなっているし、あれは魔法陣的な意味合いもあったのか？

……まあリゴレーヌだし目を離れた途端に色が変わる事もあるか。

感染。

風は吹いていないが袖幕から投げられた道化帽は風に巻かれたようにふらふらと飛び、舞台の真ん中まで移動した所で止まってくると回る。

ふと回転が止まり、急に逆回転を始めたかと思えば帽子の中からリゴレーヌが足を伸ばしてするりと出現して着地し、帽子の位置を大きさに直しながらぺこりと頭を下げた。

「皆様方々こんにちは？　こんにちは？　今更紹介いらぬと申したりとするお声あらりやそれでも幕開け同時に自己紹介、吾の名はその名はリゴレーヌ！　道化師リゴレーヌ！」

顔と両手を上げると同時に跳び、あちらこちらと宙返りを繰り返しながらどこからか取り出したナイフを投げながらひとつふたつと増やして回す。

「まずは基本のジャグリング！　どうですどうです並みではならぬぞ！」

宙返りをやめてさらにナイフを増やしていき、手だけでなく足も使いどンドン回す。

そのまま左の袖幕へ大股で歩いて姿が消えると同時にそのまま右から現れる。

ただの凄い技術と思わせておいてから、急に物理的な技術ではない物を出し驚かせるリゴレーヌの構成だ。

実際の所今の瞬間移動は受けが良く観客も思わず声が出たといった様子。

掴みに手ごたえを感じたりリゴレーヌはナイフだけを袖幕に放り投げ、先ほどと同じように逆から現れ飛んでくるナイフを使いより派手なジャグリングを開始した。

「ふ、ふふふ、お褒めにあられば拍手喝采調子を揃えて！」

最後に全てのナイフを高く放り投げ、一線に纏まって落ちてくるそれを全て帽子の中へ消し去り、「じゃーん」と小さく自身で効果音を加えて拍手を求める。

ぱち、ぱち、と小さな拍手が幾つかと猫の鳴き声が重なった。

「では、では、お次の——」

——最初にリゴレーヌと出会った路地裏、道化師様の手作りらしい質素な舞台。

そこで帽子を手に入れたリゴレーヌはその辺にいたであろう貧しい身なりの子供や大人を集めて小さなショーを始めていた。

俺に拾われた後も訪れて舞台をセットしていたらしく、質素な事に変わりはないが舞台らしくはある。

相変わらず技量の高い公演をしばらく続け、盛り上がった観客の拍手を全身に受けて好評のまま終えた。

投げた帽子の中に足から入り、手で帽子の三角の先を掴んで一緒に入っていき帽子ごと消える。

今まで視線から外れたりしたその瞬間に移動可能だったのが、帽子をバリエーションに入れたことでより自由度を増したらしい。

何もない空間でも身に着けている帽子があれば出現、撤退可能とは。

先ほど物理的な技術ではないとは言ったけど本人曰くこれでも技術。タネは一応ある。

あるらしいが、信じられん。

そのタネが超常的でないことを今は祈るしかない。そしてそれをニコルが習得することも。

「どうでした？ でした？ 本日公演大好評！」

「いいんじゃないか」

「ふ、ふふふふ！ ひょうこうだいたい公演本日でした！」

家に帰ると当たり前前のようにいたりリゴレーヌに適当に返事をして椅子へ座る。

今日は町の防衛や魔物分布状況が云々の会議だったから疲れた。

「リゴレーヌ」

「なんででしょう？」

「もう少ししたら鎮魂祭があつて町が賑わうから、そんな時はニコルと



遊びに行け」

「お祭り祭のお祭り祭!! 騒がしきや? 舞台なりぞや!?! ぞややや  
や!」

大喜びだが俺は喜べない。妻の命日でもあるし、俺の人生が狂った  
起点でもある。

娘と重なるニコルも、子供らしい天真爛漫さの象徴のようなりゴ  
レーヌも、祭の間だけでいいのであるべく会いたくはない。

被害妄想と言ったらなんだが、近くでニコニコされると気が気でな  
くなる。

「んむう。複雑事情の重なりたりぞや時その問題にもあらず、会い、  
会わずと気分乗らじは無理とさせぬ。引くもそれまた道化道」

「意味は分からんが、祭の間だけでいい。そつとしてくれ」

「分かり申したりたりたり! むふ、んふふふふ、祭、祭、祭ーっ!」  
本当に分かつてるのか?

先に祭の事を言うんじゃなかった。

言わなきや説明もできなかつたし仕方ないが、それにしても、あー、  
どうしろってんだ。

それなりにリゴレーヌと過ごしてきてある程度扱いには慣れたつ  
もりだったが、あくまでつもりなだけだった。

とうるか少なくとも道化師様に祭なんて伝えたら大興奮間違いな  
しな事くらい考えとくべきだ。

俺も焦ったか?

……たぶん、そうか。鎮魂祭が来てしまうと思い、無意識に焦って  
いたのか。

「逆皇帝? 正しい吊るし人! 御師様師様は慈悲心鳥じひしんちようにあらず育て  
の育て!」

どういう意味なのかは知らん。

「こんにちはー」

「あ、ニコル! ニコル! お祭り祭のりつまりままつまー!」

「祭り……? ああ、鎮魂祭」

食事を作りに来たニコルが早速リゴレーヌに絡まれていく。

何となくニコルも鎮魂祭に対しては良い顔をしているように見えない。

「リゴレーヌ、程ほどにしとけよ」

「んむ」

それは返事なのか。

この町の鎮魂祭は昔起きた大規模な魔物の侵攻、スタンピートにて出た死者達を弔うものだ。

ニコルも孤児であり、親がいないという事はそこで亡くなった可能性がある。

……当日はニコルにリゴレーヌの事を任せようと思ったが、そうか、それもあつた。

ことごとくだな俺も。少しは冷静になるべきだ。

「ボクの孤児院は毎年ちよつとした出し物をするんですよ。リゴレーヌさんも来ますか?」

「出し物とは? 出し物とは!?!」

「それはですね——」

——あれ、意外と平気なのか? 良い顔をしているように見えなかったのは気のせいだったのか?

訳分からん。

「できましたですよ? 夕食どどん!」

「完成しましたです、えーっと、ばーん?」

ん??

「どんどどしよくゆうですよですよ! 呆け顔? なぜ故に?」

「ボクが真似して喋ってるから? のは仕方なし? ……的な」

「待てニコル。お前までその喋り方をしたら收拾が付かない」

2人で料理をしていたらしいが、そのせいでリゴレーヌの意味不明

喋りが伝播してる。

むしろよく感染できたな。俺ですら理解不能な部分が多いのに。「リゴレーヌさんの技を盗むために、まず形から入ってみようと思いましてです。なかなか上手にはいかぬませんが」

「んふふふ、お仲間仲間、弟子仲間！ 弟子姉妹！」

「ただ難しいというか、予想外な事が多くて型がないというか」  
型にはまろうとしないのが型破り、型を知らないのが型無し。

リゴレーヌの場合は前者後者どちらともつけ難い。言うなれば型外しと言った所か？

知識は無駄にあるし型を知らない訳ではない筈。そしてそれを無意識に使わない。

「まいまいでし姉妹でで！」

「一番謎なのがこのラッシュというか、法則性はあるそうなんですけど」

「リズムに乗せてると語呂合わせなだけだろ」

リゴレーヌの喋りの基本はまずリズムに乗せられてるかどうかだ。

合う言葉が見つからなければ同じ音を繰り返して間を埋めて、特に喋る事がなければ単語の音をばらした物の順番を入れ替えて喋る。

「おもしろい」を「いしろもしろも」と言うように、何となく元の言葉が分かる程度に形を残して。

「……あの、マックスさん実は喋れるんじゃないですか？」

「まさか」

道化師言葉の遊びの言葉、まさかかさまさ喋れるわけなか……。

「御師様師様も道化の心分かって分かり！ わっかかわ！」

「嘘だろ……」

俺もいつの間にか感染していたのか……リゴレーヌの謎言語……。

## 道化の生き方

日が沈み、ほーほーとフクロウが鳴く夜遅くになってもリゴレーヌが俺より先に寝静まる事は少ない。

自分の部屋にはいるにはいるのだが、いつも何かをしている。時にはごそごそと、あるいはがちゃがちゃと。技の練習か何かだろう。

最近では本人が無機物にしか適応できていない瞬間移動を猫にもやらせようとしているらしい。

ただ、猫相手だと狙った所に出てくれなかったりで上手く行かずで苦戦しているらしい。

寝ている時に突然腹の上に着地された時は襲撃かと思つてびつくりしたぞ。ある意味襲撃だが。

あとは朝起きたら部屋中の至る所で猫が寝ていたり。

技の練習をするのは良いがせめて回収して欲しい。

……もふもふなので偶には良いが。

そんな寝るのが俺より後のリゴレーヌだが、朝は逆に俺より早い。

正直な話をするとう帽子を徹夜で作り力尽きた以外でこいつが寝ている場面を見たことがなかった。

いつもの現実離れた奇術や技量と合わせてそもそも純粋な人間である事すら疑いにかけていたもの、お陰でただ体力がすぐ回復するだけである事が確定して内心ほつとしている。

俺くらいの歳になるとな、一晚寝てもまだ疲れてる事があるんだよ。

というか戦闘技術を持っていかなかったにも関わらず初陣からランクB以上の攻撃力を見せていたので、同じ人間だとは思いたくなかった。

勉強をしているニコルですらリゴレーヌが純粋な人間だと判断した時には認めたくなかった。

何かどっかで凄い種族的なのが混じってれば、それなら凄いのは

仕方ないで済んだというのに。

「ふぬう？ 何かリゴレーヌめの顔に何かございまして何か？ 化粧が必要？ ならば道化のスイート絵をば！」

「違う違う。ちよつと考え事をしてただけだ」

「御師様思考にふけりのならば邪魔せず。ふふふふふふふふ」

帽子を外して手をつ突つ込むと、中から小皿とそれに乗った青い粉末を取り出した。

続いて今度は帽子の先から水を出して指で溶かし、鏡も見ずに頬に模様を描く。

さりげなく水を出したがそれは普通に魔法じゃなかろうか。

一応本人が言うにはそれでも魔法ではなく技術だが。

いい加減に魔法も使つてると認めて欲しいもんである。

唯一というか、身体能力だけは自分持ちだと認めてやるが。

左頬に青色でスパーードを描いたりリゴレーヌがドヤ顔で見せつけてきた。

「じゃじゃんじゃ、じゃー。んっんー。ですどうです？ 道化化粧！」

「器用だな」

「必要となれば練習技術。あるのみ！」

いつの間に化粧を練習したんだか。

「御師様もどうです？」

「何がだ」

「道化師模様！ うもよどどうけししし！」

「よせよせ」

俺の顔に描こうとするな。指をこつちへ向けるな。お前は指先から何か出そうで怖い。

「光線カニカニビームカニ。指先からは出さずには出ません。では？」

帽子！

両手で帽子の三角を掴みその先を暖炉横に向けると、二本の光の束が一直線に伸びて置いてあった薪を真つ二つにした。

……うん、何だそれ。

「吾の名はじゃじゅじよのリゴレーヌ！ 今は本業冒険者。故に、笑

顔の敵を蹴散らすなられば学ぶは道理。これは学んだ攻撃ビーム！  
カニカニ

カニって、蟹の事か？ 海の方で獲れる。

二つの帽子の先から二つの光線を出すのは確かに蟹の鋏に例えられるが。

「学んだって、蟹にか」

「いえいえお客さん。いつもお声掛けなりての感謝期待に伝えて練習ビーム！ カニカニ」

「カニは分かったから。うん。まあ、実戦で使えるならいいや」

「ねこビームはまだ使えず。残念」

「そっちも気になるが」

蟹で交差する二つの光線なら猫はどうするというのが。

まさかとは思うが、リゴレーヌが（勝手に）飼ってる猫から光線が出るのか。

決して柔らかくない薪を容易に切断できる威力の物を、あちこちから出現する猫が発射しまくる……。

「たぺたぺたーむ、たペーたむー！」

足元で寛いでいた猫が拾いあげられ、リゴレーヌの胸前で抱えられた。きよとんとしている猫と目が合う。

お前も道化師様の意味不明な行動に付き合わされる被害者か。

「暗闇光し猫の目ぴかり、その理由は輝板タペタム！ ペたぺたむー！」  
夜行性の動物の目が暗闇で光るのは知っているが、その事か？

良かった、縦横無尽に駆け巡りながら謎光線で辺り一帯を焼き尽くす猫は存在しなかった。

ちよつとくらい見てみたい気もするがと口にしたら、リゴレーヌがにへらと笑いながら首を傾げる。

藪蛇だったかも知れない。

こいつならやりかねん。

「見てみたいと申したりぞや？」

「いやいい」

「良きか！」

「違う、そうじゃない」

「恐るる覗き見て驚きなりぞや未知は恐怖！」

なんでこういう時だけ話通じないの？ いつも通じてないけど。

いらぬから。猫光線はいらぬから。帽子の謎光線だけで充分だから。

「御師様お望みなられば最優先にて身に着けご覧に入れると申します」

「猫光線はいらぬ」

「はい！ たぺー」

抱き寄せて猫に頬ずりしたが、猫の方はとても嫌そうにしている。虚空を見て脱出の機会を伺っている。

「奇跡は感動頭に残し、生涯忘るる事なき永遠輝くものとなり。故に手を抜く事はせぬ」

「……まあ、お前が舞台で客を全力で喜ばせようとしてるのは確かだ」

「おお！ 御師様には分かり申すか！」

金の為や自分の為ではなく、それらも確かにどこかで存在はしているのだろうが最優先での目標は客を感動させられるか否か。

直接言えば調子に乗るからあまり言わないが、リゴレーヌの技量は飛びぬけて高く、投資してもつといい舞台を用意してやればあつという間に元を取れるだろう。それどころかその二つとない奇術は瞬間に更なる客を呼んで王都へ行ける。

こいつがそうもせずいつまでも裏路地に手作りの舞台を設け、そしてロクにひねりも投げられない固定客の貧民や猫をいつまでも相手にしているのはもつと感動させたいという意思からだろう。

新規の客はおいおいとしてまずは自身のファンを大事にする。それが儲けに繋がらなくても。

「永遠、奇跡、輝くもの！ それは何？ 永遠は記録記憶の目に見えぬもの！」

ただ思うのは、どうしてこいつはそこまでして徹底的な道化馬鹿になれるんだ？

人形劇では最も信頼していたであろう父親に騙されたと話してい

た。

それがそこから実は……と続くのであればいいが、どうもそうなるとも思えない。

人間不信に陥っても良いだろうに、なのに人を喜ばせる、人の為になれる。その原動力というか、それは何なのか。

「んむ？ お忘れ忘れ？ 道化師は人を喜ばせる。笑顔にさせる。とは？ 永遠、奇跡、輝くもの！」

「だから、そう思うに至るきっかけをだな」

「なるほど！ となれば答えは車輪の下！ お城！」

「はあ？」

投げた帽子が天井にくつつき、三角が垂れ下がり並び立つ逆さの尖塔のようになる。

「逆さ城は見たことない？ 空に浮かぶ城は？ リゴレーヌも見たことがない！」

「……で」

「空にぶかぶか幻想お城は輝かしき架空のもの。でもでも誰もがお城に憧れる、美しきものは見たいと申す」

天井から落ちた帽子がすぽっとリゴレーヌの頭に収まった。

「幻想お城は蜃気楼、近づけば消える幻。そして解明されし現実なるもの。夢も理想も近づけば現実が待ち構えるなり。けどけど浮かんだ逆さのお城は見たこと変わりなく！」

両手を広げると、リゴレーヌは椅子ごと浮かび上がって天井に座った。なんだそれ。

真面目に話すのであればもう少し落ち着け。

「近づき醜い現実見せることなく、いつまでも記憶に輝く理想の幻想！ そういふものにわたしはなりたい」

「そうか」

天井から落ちた道化師は頭から床に向かったが、テーブルに隠れて消えた。

かと思えば、俺の後ろから足音がして椅子を持ちながら現れる。

「道化師は皆の為！ 皆の為は自身の為！ 故に、何か心配事？ は



無き！」

言い回しは分かりにくいが、ようやくリゴレーヌの心情を聞いた。出会った最初の頃は俺も投げ出そうかと思っただ位には常識もなく狂った様子だったものの、だいぶ成長したものだ。

成長というよりかまともになってきたというか、舞台と日常の区別がつくようになってきたというか。

リゴレーヌ空間。

「うわあああああああ！」

リゴレーヌを連れて行くほどでもないちよつとした買い出しを済ませて家へ戻ると、玄関が勢いよく開きいつものように来ていたニコルが矢のように飛び出した。

なぜか涙目で、男児らしからぬ情けない顔をしながら俺が視界に入るとと真つ先にそのまま抱き付いてくる。

「ま、ま、マツク、さ、あああああ！」

「なんだなんだどうした。ゴキブリでも出たか？ それともネズミか？」

「ちが、違うんです、父さん！」

「誰が父だ」

しかし何があった？

強盗かなんかだとしてもニコルならもう少し冷静に立ち回れるだろうし、リゴレーヌなら人質に取られても得意の脱出奇術で何とかするだろうし。

「う、宇宙が……」

は？

「ああ、ああ、この世界とは、宇宙としか……神秘？ 空は、どこに……」

「一回落ち着け。何があった。何をされた」

「食べられたんです！」

「……食われたにしては元気そうだな」

「本当なんですよ！ 食べられて、乱雑な空間が、宇宙を見て、扉があちこちに、文字の隙間に吸い込まれて！」

「わかったわかった。怖かったな」

「本当なんですよう！」

もう少し男児冒険者たるものしっかりしろ。

「ボクは女ですよ父さん！」

だから誰がお前の父だ。娘のベリテットに似てる気はするが。

混乱というか錯乱というか、ニコルはもう使い物にならないし俺が直接見てくるしかない。

意味の分からない言動を見るに強力な幻術か何か、精神をどうにかする感じの魔法を食らったんだろう。

となるとリゴレーヌの安否も怪しい。今まで戦闘で被弾した事もないし大丈夫だろうとは思えるが、そういつた見てから避けられる攻撃と個人へ直接くる精神干渉は慣れていないと抵抗も難しい。

万が一あの道化師様が操られて敵に回ったりしたら俺も勝てるかは怪しいぞ。

攻撃は全て回避、視界から外れば死角から現れる神出鬼没さ。主な攻撃手段が剣とナイフしかない俺とは相性が悪い。

「ニコルはここにいろ。俺が行く」

「ま、待って……」

剣を抜こうとしたら止められた。

ええい、我が家に入り込んだ賊を討つというのに邪魔をするな。

「宇宙へは、リゴレーヌさんが案内して、文字も、別で……」

はい？

「……お前がそうだったのは、あいつが原因か？」

別に賊に押し入れられたとかじゃなくて、リゴレーヌ自身が原因？

何をしたんだあいつは。

「奇術を見せて貰おうとして、瞬間移動を、そしたら食べられて……」

なるほど？ あのだ化馬鹿がいつも使ったり猫にも試したりし

ている瞬間移動を試してみたぞ。

それがどうして食べられるだの宇宙だのに繋がるのかは分からないが、リゴレーヌ空間に飲み込まれて発狂したのは確かだ。

普段冷静なニコルが俺を父を間違えるだの自分が女だと言い始めるだのを言う辺り余程な事らしい。

腰に抱き着いて離れないニコルを引き摺りながら玄関を潜り、リビングへ向かうと不思議な顔をしているリゴレーヌが猫と戯れていた。

それを見てニコルが小さい悲鳴を上げたが、道化師様は気にしていない様子だ。

「ほむふふ、御師様元へと無事到着は奇術の成功なりて！ 筋良しに胸張り道化のリゴレーヌ！ ……にして、なぜ恐るるニコル？」

「確かにマックスさんの所へは行けましたけど、何なんですかあの空間！ 一瞬で移動するとかじゃないんですか!？」

「ふむう？ 寄り道しせぬば直接距離にて空中ブランコ！」

俺の所へ向かおうとしてか。

しかし精神攻撃でもないのにそこまで発狂する空間は気になるな。どうやってその空間を生み出したりだのしたのは分からないが。

もしかして異空間って奴か？ 国宝級のアーティファクトが作り出せる、こことは違う空間世界を作ってっという。

それが奇術のタネだとしたら道化師の実力云々じゃなくなってくるぞ。

「いつもリゴレーヌが経由してるんだし危ない事も怖がる事もないだろう？」

「だったらマックスさんもやって見てくださいよ！ あの場所は、本当に、うわあああああ！」

どうどう落ち着け。

そこまで言うならやってみようじゃないか。

「リゴレーヌ。試してくれ」

「御師様も奇術の神髄を体験したいと申す？ タネは明かせずも経験

可能！ さてさてどうしてどうしよう？」

立ち上がったリゴレーヌがふらふらと踊りのような動きをしながら自分のダガーでジャグリングを始めた。

やってくれるらしいが、なぜダガーを出した？

ニコルは巻き込まれるのが怖いのか遠くへ行ってしまう。

「んん、テステス、イーハトーヴエ、イーハトーヴエ」

呪文か？

身構えていると頭に被っていた帽子を投げた。

「始まりまするは道化の奇術、舞踏の始まり？ しかしとて！ そこは異の場所夏の空！」

俺の視線が帽子を追いかけ向いた瞬間、嫌な予感がして思わず下を

見た。

そこには、赤黒いまるで闇そのもののような渦がある。

「これが、宇宙だとで——」

成す術もなく、一瞬の浮遊感の後に飲み込まれて、そして俺はニコルの言葉の通り、この空間に食われた。

Insane Incident,  
Impress "IDOLA"!

「ふ、ふふふ、奇術は感動心に残し、吾<sup>あ</sup>らはその体験を共有すならむ」

壊れた建物、火のついた矢、背景には襲い掛かる恐ろしい形相の間。

あるいは、のびのびと過<sup>こ</sup>す猫が映り、次には蹂躪される村が映る。空間を漂う俺の周囲を様々な景色が巡り、それはこの世の物ではない、もしかしたら別の世界、異世界と呼ばれる場所の出来事なのか？

ふと視線を別に向ければ、赤黒い背景に浮かぶ扉の中では全く見た事のない様式の四角い建物が建ち並ぶ夜の街が見え、その遠景にある海上では白いドラゴンのような魔物と空を飛ぶ幾つかの人影が魔法のような光を撃ち合い戦っていた。

その隣にある別の扉の向こうはまた別で、石とも鉄とも取れない、密度の高い建築物の建ち並ぶ広場の真ん中で黒く胴体の丸いゴーレムが鋭角な腕を振るってその建築物を壊している。

「広き世界を覗き見、望み、一身芸<sup>うづつ</sup>を覚えるるから故、夢か現か幻か。現世を忘れ感動のみ覚えなりぞや」

台本であらうりゴレーヌの言葉が耳に届くが、内容を気にしている場合ではない。

この異界を見せられている中、深層心理すらも具現化するのではないかと恐怖に怯えている俺がいる。

正しく夢なのか現なのか。

宇宙、と言われても納得がいく。

ニコルの表現した事は正しい。

この空間から見える別世界は、別の宇宙での出来事だろう。

そしてそれは平行する物であり、俺達が一秒を過ぎす内に向こうでも時間は過ぎていく。

「おお、御師様よ！ どこへ空へと落ちられたまふぞや！」

そういえば、これって瞬間移動だったか？

宇宙は空にある。

どこかへ移動する為の魔法……いや、奇術？ 目的地がないな。

「奇術の神髄始めはこんなもの！ 仕方なしに同行しよう！」

もはや道化師の言葉も意味が分からない。それは何を指している

？ 何の事だ？

無数に並びかけている文字の繋がりが新たな世界を紡ごうとしている。あれはどこで、何が起ころうとしているのだろうか。

微かに重なったものが風景と人を作り、過多の情報が頭に入って響き、そして抜け、

「御師様（ちんぷん）いますよ？ よすま（いざ）に！」

リゴレーヌ？

どこからか現れたリゴレーヌに手を引かれて、たゆたっていた俺がどこかへ導かれる。

「一度近場に出ましようか？ 少し刺激が強すぎた！」

「……………」

「ここは、どこだ。」

「どこかの屋敷のようだが。」

「御師様すまなく奇術は失敗。脱出成功？ 説明足りぬ。始めに行き先をと言ふのを忘れた」

「さつきまで家にいたと思っただが、何が起きた？」

「確かりゴレーヌの瞬間移動を体験しようとして、何かに飲み込まれて……。」

「……駄目だ、思い出せない。」

「ニコルの怯えた顔はよく覚えてるんだが、俺の場合は記憶の混乱か？」

「出現ポイント考えておらぬならば漂うのみにて迷うたりは禁物として、ここどこぞ？」

「ここがどこって、俺が聞きたいんだが。」

「そこのニワトリよ、ここがどこか知らぬぞや？」

「鶏に聞いたところでわからんだろう。」

「ふむふむ。迷い人の案内とな。御師様よ、こちらに案内たられ申す」  
「鶏に聞くなよ……」

「確かにその鶏はリゴレーヌを導くようにどこかへ歩いているが、それは良いのか？」

「ここがどこの屋敷か知らんが俺達が怪しいことに変わりはないぞ。」

リゴレッツタ&リゴレーヌ。

「案内は鳥のニワトリとりとり、なしてどこまでてくてく散歩！」

「一応人んちだぞここ……」

現在地、どこかの屋敷内部。

リゴレーヌによって飛ばされてきた訳だが、そんなことを知らない人に説明したところで意味不明な供述をする不審者に他ならない。

俺やニコルなら「いつもの瞬間移動ねはいはい」で済む話だが、普通ありえないからな。

短距離であれば魔法の実験とかで多少ゴリ押しで納得させられそうだが射程距離無限だぞ。というかここどこなんだ。

つか、バレル前に瞬間移動で帰るんじや駄目なのか？

「御師様師様に奇術は早いと思われれまわれ。ここへ来るのも一苦労。それにそれに！」

そうか。

……うん、思い返してみればそもそもここへ来た理由もなんか事故的な感じだった気がする。

「この者の名はリゴレーヌと似通い通い、なればなられば話も通ず！」

「名前？」

「わいははわわい！　なんてことこさネーミングは？　主人のその名はアイーダ姉ねえ！　会える！」

何言ってるんだこいつ。なぜに突然アイーダが出てくるし。

「ふっふふー。この者ニワトリもななんとアイーダ姉ねえに命救われ拾われて、今はこうして従じる者よ！」

まるで鶏と会話しているみたいなもの言いをする。

機嫌が良いのか歌いながらリゴレーヌは鶏を追いかけ、辿り着いたのはよく手入れのされた庭だった。

「う、ううう……。アイーダ姉ねえどこにおられる！　リゴレーヌはこちらぞこちら、りんごんづーん！」

「おい、待てっ」

「アイーダ姉ねえーっ！」



我慢しきれなくなったりリゴレーヌが走り出した！

「——うわー！」

角を曲がって姿が途切れた瞬間、歓喜とも悲鳴とも取れない声が響く。

初手でロクに話も聞かず斬りかかってきたアイーダの事だ。まさかと思うが、リゴレーヌの回避が間に合わない程の斬撃で出迎えたか？

多少焦りながらも迎え撃てるようにしつつ追いかけると、そこには……。

「……何やってるんだお前……」

「わはははは！ ははは！ アイーダ姉ねえだ！ はははは！ わふー！」

見覚えのあるメイド服に投げ飛ばされたのか地面を転がるリゴレーヌの姿が。

しっかりと押さえつけられているものの道化師様は今まで見たこと無い程の笑顔を見せている。

「全く。聞き覚えのある物音がしたのでまさかと思いましたが、こうもすぐ見つかってしまうとは」

「久しぶりだなアイーダ」

「貴方は……確か、マックスでしたか？ 本当にこの子を拾ってくださいましたのですね」

「色々あってな。まあ、恥ずかしながら見ての通り全然行動を制御できてないが」

「そうでしょうね。この子は猫のようですから」

「アイーダねえーっ！」

視線から外れた瞬間にいつの間にか消えていたリゴレーヌが近くの窓から飛び出し、飛び掛かり、アイーダに抱き着く。

俺の目の前で二つの影がもみくちゃになり地面へ転がった。

そういえば盲目の身だった。リゴレーヌのようなあっちこっちへ瞬時に音もなく移動されるのは反応しきれないらしい。

慣れているのかアイーダは表情を崩さず、確かめるように手を伸ば

してリゴレーヌの顔や頭を撫でていく。それが本当に実在している本人である事を確かめるように。

リゴレーヌはそんな撫でる手つきを甘んじて受け入れ、先ほど例えられた猫であれば喉を鳴らしてるかのようにされるがままになっている。

「相変わらず賑やかですね。道化師としての腕は上がりましたか？」

「様々奇術の大打進！ けれども今は道化で冒険者！」

「はて？」

説明が必要か。

ふたりを起こして庭に置いてあるテーブルへ移り、アイーダへ簡単に経緯を説明する。

俺がりゴレーヌを路地裏で拾った事、弟子とする事で引き取り家に置いた事、そして今日ここへたどり着いた事。

その間にも少しでも触れ合っていたいのか、当事者のリゴレーヌはあまり自分から話をする訳でなくアイーダの手を握ってニコニコしていた。

「——なるほど、事情は分かりました。貴方を最初に斬り伏せる事にならずに済んで良かった」

確かにそうだ。自分で言うのもなんだがあの時防ぎきれて良かった。

たぶん俺が死んだとなればニコルが何とか口を利かせて悪いようにはしないだろうが、確実に悲しませるで済まない事になっていただろうから。

「ふむわあ！ まさかアイーダ姉ねえのお悔やみ申しをお見舞い申す！」

「ええ。勘違いとはいえ大変な無礼を働きました」

「人の身避けるは至難の神速、御師様ゆえゆえ防げたものを！ けれどもけれど、その縁ゆかりの故に故！」

「痛いですよ」

ほかほかと道化帽子の先にあるボンボンを振り回してじゃれつく。アイーダも痛いというが微笑み混じりの冗談だ。

「……リゴレーヌ」

「なんでしょ御師様おしさま師様。この仲割つての入りは許せぬ？」

「アイーダと再会できたのは嬉しいか？」

「当然なり！」

そう言つて自身の帽子をアイーダに被せ、代わりに地面から先ほどの鶏を拾い上げると頭に乗せる。

意味は分からないが、鶏ももう少し抵抗したらどうだ。

「他意なく純粹に恨みもなく。リゴレーヌは昔からそうでしたね」

「ふむむん。吾の名はリゴレーヌ！今は冒険者となりても道化心忘るる事なきは昔変わらず。昔？いえ近代！」

「アイーダに聞きたいんだが、こいつの喋りは昔からこうなのか？」

聞くと顎に手を当てふむと首をひねる。

「アイーダ姉ねえお悩み悩み？見よこのニワトリわとり！翼広げてブレーメン！」

「出会った頃から博学広才で複雑な言い回しを好んでおりましたが、ここまで落ち着きない幼げではありませんでした」

今日は再会できた為にテンションが上がってるが、それを差し引いてもか。

サーカスの一座壊滅の事件を機に多少おかしくなってしまったのは確からしい。

良かった。最初からこんな調子じゃなくて。

まともな時期が合ったとすれば、時間と共に落ち着き戻ってきてくれるはずだ。

「——おや、アイーダ。お、客さんかい？」

その時、少し詰まったように話す男の声が届いた。

振り向くとそこには整った服を着た裕福な人物……この屋敷の主だ。というか以前に依頼を受けて顔を会わせたことがある。

「はい。そちらの男性は冒険者ランクAのマックス、隣はその弟子のリゴレーヌです」

「お久しぶりです。挨拶もなく急な訪問で申し訳ない」

「お、覚えていてくれたかい？ああ、いや、ゆつくりしていつてくれ。」

……そ、それにしても、リゴレーヌか……」  
何か気になることがあるらしい。

視線を向けるとリゴレーヌは立ち上がり頭が地面に着きそうなほど深々とお辞儀をする。

「あの、アイーダ。以前に言っていた——」

「——はい。私の妹分であつた道化師です」

「そ、その、そうじゃなくて。リゴ——」

「何か？」

「なんでもないです……」

ただ言葉を被せ気味に発しただけなのに、男はたじろぐ。

たじろいだ挙句、ゆっくりしていつてくれと一言残してどこかへ行つてしまった。

「何を言いかけたんだ？」

「さあ。何でしょう？」

相変わらず表情を一切崩さないアイーダからは何も読み取れない。だがここに一人、無表情とは縁遠い道化師様がいて、そしてとぼけるメイド服とは真反対に声を上げた。

「もしやここにおられるニワトリ？ その名をリゴレッタ！」

「あつ」

珍しくアイーダの表情が動いて眉が上がり、神速の斬撃を放った腕と同じとは思えない程の無駄が多いどたばたとしたアクションで急いで鶏を取り上げた。

そして手探りでついていた首輪を見つけ、そこについていたプレートを触り、睨みつけるようにニワトリから顔を逸らさない。瞳を覗かせず瞼だけを向けているというのに鶏は縮こまり動けなくなっている。

心なしか鶏の視線がアイーダの傍らに置いてある仕込み杖に向いているように思えるのは、あの恐ろしさを知っているからか。

分かるぞ。どこから飛んでくるのか分からない神速と言われるのも領ける居合の一撃、あれを敵に回したくない。俺も次はない。

にしても、リゴレッタか。

話の流れ的にあの鶏の名前だと思うが、もしかしてリゴレーヌの名前を元にして付けたのか？

「まさか吾の名と同じ由来を持ちし？ アイーダ姉ねえ名付けのセンスは変わらじ変わらさずかわ変わらさず！」

無邪気に笑顔を向けるリゴレーヌとはやはり対照に段々と表情が曇っていくようにも見える。

「……あれま？ ままれままれま？ もしや違いし名付け元？」

「意地悪しないでください。分かりました、白状します」

肩を落として降参した。

そうして語ってくれたのは、この鶏へリゴレッタという名前を与えたのみならずリゴレーヌと言う名前を与えたのもアイーダだという事だ。

リゴレーヌを拾った時に新たな人生の節目という事と、身を隠す意味もかねて与えたらしい。

その後事件の際に妹分であるリゴレーヌが亡くなったと思ひ込み、この屋敷で寂しさのあまり鶏を飼い由来を同じとする名前を付けたという。

それらを言いたくなかったのは、鶏を代わりにしていた事を打ち明けるのが恥ずかしかったらしい。人形に想い人の名を付けるようなものだろうか？

「せめてもう少し早く、生きていると知っていれば……」

「ふむむむむう？ 吾も家におりし猛獣にアイーダ姉ねえの名を付けておられるぞ？ なりて」

「猛獣？」

「勝手に飼ってる猫の事だ」

「はあ」

今更ながら猫の猛獣呼びはなんとかならないのか。いちいち説明しなきゃいけないのか。

「にしても、リゴレッタとリゴレーヌねえ」

「何か？」

いや文句じゃない。頼むからその杖に手を伸ばさないでくれ。

両方とも由来を同じにするというのは、その元はなんなんだ？  
聞けばリゴレーヌも知りたいのか、にへらと顔を向ける。

「……私が昔見たオペラの題名です。元は男性名であったのを直してリゴレーヌ、及びリゴレッタ」

「ほむおう！ それにて吾の名はじゃじゅじよのリゴレーヌ！ さしてこの名はリゴレッタ！ やー！」

頭に乗せた鶏の上から道化師の帽子を被り、テーブルの下から鶏を取り出す。

短距離の瞬間移動だ。鶏の方は……無事らしい。怯えた様子はない。良かった。

「さて、そろそろ帰るか」  
「むー！」

元々ここへ来たのは事故のような物だ。あまり長居するのも悪いし帰ろうと席を立つと、服の裾を座ったままのリゴレーヌが掴んだ。

「なんだ？」

「折角再会アイーダ姉ねえ、一晩一緒に語りて眠りて」

「……泊っていききたいって事か？」

聞けばぶんぶんと頭を縦に振った。

久しぶりなのだしもう少し一緒に居たいという気持ちは分かるが、俺も屋敷の主の知り合いとはいえ流石にそれは……。

「——お二人は、今どちらにお住まいですか？」

押し問答を続けているとアイーダが口を挟んだ。

何か考えがあるのだろうか？

「アガ国はササカミの町だが」

「ああ、やはりササカミ。近々鎮魂祭があるという」

何か考えがあるらしい。

「私達の一座が打ち倒されたのもその近く。故に慰霊もかねて行きたいと思っていたところですよ。どうでしょう？ そちらへお邪魔させて頂けませんか？」

そういう事か。何もこの屋敷に止まらなくても良いと。

だが俺の家に泊まるとなればどうしたものか。

リゴレーヌの事だから同じベッドで寝ると言うだろうが、あの混沌の産物のような足の踏み場もない汚部屋に泊まらせるのか。

盲目のアイーダにはその惨状が見えない。すぐに何かを踏み足を引っかけ転びと危険が多過ぎる。

「それが良し！ 良い！ りよう！ ならればなればすぐに帰還しせりましょう！」

「お待ちください。ここを離れるのですから少し話を通していきます」「はい！」

リゴレーヌの手元から鶏のリゴレッタを受け取ると肩に乗せ、屋敷へ入り姿が消えた。

ため息が漏れる。

今更だが、まさかアイーダと再会できるとは。

「御師様師様、 帰りも奇術の瞬間移動はよいよい平気？」

「ん？ あー。 目でも瞑ってるよ」

本能的に瞬間移動中は何にも見てはいけなさと感じる。

「さてさてさて、 帰って猛獣達にもアイーダ姉ねえ紹介せねば！」

「アイーダにアイーダを会わせるのか。 面白いな」

言うとは何かきよとんとした顔をされた。

そして少ししてぽんつと手を合わせて納得した表情になる。

「あれ嘘です」

「やらつと嘘ついてんじゃねえ！」

## 影絵

ずんたったー。ずんたったー。  
でんでれれれでんでん。

白いスクリーンに蠟燭の火であろう明かりが揺らめて映る。

影絵と呼ばれる舞台芝居の手法だが、まだ影はなくリゴレーヌの声だけが通る。

前回あらすじ覚えてあらむ。されど確認にんにんならば話そう  
あららじじ！

なんぞの話かてとて？ それはかの少女！

とある町のとある場所、石壁囲まれ少女は生まれ、なんとななんと  
類い稀なる才ありける。

飛んで火を吹け大喝采！ 誰もが認める圧倒的な、唇噛むほどその  
才能！

しかとてしかしか、それには嫉妬も付きまとい。

ひそひそ話は抑えも利かずて戸も立ちならん。

いつしか届いた少女の元へ、悪意の言葉はひそひそひそひそ。

幼き少女に悪意は分からぬ。けれども嫌われるは悲し事。泣く泣  
く父へと相談持ちかけ返った言葉は見返したもうぞや！ 彼の者も  
のかな！

スクリーンにはまだ何も映らない。

分からぬか？ 父の計略！

我が子の才に人気を奪われ嫉妬に狂った父による！ 娘を葬る？

いえそれ以上の先考え！

なんとばさ、ひそひそ話は父の回し手！

見返したりぞや森に行け。森を越えたその先なにかがある。疑問を  
持たぬが運の尽き。



3日4日の幾ばくほーほー。

派手な効果音と共に一瞬で現れた巨大な男の顔が引いてボヤけて行き、山の背景になった。

そんな事も知らない少女の影絵が、最初はスキップを踏んでいたものの段々と力が抜け、やがて倒れてしまう。

そして恐ろしい獣達の唸り声と共に明かりが消えて行き、無事かどうかも分からず文字通り闇の中へ。

ここまでは前回にも聞いた話だ。

なぜいきなり趣向を変えて影絵になっているのかは不明だが。ぱつと光が点り影絵の少女が立ち上がる。

「フィクションだったのか、騙された！」

力を振り絞って立ち、命からがら脱兎の如しとたつたかどつと！

ついに疑い持つて逃げ出して、痩せこけ泥んこ濡れてようやくたどり着いたのは石壁故郷。

あの父許さぬ味方を探そう。

されど、時遅し。

出迎えるそれは槍衾やりがすま、石矢雨！

森を抜けたその先には何があつたか？

それはなんと、喧嘩相手の敵国家！

父の計略その内容、少女を密偵スパイとチクリちく！ 売つたのだ

！

嫉妬に狂つた父それは、娘をスパイと売つたのだ！

自身の為に、策を見破り有能たる証拠のために！

「魔女め！」

少女は当然スパイにあらず。

しかし父の声は大きく嘘は誠に誠は嘘に。

ひとりの人間へ向ける量ではない騎馬兵と、石壁の上に等しく並んだ弓兵。

多少の誇張はあるだろうが、明らかに地方領主や貴族程度ではない。ひとりに対しての動員や密偵だからと告発してここまで動かせる立場。そして、その少女が道化師に拘る理由。

まさかと脳裏にひとつの予感が走る。

以前にリゴレーヌは自身の父が国のために尽くしていたと言っていた。

石壁とは城壁の事ではない。その内側、城の事ではないのか？

そして、告発程度で大事にできる父とは宮廷道化師ではないのか？

国お抱えの重鎮であるそれなら、血を引く少女が様々な奇術を覚えているのも、そして謎だった広い知識にも納得がいく。

影絵の少女が走る。

急いで動かすあまり、型紙が耐えきれずにあちこちが裂けてポロポロになっていく。

これも誇張であると信じたい。見ていられない。

最後に影絵の少女がたどり着いたのは、サーカスのテントだった。

——旅の一座はなんという？ 偶然そこに。

紙くずポロポロ少女は賑やかその場を見上げてははと、軽く笑って死を受けならむ。

道化師それは、誰のため？

答えは簡単笑顔のために。笑える嘘あらずんば道化にあらず。

最期に知れたらもう良かろうと、瞳を閉じてのおやすみすやすや。

落ち着いた声と共に明かりが消え、静寂が訪れる。

サーカスへたどり着いたその少女が死んでいない事は知っている。

なぜならそれを救ったであろうメイド服を来た盲目の者がいて、そしてそもそも今こうして舞台を開いているのだから。

じー、と小さな音と共にスクリーンが幕のように上がり、その向こうからリゴレーヌが姿を表す。

カーテンコールの挨拶だろうが、今はそれが影絵の少女の正体だと

言っているように思えた――

「御師様？ しさま？」

「……ん、リゴレーヌ？」

「ふむむむ。やはり御師様に脱出奇術は早いか。ならば難易度下げ  
ての」

「町についたのか」

「はいな！」

屋敷からここへ来るだけなのに、なぜかりゴレーヌの舞台を見た気がするんだが。

目を開けたらやばいのに目を閉じててもやばいのか。まじやばいな。

まじやばいって事はまじやばいぞ。

「ああ、闘争の香り。よくありませんね。こうも血が近いと」

馴れているのかなんなのか、アイーダは特にリアクションもなかった町の香りを嗅いでいた。

町中なら特に闘争の気配は無いと思うがやはり分かるものなのだろうか。

「やはり思い出してしまうか？ 逃げた日の事を」

「そうですね。……混戦の中で私は無力となりますので」

「弱点か」

「はい」

小さく呟く。

目に頼らず聴力と嗅覚に頼るアイーダにとって、雑多な環境は毒でしかないのだろう。

それだから例の件では迂闊に手も出せず、逃げ出すしかできなかった。

傍から見れば高い剣術を持っておきながら抵抗もせず、おめおめ自分だけ逃げ出した事に違いはない。

それによる恨み妬みを恐れていたと。

「姉ねえ生きて嬉しいうれし。れししうのしれ！ ツバキヒメ、ナブコド？ いずこ？」

「……申し訳ございません」

リゴレーヌはただ生存を喜んでいる。

だからこそ、無邪気に他メンバーも生きているのかも知れないと希望を出してしまう。

「その辺にしとけ」

「んむう？」

中途半端な勝手な希望が、絶大な絶望を生む事は当然だ。裏切られたと勝手に言って。

町中の路地、最初にリゴレーヌを拾った場所に出た俺達はとりあえず宿場を目指した。

「でもでもでもでもで、なぜゆえ向かうは裏路地宿場？ リゴレーヌの部屋はいずこ？」

「お前、自分の部屋がどうなってるのか分かってんのか」

「にゅみゅ意味？」

本気で分かってないのか。あのゴミ貯めみたいな部屋。

「なるほど。状況は分かりました」

ふむ、とアイーダが頷いてまわりついているリゴレーヌの頭を帽子越しに撫でる。

分かっている辺り前科持ちらしい。

「小道具の片付けが苦手なのはお変わりないのですね」

「道化に苦手もありなりなりぞて！ ててぞりなりなり！」

「私も手伝えれば良かったのですが、申し訳ございません」

「アイーダ姉ねえ見えなじ仕方あるまじ！」

にへらと笑いぐりぐりと頭をアイーダに押し付ける。

なんだか幼児退行も引き起こしているように見えるが大丈夫だろうか。

到着した宿は冒険者ランクA以上からの紹介でのみ利用できる隠れ家的な所だ。

低ランクの中には粗暴な者も多くおり、それらと棲み分けを行う為にこういうところもある。

当然の如く値段も相応になってしまいがそこは問題ない。元より贅沢はしない身だ。金に問題はない。

「金だ。落とすなよりゴレーヌ」

「に？ 御師様しさまは入らずなりぞ？」

俺がメイド服と変な帽子を被ったやつ引き連れて宿に入って見る。何て噂が立てられるか分かったもんじやない。

どういう訳か二人とも顔は良いし、リゴレーヌに至っては胸もでかい。

「その気配。貴方がリゴレーヌを拾った理由は……」

殺意。

見れば杖が光ってる。刃が覗いてる。

「違うぞ。成り行きだ」

「お悔やみ——」

「待て待て待て待て」

危ない。今度こそ死ぬ。

「ほら、下らん話しないで2人で行ってこい」

「はいな！」「では参りましょう」

宿へ消えた（主に片方が）騒がしい2人を見送り家に帰る。

打算的だが、祭の間はリゴレーヌの様子を見ていてくれるというのは助かるものだ。

……自分で散々裏のある人間が嫌いと言っておきながら、俺も人の事は言えないな。

道化なし、少し寂しか

祭りまであと数日。

久し振りにリゴレーヌのいない朝は静かだ。

ちよつと前までこれが日常で平穩だったというのに、なんだかこれはこれで寂しい。

……寂しい気がしているのは自分でも意外だ。

朝起きて一人で支度を整え、ギルドに顔を出して、依頼をこなして金を得る。

いつまでも続くと思っていたその変わらないだろう日常が変わったのは間違いなくリゴレーヌのせいだ。

以前であればこうも人と関わるなんてしなかったのに、今では誰かと話すことが普通になったのだから。

「全く……」

椅子を傾けて静寂を楽しむ。

妻を守りきれず、娘の視線に怯え、後ろ指に耐えきれなかった日が遠い。今ならパーティを組めるかとすら思える。

だがまあ、思うだけなら楽だ。

そうして調子に乗って実際に組んでも数日で解散だろう。

裏で人をどう思ってるのか分からない奴、媚びへつらつておこぼれを狙う奴、あるいは仲間と主張することで守って貰おうとする奴……はいないか。俺が守れないという事は町中に広まったのだし。

とにかく考え出したらキリのないそれら邪念悪意に思考を巡らせたところで、付き合いが億劫になって終わりだ。

「情けない奴だぜ、全く」

以前から俺が人の裏を気にしてるかといえはそうでもなく、きつかけはやはり妻を先立たせてからだ。

当時は俺と妻と、当時はまだ冒険者だったギルマスと鍛冶屋に戻ったクラリスの父で4人のパーティを組んでいた。

全てのきつかけであるスタンピートの後に町では当然ながらあちこちで人手不足が起き、以前からいずれはと目指していたギルマスは

空いたその席にそのまま座り、クラリスの父は装備を修理して回っていたらそのまま鍛冶屋になっていた。

そしてその中で俺はというと、剣ひとつで生きてきたらしく唯一冒険者を続けた。それしかなかったから。

事実上の解散の為に新しくパーティを組めば、陰口はすぐ耳に入っ

た。  
一挙一動揚げ足とられて騒ぎ立てられ、あることないこと噂話が聞こえる。

そうなれば、例えば表面は心配してくれるような珍しい気の真つ直ぐな奴がいたとしても突っぱねてしまおうだろうか？

「その点、リゴレーヌはな……」

あいつも人間であることに変わりはなく、色々考えてるし思考や言葉に裏は確かにある。しかしそれは悪い方へではない。

その場での嘘も言う事はあるが後でネタバラシをするし、人を陥れようとか騙してやろうとか諸々の邪悪を理由とした事は一切ない。

根っからの道化師としていかに人を楽しませたり、あるいは人間関係を舞台に置き換えた公演のスケジュールを滞らせたりしないよう円滑に進め場を取り持つ司会として動いている。

宮廷道化師のように仲介をしているとは思ったが、父のそれを見てそうするのだと学んでいたのなら納得だ。

その父に裏切られて所属する国から追われた過去があつて尚、拒絶された自分の才能を捨て憎む事なく人の為に使おうとは驚きを隠せないが。

もし放浪の末にサーカスを見つけ道化師の真理に到達しなかったら、あるいは今まで見せた奇術のその力を復讐の為に全力で使っていたらどうなっていたことやら。

あの話に演出以外の過度な誇張はなさそうだし、俺の臆病なんてちっぽけなものに思えてしまう。

自分の娘ほどの歳の奴に……歳は余計か。年齢が高けりや偉いつて訳でもない。実力が全て。未だに年齢は不明なままだけれど。

冒険者としての最低年齢の14から始めてもニコルとそう離れて

ないし、行ってギリギリ16くらいか？

ともかくとして人生を全て道化師に捧げているリゴレーヌは、それ故に悪意がないあいつは傍に置いて苦がない。

むしろいと静かで寂しがつてしまうほどに、いつの間にか俺の方からも依存してしまっていたらしい。

持ちつ持たれつという訳ではないが、拾って助けてやったつもりが助けられてるな。

「なあ、リゴレーヌ」

「ふむふむ。しかとて吾の道化振る舞い悪評取られず好評ばんざい！」

「ぶっ!?!」

げほっ！ げほっ！

急に出てくるんじゃねえ、おま、いつの間にそこに座ってた!?

「お呼びでない？ 呼ばれない？ そのはずなし！」

「いやいつの間に来たんだよ」

出現していたリゴレーヌは俺の反対側の席に座り首を傾げている。

ちゃんと答えてはくれないが、まあいつもの瞬間移動だろうな。どうせ視界を外した時にそこへ来たに違いない。

今日はアイーダと一緒にやなかったのか。

「んむう。道化師それは必要あらればシユビビンマン。呼ばれた故に？ そう！ 御師様優先それが弟子！」

両手を挙げて、身体ごとテーブルに投げ出して顔をこちらに向ける。

寂しがつて無意識に呼んでしまったなんて恥ずかしいのでぐいと顔を押しやってそっぽを向くと、ふひひと笑い声が出た。

当然リゴレーヌだが、やけに楽しげだ。

「なんだよ」

「にしし、だって御師様ほつと一息。戯れよしなに人寂し？ 道化の公演楽しみあらればリゴレーヌ！」

「ほつとけ。それよりアイーダはどうした。置いてきたのか？」

「いえいえいえいえ？ ニコルが剣技を教えて貰いと以前の練習場！」



「いつもいつでも合流可能！ 御師様も、アイーダ姉ねえ話して話す？」

「いやいい。あの剣はおつかないからな」

ほんの勘違いで斬られたらたまったんじゃない。

現場であつた時や昨日もそうだが、斬つて確かめるを地でいく奴だし。

……待て、これニコルまずいのでは？

「アイーダって、剣の達人だよな？」

「うむ！ 我ら一座にてその神速の剣に勝るものおらず、無から発するその落雷の如し一閃はしかし雷鳴なくただ通り抜ける光の如し！」  
「居合い斬りだよなそれ。ちゃんと止められるよな」

「しかと目に止めまばたき厳禁！ 並んでたくさん人工竹林？ タネはなし！ しかと見よ、目を離さず！」

「おい聞いているか？」

リゴレーヌは華々しい語りでアイーダの功績というか演目を挙げますが、そのどれもで敵に見立てた竹が斬り伏せられてる。

いくら音だけで相手の位置を判別できる剣の達人アイーダでも、ニコルと戦つたらついついっかりしてしまうんじゃないだろうか。

仮に模擬刀を使つてくれてたとしても、あの速度で叩かれたら細身のニコルなら真つ二つになりそうだ。

仕方ない。

「暇だし様子を見に行くか」

「はいな——！」

元氣良く玄関へ走っていく。

そうだな、瞬間移動する距離でもないよな。

## 番外編 黒猫義賊

ある日の道化師。

リゴレーヌが留守番をしていたとある日。

その日はマックスもニコルも用事が重なり朝から誰も家にはいなかった。

「どうー」

誰もいない家で何をするか？

それは当然、道化師としての練習だった。

普段は当たり前前のように奇術を披露し、小ネタを欠かさない天才的な道化師といえど実力に慢心をせず練習は欠かさないのだ。

庭に出した椅子の上に飛び乗って片足で立ち、どこから取り出した瓶でジャグリング。

しばらくして1つ増やして、またしばらくしてからもう1つ。

「ふむうー。これでは飽き飽きいつものひとつ覚え、何かばばんと新项目。がっかりさせまじお客さん！」

沢山になった瓶を空に投げ、椅子にどすんと尻餅をつくように勢いよく座り胡座をかく。

「むむむう。何か指示なきあらずやお題目。応えて見せよう魅せよう道化師魂！」

降ってきた瓶が土に刺さり、軽やかな音を奏でながら最初の一本を基礎に重なっていき細長い塔を作った。

バランス感覚や投擲精度でどうにもならない問題を越えてるが、満足行かないらしい。

帽子を瓶のてっぺんから被せ、さも当然のように地面まで到達し塔は回収された。どこへ消えたのかは分からない。

「お客さんを飽きさせる……道化にあるまじたらるたや！ るせさきあをんさ！」

くるくる回って、横に落ちた。

まるでリゴレーヌにかかる重力だけが横向きになったように。

「重力道化師これも驚き少なくなるなる。ここから繋げてリゴレーヌ

！」

本人はそうでもないと振る舞っているが、充分おかしい。

「いえいえいえいえ、道化に悲しい事嬉しい事関係なし、ジュシユレ・イーブウル・プーレツラ？」

意味不明な単語を呟きながらふわりと跳んで、空中でゆっくり回転しながら元の通常の地面へ戻り、そして伸びをひとつ。

土汚れも気にせず大の字に転がり、にゃーにゃーと駆け寄ってきた猫を持ち上げて微笑む。

昔とは違い、もう猫に笑わせられても褒美を与える行動はしなくなっていた。

意識の違いとしては仲間だから楽屋では一緒に笑いあう、と言った風らしい。

ちなみに勝手に飼っている。お陰でマックスの家周辺は猫だらけの名所と化した。

「ふ、ふふふ、ねうねう語らいてはもふの猛獣。吾の膝を、胸元を、腕を封じ……顔に乗ることなかれ……」

囲まれて楽しそうにしていたが、流石に顔に乗られては呼吸もままならないので首を振って降ろした。

「むっ。」

わいわいとしていたが、何かに気が付いて体を起こす。

視線の先には遠くに黒猫が一匹いた。

「そは輪に加わらず？ 意味は深げに首傾げ？」

黒猫はリゴレーヌを眺めたあと歩き去る。

……ように見せて振り返り、着いてこいと言わんばかりに細く鳴いた。

それを見て追いかけないはずもない。

リゴレーヌは猫に埋もれて沈みこむように消えて、次の瞬間には黒猫の真横に座っていた。いつもの瞬間移動だ。

それを見た黒猫は驚きのあまり跳ねて逃げるように走り、道化師はそれを見て笑顔のまま追いかける。

跳んで、跳ねて、猫にしか通れないような狭い道は胸がつかえて

同じ道を通れなかったようだが追いかけて続ける。

途中で瞬間移動や明らかに重力を無視した速度のふんわりとしたジャンプを挟みながらなもの、全力で走る猫に追い付く人間はとても珍しいだろう。

本人にとつてはそんなもの程度だが。

「吾が名は道化師リゴレーヌ。黒猫ねここはなぜゆえ案内？　ここいずこなりては未知なる道ゆき謎の家！」

やがてたどり着いたのは一軒の建物。

僅かな足掛かりを跳んで黒猫が高い位置にある空いた窓から部屋に入り、リゴレーヌは直接跳んで入った。

「んむう？」

梁の上の狭い隙間に収まったひとりの一匹が見下ろした先には複数の人間がいる。

それを見てリゴレーヌは——落ちた。

「うわあ!？」

「なんだこのガキ！」

落ちた、というより自ら降りた。

それもそのはずで、黒猫が案内した先ではひとりの子供をふたりの大人が取り囲み脅すようにしていたのだから。

子供には獣の耳が生えていて、一目に獣人とわかる。

囲まれていた理由はわからないが、ただ事ではない。

「こちら道化師リゴレーヌ！　飛び入り舞台のお邪魔虫？　いえ道化師！」

「な、なにいつてんだ……？」

「なんでもいいからついでに捕まえちまえ！」

「へいー！」

捕まえる。良い言葉ではない。

踊るようにくるくる回って伸ばされた手を避けて、リゴレーヌは男の足を払い転ばせる。

「非道な悪事は見逃し許さぬと、ニコルがそういうそういった？　い  
う！　そは悪事？」

答えはナイフだった。

しかしやはりリゴレーヌには当たらない。

紙一重でかわし、そういう演目なのかとすら思える。

「お客さんさんお客さん、この者らは悪人たるや？」

「……？」

「悪人たれば成敗いたすがしなきやにやならぬ！」

「……」

獣人の子供は喋らない。

喋らないというより、喋れない。口は開けども声にはならないのだ。

だがりゴレーヌは心でも読んだかのように頷くと手を叩いた。

「見せたりまするは悪人成敗道化師リゴレーヌ！ の、奇術！」

手にした帽子のふちを掴んで広げ、

「いただきます！ となー！」

男二人を飲み込んだ。

「ふ、ふふふ、ふふふふふ……」

先程までナイフを振り回していた大人二人を一瞬で消し去ったりゴレーヌは不気味に笑い、それを見て獣人の子供もその横へ来ていた黒猫もドン引きしていた。

くるくると帽子を回して頭に被り、未だに現れない二人の事など忘れたかのように話しかける。

「うにゆうい。言葉話せずとも気持ちわかりて。怖い怖い、もう大丈夫！」

「……」

恐怖の対象はリゴレーヌの方では？

微妙に通じていない。

「ふむふむ。黒猫はそう申すか」

子供は置いておき、ここまで道案内をしてくれた黒猫の方に聞く。

こちらはなぜかスムーズに会話ができるらしい。

「うむう。語り申せぬ獣人たるは人にあらずて愛玩奴隸、そこそこ値段ともうされる……」

「……」

「なれば！ 喋れば良き！」

「……」

ぶんぶんと子供が首をふる。

それができないから苦労をしてるんだと。

リゴレーヌは気にせず手を伸ばす。

子供の獣人はもう分かって諦めていた。今ここを切り抜けても、喋れない流暢に話せる自分に行く宛はないのだと。

「行く宛なきとはその理由はなんぞや？」

「どうせ……え？ あれ？」

目をぱちくりさせながら困惑する。

「吾は何もしておらずしてなく。元よりそうであればそうであろう！」

リゴレーヌが元気よく話す。

それに対して子供も拙く喋りかけるが言葉は続かない。

実は流暢に話せるが今まであまり会話をしてこなかったので言葉に詰まっているのだろう。

「黒猫とその主よ、何しても良きと自由を履き違える事なかれ！ さもなくば悪党成敗いたす！ よせいあをわへー！」

深々と頭を下げてリゴレーヌが帽子に吸い込まれるように消えて、帽子も消えた。

「ぐわあ!?」「うおっ！」

「で、出てきた……」

一拍おいて、外へ通じる扉が開いて消されていた男達が帰ってきた。

状況は分かっているようだが、とてつもない恐怖を体験したらしい。ここが元いた家だと認識するやいなや逃げ去る。

全てにおいて置いてけぼりの子供は、喋れるようになったことを不思議になりつつ相棒の黒猫を撫でる。

確かにこれでもう「密猟」される危険はなく自由の身となった訳だが、家もない貧民の出であるがゆえに行く宛もない。

「にやう」

黒猫が鳴いて、去った男が落としたナイフを教えしてくれる。

「悪人、成敗……」

唯一の取り柄として、今回は運がなかったが基本は逃げて生きてきた。身体能力や勘には自信がある。

義賊ならば。もしかしたら。

ナイフを拾って適当な紐でくくりつけ外へ出る。

目に焼き付いた道化師の軽やかなステップ、そして悪を倒し正義に生きるその姿勢。

「やろっか」

「にやう」

黒猫と獣人の子供。

リゴレーヌが偶然助けたそのコンビが少しずつ名を馳せていくのは、またいつか。

## 震える山

「どちらからでもどうぞ」

軽く杖で地面を叩いたアイーダが呟き構えるわけではなく足を揃えたまま姿勢良く凜と佇んでいる。

かすかに吹く風に揺れるメイド姿は美しくあるが、その実力は確かでありどこからでも掛かってこいとは言うが下手に踏み込めば一瞬で斬られるだろう。

相対するニコルはというと、木剣を構えたまま警戒し過ぎてもはや動けていない。

「アイーダ姉ねえ剣技はしゅぱぱ！ 早き事それ光の如し！」

強さを聞いていたニコルがそれなら折角だからと手合わせを申し込んだそうだが、実力に差がありすぎる。

以前のリゴレーヌ戦で自分からアクションを起こす必要性を学んでいる筈。それでも動けないのは剣士として相手を見抜く素質があるということか。

俺の弟子なんか拘らずもつといい師匠のところに行けば名も残せるだろうに。

「どうかされましたか？ いつでもどうぞぞ？」

正直俺もどう打って出ればいいのかわからない。

アイーダの持ち合わせている特殊能力というか魔法というか、それらが常識から外れてそうだし。最初に会った時は「見ていなければ見られない」とか言って透明化してたし何か絶対隠し持つてる。

「……」

じりじりとニコルが音を立てないように側面へ回り込もうと進む。

それを認識しているだろうアイーダは微動だにしない。

「姉ねえ見えぬはホントの事こと。されどしかしか見えてる範囲はそれ以上！ 物音ひとつ？ いえ反射音！ パッシブアクティブ混合

ソナー！ んなー！」

ソナーってなんだよ。

「リゴレーヌ」



「はいなー」

佇んだままのメイド服からひと言名前を呼ばれただけで意味を汲み取り、兩人差し指を口の前で交差させて頬を膨らませながら黙った。それだけで意志疎通とれるのか。いいなあ。

俺もなあ、名前呼ぶだけで簡単に指示取れたら凄いなあ。  
ぷすーと息を漏らしているリゴレーヌを尻目に視線を戻す。

アイーダは相変わらずだが、ニコルが右手の剣はそのまま左手に小さな楽器を持ち魔力を集中させている。

そういえば魔法の素質あったんだっけか。まったくそれらしい事をしないから忘れかけてた。

小さな楽器に何か仕掛けが施されているようには見えない。魔道具でもないただの楽器。

あんなもの何に使うんだ？

「はっー」

充分に魔力を込めたそれを投げると同時に、走り出す。

「お悔やみ——」

一瞬杖が輝いたと思えば楽器は真つ二つになる。一瞬で斬り捨てた。

しかし、余裕が消えうせたのはアイーダの方だった。

「覚悟！」

魔力の籠った楽器は壊れると同時に喚くような音を掻き鳴らし、アイーダの耳を塞いだのだ。

ルールのない戦いに、それもどうとでも来いと言われたのでとすれば仕方ないが、ニコルも割とえぐい事をする。

「はあああー」

「ぐ……いー」

楽器の効力が残っている間に決着をつけようとしているのだろう。左右にステップを取り、僅かに聞こえているだろう足音での位置情報も渡さないように立ち回りながら猛攻を続ける。

ほぼ何も分らないであろうアイーダは、たたらを踏みながらも気配に反応し機敏に受け止めているがいつまで持つか。

「むすー！ んー！ んんー！」

「リゴレーヌ」

「んむう？ むー」

思わぬ劣勢にリゴレーヌが騒ぎ出したので宥めようと思ったが駄目だった。

——幾度かの打ち合いの末、ついにニコルが一本を胴に決める。それと同時に、やかましい楽器も静まった。

「……見事です。剣士ニコル」

「はあ……はあ……はあ……ありがとうございます……ごさいました……」

「まさか耳を塞がれるとは思いませんでしたが、それにしても相手の弱点を突くのは素晴らしい事です」

表情は変わらないが、アイーダの声からは悔しいという感情が滲み出ている。自信があっただけに悔しいのだろう。

「姉ねえご無事か無事かやぶー！」

「大丈夫ですよ。リゴレーヌ」

「ぐぬぬぬ……ニコルよ！ アイーダ姉ねえの仇！」

「……え、もう一戦ですか……？」

流石に休ませてやれよ。

「止めはしないんですね……」

俺が勝てるか怪しいと踏んだアイーダを倒したんだ。今ならリゴレーヌも越えられるよ。

頑張れニコル。お前なら行けるって。

「流石にリゴレーヌさんは無理ですよお」

リゴレーヌの方はやる気だぞ。

「ええー……」

……

「お子ではなかったのですか？」

「ただの押しかけだ。最近は給仕として雇ってもいるけど」

「そうですか。細かな動き、剣筋も同じと思っただけですが」

「剣は勝手に盗んだんだよ。弟子じゃない」

時間を空けて回復したニコルとリゴレーヌが相対する。

リゴレーヌのスタイルは少し自分で変更したようで、もはや盾も装備せず両手に木剣を持ちそして構えてもない。

ニコルの方は最初にあった時から変わりなし。基本に忠実だ。

「それでは始め」

「うむ！ 今更紹介いらぬと思われしかとて名乗ろう道化師リゴレーヌ！ 手合わせ願いたもうぞやー」

「よろしくお願ひします」

軽い手合わせならいつもしているもののニコルがリゴレーヌに勝てた事はない。

ある程度は動きを読めても、結局は動物的な動体視力を持つ道化師に攻撃が当てられないのだ。

「あの子は伸びますよ」

「知ってる」

「長所であるしなやかな動きを失わず、豪胆果敢に力強く攻めこむ事のできる思い切りの良さ。有望ですね」

「ならアイーダが弟子に取るか？」

「いいえ。彼女はあなたの剣を目標しているのですしそれはできません」

「……彼女？」

前方に向かって跳びながら後方に回転する謎の跳躍をしながらニコルを蹴ったりリゴレーヌが着地し、二転三転飛び回る。

やはり身軽な道化師に剣は届かない。

「ニコルは確かに細身だが女と間違えるのは可哀想だぞ」

「それが一番失礼かも知れませんか。人にもよりますでしょうが」

……ん？

あれ、待てよ。ニコルって女だったのか？

「ご本人に確認はされましたか？」

「いやわざわざ聞かんだろ」

「決め手は？」

「そら、髪短くてボクボク言ってる」

「では本人からは？」

「一度も——」

——ボクは女ですよ父さん！

「高鳴った鼓動。心当たりがお有りですね」

「いやいや待って待って」

以前にリゴレーヌの胸元へ落ちた食事を拭いたときに不思議そうな顔もしていたような。

あれ？

まさか、ニコルが隠してる事って？

素早く動き回るリゴレーヌに食らい付くニコルの様子を、やつの性別を決定付けるその証拠を掴もうと胸元へ視線が向く。

しかし。

「……ダメだ、全然動かなくてわからん」

「お悔やみ申し上げます」

後頭部に強い衝撃が走り、俺は気を失った——

## レーヌズ

弟子なんか取る気もなくプロフィールの確認を怠った事、勝手に俺が少年だと思っ込んでいた事。

そして何より、女だと思っ込み教えられても信じ切れずリゴレーヌと身体の一点を見比べてしまった事。

思いつき後頭部をぶん殴られた事に対し文句は言えない。アイダがまさか拳を使ってくるとは思っもよらなかったが。

「すまん」

「——いいですよもう。むしろ男風に振舞ったのはボクも悪いですし」

曰く女だとバレたくなかったのだとか。

わざわざ男装していた理由については口ごもっていたので深くは聞かなかったが、まあだいたいあれだ。舐められたくないとかそんな感じだろうどうせ。

ニコルが半分悪い気がしてきたものそこはわざわざ言うまい。

ちなみに模擬戦の結果はやはりリゴレーヌの勝利だったようだ。

戦いなので奇術を自ら封じつつも身軽な動きで翻弄し、アイダの居合を真似た一閃で盾を弾き飛ばしたらしい。

前にもアイダの真似はしていたが、ニコルによるとよりキレが増してアイダに近づいたそう。

「暗殺術をそう簡単に身に着けられると困るのですが」

さらつと言ってるがそう簡単に暗殺術を人に向けてるアイダもどうなんだ？

「私はこれしか芸がないので」

危険を通り越して殺しに来てるようにしか思えない。

というかニコルと戦った時にさりげなく手持ちの仕込み杖使ったし。

手作りできる簡単な物とはいえ真つ二つにしてたぞ、ニコルの楽器。

アイダには見えないだろうが断面図が滑らかすぎる。

「楽器なりて！」

ずっと頭に兩人差し指を当てて唸りながら揺れていた道化師が急に帽子のぼんぼんを発光させながら両手を挙げた。

「どうしたいいきなり」

「この道化師リゴレーヌに足りぬものとは賑やかやかやにぎにぎ、足りぬぬがっしやーん！」

充分賑やかだろお前。

「芸覚えては足りぬぞ道化の奇術の粹組み囚われず！ エレクトリカルソロパレード！」

そう言つてぼんぼんをより輝かせながら、帽子が七色に輝きだす。流石に魔法だろうがどうなってるんだそれ。

というか前から気になつてたがそのぼんぼんは何の素材を使ってるんだ。光らせてる今もそうだが、いつでも常に薄ぼんやり光ってるぞそれ。

「蓄光ぼんぼん帽子の先に？ 御師様師様はこれをぼんぼんを称す？

なりて！ は、擬音！」

「じゃあ正式名称はなんなんだよそれ」

「ぼんぼん」

「当たつてんじゃねえか！」

突っ込みを入れると満足したのかりゴレーヌはけらけらと笑いながらポーズを決めて見ていた（片方は聞いていた）二人に向き直る。しまった、無意識に道化師の舞台に立ってしまった。

「仲良いですね」

「良い事です」

ニコルは少し口を尖らせて皮肉交じりに、アイーダは微笑ましく軽く拍手を送る。

やめろお前ら。おっさんをからかうな。

「でもでもでもでも、御師様以前とお変わりなりてはまるまるまんまらー！」

「お前だつてこつちが理解できる言葉で喋つてくれるようになったじゃないか」

「元より言語は統一なりぞては変わりなく？　そう変わらず。変わり  
ては御師様の理解知識」

「悪かったな薄学で」

「そはつまりこのリゴレーヌめがニュー御師様!?　称えよ道化師回れ  
よ世界！」

「お前が師匠とか地獄か？」

「ネオカオス！」

「自覚あんのかよ」

道化帽子を外して口を観客（偶然通りかかった冒険者）に向けた。  
当然おひねりは飛んでこなかったが、代わりにニコルとアイーダが  
拍手を送る。

……二階から俺達のやり取りを酒のつまみにしてた連中が銅貨を  
投げ入れた。見世物じゃねえぞ。

「見世物ですぞよ道化師舞台！」

「いいぞー！　リゴレーヌちゃん、可愛いぞー！」

「拍手喝采調子を揃えてぱちぱちお声！　10を投げられ好評感謝！  
ありがとうございます！」

あ、もうこれ道化師モードだ。帽子を被り直すとどこからかひとり  
でに転がってきた樽に飛び乗って自分のダガーを投げてジャグリン  
グを始める。

二階にいる観客が見やすいように派手に、大げさに。

「さり気なく名前呼ばれてたけどいつの間にかファンなんてできたんだ  
？」

「一人称が自分の名前ですし、それでは？」

「あー」

リゴレーヌが自分を呼ぶときは「リゴレーヌ」、  
「道化師」、あるいは「吾<sup>あ</sup>」だ。名前は覚えられるか。

前二つが舞台に立つ宣伝とすれば素は「吾」なんだろうけどそれは  
それで珍しい。ニコルが「ボク」なのは理由はあるし納得するが、  
吾輩でもなく「吾」って。

「ふ、ふふふ。道化のふるまい目的記憶。つまりは二度と忘れぬ特徴

持たせ。ゆえにゆえゆえなりぞて理由！」

樽から落ちた。

「もが！・ もがもがもが？・ ももも！」

硬い地面をもろともせず頭から突き刺さって逆さになった道化師はさておき、そろそろ腹が減ったな。

「何か作りますか？」

「お前も疲れてるだろ。適当な店にでも入るか」

「ぐちそうさまです」

「奢ってもらおう気まんまんだなおい。当然そうだが」

「……リゴレーヌの座標がおかしくくないですか？」

地面に半分埋まってばたばたと荒ぶっている道化師にアイーダが困惑しているが、それに付き合っていたらキリない。ニコルも慣れたものでスルーして会話してくれた。

ほっといても満足すれば追いかけてくるだろう。

「おわーっ！ バグレーヌがえらいことに！」

「いてっ」

荒ぶりまくって質量を無視して伸びた帽子がばちばちと当たって痛いんだが。

見ればいつの間にか樽の中に収まり手足を伸ばしているリゴレーヌが樽ごと転げ回りながら帽子を振り回してる。

なんだあれどうなってんだ。

「たーるっ！ たる！・ わはは、これぞタルレーヌ！」

「大丈夫ですか？」

近づいたアイーダが樽部分のみを斬り捨てた。手元が見えなかったがそれもそれですごいな。

「アイーダ姉ねえ助かり申し。御師様ニコルは薄情なりて！」

「狼少年という逸話もあります。程々に」

「ふむむむ普段がやり過ぎた？ 反省反省」

もしかして本当にダメな感じだったのか？

全然余裕な感じだったが。

「と、いう芸！」



「分かりにくいですよ」

「いげういと?」

「はい」

それ会話できてるのか?

「では行きましょう」

「おなかペコペコペコレーヌ! リゴレとバグレとタルレとペコレ!

エーヌ!」

「何か食べたいものはありますか?」

「姉ねえお任せ御師様任せ!」

「……だそうです」

店の指定はないと。

流石長年付き合っているだけあってリゴレーヌとの会話自体がスムーズ過ぎる。

## 行儀

「あは？ わあーは！」

「ふふふ。リゴレッツタも喜んでいますね」

リゴレーヌの腕の中で似た名を与えられた鶏が逃げようと奮闘するが、するりするりと蛇使いの芸のように見事に遊ばれていた。

どう見ても喜んではいない。むしろ暴れてる。

「ふえっへんふふふ、くすぐりたい」

顔を埋められている鶏のリゴレッツタはとても嫌がり、翼を広げて抵抗した。

アイーダはそれを無表情ながらも微笑ましく見守っているが、ここは飲食店だ。あまりペットを持ち込まない方がいいのではないだろうか。

「むうー、御師様師様は厳しかしかか」

「我儘を言っではいけませんよ。申し訳ございません」

「さらばらはらりリゴレッツタ。吾<sup>あ</sup>はらわいつでもリゴレーヌ……」

とても寂し気に呟いて鶏を道化帽子へ収納した。

「また出禁にされないか不安ですね……」

「これでも以前に比べたらマシになったんだし大丈夫だろ」

「本当ですか？」

不安げに尋ねるニコルが指さすりゴレーヌの帽子は、中で何かがうごめいていた。

何か、と聞くまでもなくさつき<sup>あ</sup>の鶏なんだろうけど。

いつもの瞬間移動で家に飛ばさず名残惜し過ぎて隠し持ってやがる。

「リゴレーヌ」

「そはなんぞや？」

「帽子の中を見せてみる」

「やなり」

首を横に振って嫌がる。

「それ取ってみて。絶対なんかいるから」

「なんもなし。おらぬは無しにもリゴレッタ！」

「いやほらなんか動いてるって」

内側で存在を主張する鶏が帽子に穴を開ける勢いで暴れてるんだが。

「えいつ」

後ろに回り込んだニコルが帽子を引っ掴んで取った。

「あ、あれ？」

「ほらほらほら何もおらぬや」

道化帽子の中には何もいなかった。

リゴレーヌの頭には勿論として帽子の中にも。

「リゴレーヌに変な疑いを持つのはおやめください」

「え、これ俺達が悪いのか？」

「マックスさん……」

「おいニコルなんでお前がそっち側なんだよ」

「疑い疑われはひどいな」

帽子が元に戻るとやはり中で何か暴れている。二つ山の帽子だったのがぼこぼこなんか伸びまくってる。

恐らく帽子を外した一瞬だけどこかへ移動させてたんだろうけど、鶏のリゴレッタが不遇で仕方ない。

先ほど注文していた料理が人数分運ばれてきてようやく食事となる。

よくやく食事となるが、運んできた店員がもの凄い目で見えたぞ。

「リゴレーヌは猫と会話できますが、鳥の言葉は分かりませんか？」

この場にいる誰よりも姿勢礼儀の正しいアイーダがふと尋ねる。

当たり前のように言ってるが前提である猫と会話の時点で何かおかしい。

しかし、動物と会話をするというのは心当たりがある。

アイーダのいた屋敷へ行ったときにリゴレッタを追いかけたリゴレーヌは、まるで言葉がわかってるかのようには話していた。

心を読む、とは違うだろうがまだ隠し芸があるのかこの道化師は。

「うむ！ 道化師その名はリゴレーヌ、心通わせ一芸成功なられやな

れや！」

「流石です。では、リゴレッタが何か要求しているものは分かりませんでしょうか？」

帽子の中から鶏を取り出すと、顔を近づけてみる。やっぱり帽子の中にいるじゃないか鶏。

リゴレッタが嘴で抵抗するがミリで避けられた。

「自由が欲しい」とは申す」

「……自由、ですか」

「むむむいリゴレッタやレッタ、自由とはなんぞや？　そは自由を知りうるなりてか？」

鶏に哲学を問うな。

「では好みの食事でも。私が用意したものはあまり好まないようですので」

そういつて自分の食事から唐揚げを分け与えているが、食事云々というか共食いは流石にしないだろう。

ぐいつと口元へ近づけるがやはり食べない。というか鶏らしからぬ程の顔芸で拒否している。

それを見てリゴレーヌは新たな芸を発見したと喜んでいるが、どう見てもリゴレッタの方は喜んでいない。

似ているのは名前だけでリゴレッタも道化師被害者の会に入会できるな。

「穀物が食べたいと申す？　好み嫌いは仕方あるまし！」

アイーダの持っていた唐揚げをぱくりとリゴレーヌが食べた。

「ふもふも」

「ふふ、リゴレーヌはお好きなようですね」

「あむ！　アイーダ姉ねえ敬い申す！」

ちなみにアイーダは手で食べさせようとしていたので現在その手ごと食べられている。

「アイーダさんって本当にお姉さんって感じですよね」

「まとめ役って感じだな。そして道化馬鹿のストッパーでもある」

「ボク達には一切制御できなかつたりゴレーヌさんがあんな簡単に

……」

「お前も疲れてたんだな……」

一応は給仕の他にリゴレーヌへの作法教授も含めて雇っていたのでニコルも道化空間にやられていた。

ちなみに作法や知識はリゴレーヌの方が詳しい。道化のおふぎけで全く無視されているが。

元サーカス団員のふたりはふたりで盛り上がっているので俺達は俺達で話をしよう。

どうなんだ、最近。殆ど教えてないというかほぼ給仕の専門と化してるけど。

「一回だけ、一回だけですよ?」

「何が」

「もの凄いまともというか、急にきちつとしてくれたんです。恰好はいつものままなのに、まるで別人みたいで……。ボク必要ないじゃないですかあ」

「まあ食事作法は必要ないかもな。だけどな、俺にお前は必要だよ」

主に俺の心労を分け与える存在として。

「ほ、本当ですか?」

「ああ。なんだかんだ言って悪かった。お前がいなきや今頃……」

とつくに発狂していた。

「マックスさん……」

ニコルが凄い感動しているが、横に視線をそらしてみろ。

「見よこの道化師鶏芸ーっ!」

「あああ、リゴレーヌさん座ってください!」

近くの空いたテーブルに立ち鶏を自由自在に操る道化師様が芸を披露している。

止めるのは任せたぞ。

「この店ももう終わりか……」

「マックスさん諦めないでください!」

いやもう無理でしょ。この店の客と店員の視線と、ああもう言い逃れできない。

アイーダはどうして止めなかったんだ？

「……すー……」

「寝てるし」

いつの間に寝たんだこのメイド服は。

「なるほど。誰にも注目されてなかったのが堪えたのか」

「分析してないで止めてくださいよう！」

「お呼び呼びびび？ なんぞやお二人！」

「飯食ったら帰るぞ」

「はいな！」

席に着いたりゴレーヌはアイーダのメイド服からエプロン部分をするりと奪うと装着し、行儀よく食事に手を付ける。

普段のふるまい、先ほどの落ち着きのなさはどこへ行ったのか。同一人物かも怪しいほどの美しさもある正しさだ。

……まあ、ずれたことをして突っ込みを貰いたいネタフリなんだろうけど。

というか人の物を取っておいて礼儀も何もないが。

## 前日

「やっぱり出かけないんですか?」

「……祭りが終わるまではな」

「締め切ってたら体に悪いですよ、つと」

ニコルが開けた窓からは町のざわめきが聞こえる。

早いもので今日は鎮魂祭前日、町中は飾りつけや帰省してきた人々、あるいは観光で普段の倍は賑やかになってきた。

俺の方とはという気持ちには変わらず家で引きこもりの予定だ。やはり表に出る気にはなれない。

リゴレーヌはそんな俺とは反対に、テンションが上がり過ぎて朝からアイーダを連れて出かけている。お祭りを前にして道化師を留めておけというのも無理だろう。

「お前はここにいいていいのか? こう言っちゃなんだが、孤児院にとつて祭りは大事な収入源だろ」

とんとんと料理を始めた背中に話すと昔を思い出す。

相手は違えど妻と同じ名前であるニコル。時期も相まってどうしても考えてしまう。

「ボクは劇をする事になったんです。準備も終わってますし、あとは待つだけです」

「お前がねえ。演じるのは得意そうだ」

「女だつて見破られませんかでしたしね」

「悪かつたつて。——そーいやその事つてリゴレーヌは知ってたのか?」

「割りと最初の方から」

あんの道化師、分かつて黙ってたな……!

やけに意味深い言葉を残したりしてたけど……!

「ま、マックスさん」

「どうした?」

「あの、劇だけでも見に来ませんか?」

「お前の? どうして」

聞いてみて、言葉を間違えたと思った。

ただ劇を観て欲しくて誘ったにしては動揺が酷い。

「そ、その、脚本はボクが担当したんです。それで、とう……マックスさんに、観て欲しくて」

「お前が脚本をか」

「はい！」

どうしても来て欲しそうに見える。

自身が脚本を勤め、観て欲しいと言うからには何かのメッセージが含まれていそうだ。

それは恐らくだが、男装していた事から始まり全ての答え……と言うには期待し過ぎかも知れないが、何か重要な意味が込められている。

外に出る気はしないが、そこにしか答えに近づけるチャンスがなければ。

「時間は？」

「えと、祭り中は毎日、昼の鐘が鳴ってから一時間後です」

「気が変わったらな」

「ありがとうございます！」

まだ行くとは言っていないが、絶対に来ると言わんばかりの返事だ。

テーブルに料理が並べられていく。

「だってマックスさん、絶対に来ますもん」

「何でそう言える？」

「リゴレーヌさんを投げ出すような人じゃありませんでした」

言葉に詰まる。

弟子を取らなければいけない決まりがあつたとはいえ、リゴレーヌを放置せず手元に置いていたのは事実だ。

というよりも、どこかのタイミングで劇を観に行くのは決めていたしもう返す言葉はない。

「ベリーー！ 先生が探してるよー！」

表から声がすると同時にニコルが慌てた。



「ああ、もう！ ま、マックスさん、今日は帰ります！」

「お前を探してたのか？ ベリーって？」

「また今度！」

慌てて外の声を止めに出て行ってしまった。

そういえばニコルという名前しか聞いてなかったが、下はベリなるとかなのか。クラリスもニコルを指してベリと言いかけてたし。

……

……………

……………ん？

ニコルは女で、俺の娘と同じ年位で、ベリから繋がる名前を持って、俺の弟子入りに拘ってて、剣士を目指している……………。

「まさか！」

娘のベリテットが、妻を守りきれず死なせた俺の前に戻って来るわけがない。

嫌な妄想をかき消そうと戸棚を開けて酒瓶を取り出そうとしたら、気配もなく突然中から飛び出したリゴレーヌの猫に落とされて瓶を割られるともいかずとも綺麗にコルクが飛んで中身がなくなってしまう。

飲んでごまかすな、という風に悪びれもしない猫が開いた窓から出ていく。

「リゴレーヌか？」

名前を問い掛けても、いつも出てくる道化師は現れない。

しかしまさかそんなことが、何てことが起こる最近だ。俺も少し現実を受け入れなければ。

俺ももう少し、現実にも目を向けなければ……………。

……

「ぽっぽるぽっぽー祖国のおやつ、ぽっぽるぽっぽー過去のもの？  
アイーダ姉ねえ過去は好き？」

「そうですね。様々な過去を思わない訳でもないですが、それも今の私を形成するのに必要なものです。好きか嫌いかではつきり別けるとすれば嫌いに入りますが、捨てられるものではありません。どうかされましたか？」

「いえいえいえ、御師様は過去によって未来見ず？ 液体流動ガラスも可変。故に停滞は不可なりて進むしかあるましに、眼前未来すら瞼にて閉ざし背けて受け入れならぬや師様の情景状況！」

噴水の縁に腰掛けながらリゴレーヌの祖国のおやつをアイーダと共に食べながら、膝に乗って来た猫を撫でる。

お祭りを楽しむ気分もあるがリゴレーヌなりにマックスを心配しているらしい。

「リゴレーヌは過去を好きになれますか？」

「くなはこか、過去はなく？ “リゴレーヌ”に以前なし！ じえ、の、とす、とはなんぞや？ さあ！」

「申し訳ありません。今はリゴレーヌ、ですね」

「道化師は他にあらず新たな新な名リゴレーヌ！」

おかしの入った紙袋と猫をアイーダに預け、跳んで身軽に宙返り。重力を感じさせない軽やかな動きでぴよんぴよん飛び回る。

たたん、たたん、と鳴る足音と風を切る音に盲目メイドは耳を傾け楽しむ。

見た目の派手さを感じられずとも、その存在感を感じられれば良かった。

「お祭り騒ぎは道化の舞台！ 吾へのオフアーはいずこやどこや？」

「不思議ですねえ。いつも立ち回っているのでしょうか？」

「そう！ 飲食路地裏噴水広間、隙あれ舞いなれ道化舞台！ にも関わらずや！」

「それほど頑張っているのに世間とは厳しいものです」

「ふんす！ ふんぬ！」

飲食店での立ち回りは出禁に繋がりに、路地裏は確かに人望を得るに

至ったがそも貧困民なので呼ばれる事もなく、唯一まともな噴水広間はそもそも回数が少ないし目の前に出禁になった店があるので名を馳せるに相応しくない場所だった。

世間が厳しいというか、致命的な部分を無視している。

「リゴレーヌ程の道化師ならばすぐにお呼ばれしても良いでしょうに」

「分かっておられるは身内のみなればいと悲しきも拭えよう」

「皆見る目がないのです」

確かに腕はいい。リゴレーヌ程の人物はいない。

ただしそれ以外が致命的。

「あー！ リゴちゃんいた！」

「ふもつふ？」

紙袋に顔を突っ込みおかしをくわえた道化師が声をかけられた。

アイーダは静かに杖を確かめ、リゴレーヌは喜びの声を上げる。

「クラリスなりて！ アイーダ姉ねえ、この者はリゴレーヌの良き良き知りゆるご友人！」

「お知り合いましたか。斬っておきますか？」

「リゴちゃ——なんで!？」

「冗談です」

「こ、こわー……」

ドワーフの娘クラリスは手に何かブーツのようなものを持っており、ドヤ顔でリゴレーヌに渡そうとして後ずさる。

「つていうかこの人は？ 明らかにいつでもこつちを斬れる構えなんですケド」

「それはアイーダ姉ねえ！ 道化師リゴレーヌの同僚にして一座の生き残り！」

「申し訳ございません。何か重いものを持って駆け寄ってきたのでつい敵かと思ひ」

「あはは、それはごめん。んでリゴちゃん、これ！」

見た目はただのブーツ。

わざわざ渡す必要もなさそうだが、とりあえず道化師は素直に装着

した。

「お、おお？ おおー」

「どうよこのシークレットブーツ。リゴちゃんでつかいねえ」

「これで派手なり立ち回り！ 舞台目立ちて不足なし！」

立ち上がったリゴレーヌの身長が、伸びていた。

元々クラリスは種族的にも小柄でリゴレーヌと身長差があったとはいえ、この状態で並ぶとクラリスの視点がリゴレーヌの胸元辺りにまで来る。

「リゴちゃんでつかいねえ……」

死んだ目でクラリスが呟いた。

「そして突然プレゼント？ 何か目的ありての何か？」

「押し売りですか」

「待つて待つて、刃をちらつかせないで。ああ、でもその仕込み杖もうちよつと見たいかも……」

「体験しますか？ 断面をお楽しみください」

「それ斬られちゃう奴じゃん！ って、じゃなくて！」

仕切り直し。

山脈から目を逸らしながら話す。

「孤児院の方で劇やるでしょ？ そこで合間に出番があるからって……あれ、聞いてない？」

「舞台！ 劇！ 間埋めのクラウン！」

厚底の靴で石畳をたらたたとリズムよく叩くのを見て、クラリスはしまったと表情に出す。

当日に伝えないとリゴレーヌの上がりきったテンションで被害者が出る。だから誰も伝えていなかったのだと。

どうせこの道化師なら時間だけ伝えても何とかなるのだし伝えるのは当日でも良いから。

「良い音ですね」

「ふ、ふふふふ、ふふふふふ……」

初めて履いた厚底靴にも関わらず褒められて感覚を掴み、軽やかなタップダンスを披露する。

「道化靴？ 色は派手！ 音も良く？ 背丈増し！」

「見に行きますよ。楽しみにしてます」

「ごめんよマックス……安らかに眠ることなかれ……」

静かにクラリスは祈った。

助ける気はないらしい。

## リゴレーヌ・ダブル。

「この世に蔓延りらりての蔓延不幸？ 道化の涙は笑いの為に、胸の奥底心の中に」

たんとんと土間の石を靴でリズムよく鳴らす。

「舞台は全てを内包し、現世のとやかく忘れさなん！ 嗚呼、世が世なら、それこそ戯曲であれば良からうに！」

ぱつと手を振りくるりと回り、つぎはぎ衣装のスカートをふわりと浮かばせる。

明日からニコルの舞台、その幕間で道化師としての仕事を務める事が決まったと興奮気味に伝えたりリゴレーヌは部屋に籠り、端切れで手持ちの衣類の一つを改造し簡易的な道化衣装を作り上げていた。

それから用意したであろう台本を読み上げ練習しているのだが、もう日のない夜中だというのに騒がしい事この上ない。

「……そろそろ寝ていいか？」

「いなー」

ひとつは猫に台無しにされたとはいえ秘蔵の酒はある。

それをこつそり飲んで眠くなってきた頃に、相変わらず意味の分からないリゴレーヌに付き合うのは辛い。

そもそも舞台があるとニコルがあえて教えなかったであろうと予想される理由の通り、この道化馬鹿なら当日ぶっつけでも大丈夫だろうに。

どうして俺まで挨拶の台詞合わせをしなければいけないんだ。と  
いうかこれは挨拶で良いのか？

「ニコルも御師様も分からずや。世界に不の幸あふれらる。それを忘られるたりなりは、唯一道化奇術の舞台演技。この世が舞台にならぬなら、せめて観客席包む！」

「お前の奇術はいつでも浮世離れた。安心しろ」

「むう。吾はたった一人の道化師。どうしても限界ありける……出来うるならば2人に？」

ゆらりと霧に包まれたかのようにリゴレーヌの輪郭が不明瞭にな

ると増えていた。

見間違いいではない。二つ山の帽子を分けて三角帽にして、リゴレーヌが増えていた。

「しかしそれでも限界ありける」「世の悲しみを拭いならん」

「ではどうしよう?」「リゴレーヌにできること!」

なぜ増えた? 酒を飲み過ぎたか?

人間が突然分裂するなんてありえない。

「お前は、お前にしかできないとは言うが、むしろなんならできないんだ……?」

「むしろ何をできると思ひ?」「吾は道化師一本道!」

「もういい。リゴレーヌなら、まあできてるしできるんだろうな」

「ふむふむむ」「浮世離れも誉め言葉」「できますよ?」「やれること!」  
にへらにへらと笑いふらふらと動く道化師が二倍の賑やかさで騒ぎ立てる。

俺もよほど疲れているんだろう。酒も回り過ぎて倒れそうだし今日はもう寝るか。

席を立ち自分の部屋へ向かおうとしたら、両腕に一人ずつリゴレーヌが掴まった。

離せ、幻覚が腕を……どっちが幻覚だ? なんでもいいから引つ張るな、もう寝かせろ。

「うわー」「わはー」

無理やりリゴレーヌを振り払ってベッドへ向かったら、毛布が猫に変わってた。

変わってたというか、多数の猫に占拠されてた。ええいリゴレーヌの仕業か!

「リゴレーヌ! 猫をどかしてくれ!」

「おお! 御師様元気であられたるや、すなわち稽古に付き合い申す? 助かりたもう!」

「そうじゃない」

居間に戻ったらリゴレーヌが一人で椅子に胡坐をかき揺れて遊んでいる。

良かった、あいつはちゃんとひとりだ。分裂してない。被っている帽子も一つ山の三角帽子からいつもの二つ山道化帽子に戻ってた。

しかし、やはりというか会話は通じない。

この世の摂理常識はいつそ通じなくてもいいから会話を通じさせてくれ。

それができないのであればせめて寝かせてくれ。そろそろガチでやばい。

「ふむう。そのいえば幕間にどう何するかは聞きおらんでは無きよった？ 練習挨拶覚えが台無しなったら台無し。何すべきは後ごに問い合わすかや」

「やめるのか……？」

「うむ！ 御師様稽古に付き合い給うありがと給う。また明日舞台にてお会いしよう！ んふふー！」

「ああ、おやすみ……」

俺の願いが通じたのか、リゴレー又は後方宙返りでニコルの開けていた窓から飛び出ると自室の扉をパタンと閉めて消えた。

瞬間移動で部屋へ戻り内側から閉じたのだろう。もうこれくらいでは驚かないし何なら冷静に分析できる。

「寝るか」

ぶつぶつと怪しい呪術のようにこつそりと何かを呟いているのが分かる怪しい部屋の前を經由し自室へ戻る。

ちゃんと撤退させてくれたのだろう。もう猫はいなかった。

数匹であれば少し嬉しいが覆いつくす程は流石に勘弁願いたい。

明日からのこれから数日、町は鎮魂祭でお祭りムードに包まれる。最初の頃は慰霊とあり墓参りもできる雰囲気だったのに、段々と出店は増え華やかは増しもう出歩く気はない。

10年近い程度で人は過去を忘れる。当然だが俺以外にも当時を忘れられない人達もいるだろうが、復興の際に町へ引き入れた“知っているが知らない”人々の方がどうしても多くなる。

もはやまともに本来の目的を果たそうとするのは当事者や一部の真面目な人、あとは聖職者程度だろう。



リゴレーヌだって一座に思う事はあれど振る舞いは賑やかな祭りだ。

あの道化師の事だし、本懐を理解して暗い面を見せずあえて明るく勤めている可能性も大きいが。

「舞台、ねえ……」

ニコルは俺の事を知っている。それこそ外に顔を見せたくない理由も知っている程に。

そんなあいつが脚本を務め、そして俺に絶対見て欲しいというほどだ。何かあるのだし見に行きたいのは山々。

「あいつがどう動くか」

脚本家自らが幕間に登用したのだし何かそこで仕掛けてくるか？

日常では制御不能の道化師でも、舞台という餌をぶら下げて「こうして欲しい」とリクエストを出せば喜んで全力を尽くし満点中の満点以上を目指すだろう。

そこまでニコルが考えて当日に指示を出す気だったかのかは不明だけれども。

毛布を被り温かさに包まれ回り出した思考も止まっていき眠気が包み込む。

何の意思が働いていようとも俺からできることは覚悟を決める程度だ。

毎日舞台を昼過ぎにやってそのうち見に行くと伝わっているのだし、焦って初日に行くこともない。

.....

『御師様起床？ 吾は朝早く！』に孤児院へ。なぜ故と申す？ 演者は舞台の打ち合わせ！

楽しみですよ？ 舞台舞台！ ごはんはテーブルその上に |

『リゴレーヌ・アルルカン』

朝起きて居間へ向かうともうすでにリゴレーヌは出かけた後だった。

やけに達筆な置き手紙に書かれている通りに朝食は用意されている。

その横には紫色の花が生けられている花瓶もあるが、これはどうしろと？

丁寧に名札が付いているし、何かしらの花言葉に準えたメッセージだろうが俺には分からんぞ。

「アネモネ……って言われてもな」

とりあえず紫色の花は置いといて食事にしよう。

折角用意してくれたものを無下にするのは流石に憚られる。

「やけにワシヨクだな……」

白米、魚、汁物。食器に混じって置いてあるこの二本の棒はどう使うのかは知らない。

「あいつの故郷かねえ」

誰も知らぬ程遠くにある海の向こうの異国から現れたという800年前の勇者は魔王討伐に至るまで、様々な文化文明をこの大陸に持ち込んだ。

特に顕著な食関連にはワシヨクというジャンルも生まれ、リゴレーヌが以前に異国のお菓子として持ってきたポップヤキも源流はそこにある。

リゴレーヌにワシヨクを食べさせたことはない。

国仕えである宮廷道化師の娘ならば自国の食事をメインにしていただろうし、日常的にワシヨクが食べられているのは勇者のいた土地のみ。

思わぬところからリゴレーヌの地元らしき場所が特定できた。

「つか白米はどっから仕入れてきたんだ？ ……瞬間移動か」

わざわざこのためだけにとと思うと手間が掛かっている。

二本の棒も食べる際に使う道具だった程度は知ってるが使い方は知らん。

おとなしく手慣れたもので食べる。

今日の予定はどうしようか。

窓の外からは慰霊に似使わない歓声が聞こえ、どうもやはり出かける気にはなれない。

明日……明日にしよう。

なんだろうな。明日も明日にしようって言ってる気がする。

## 『悪魔め、鬼め』

どんぱふどんどん！ たらたった！

そんな気の抜けた手作り楽器の音とどこからか出た花火の身を叩く感触、そして聞いて心地の良いリズムの足音で道化師が袖から現れる。

先が二つに分かれた大きな帽子を頭に乘せ、町娘の恰好をした少しちんちくりんな容姿。

帽子はともかく服は継ぎはぎだらけでとても身なりが良いとは言えないが、この場は孤児院前の簡易的な舞台。

あまり贅沢を言えない立場だと見に来ている人々は理解している為にそこは気にせず拍手を送った。

「孤児院孤児達台本努め、芸も演武も練習重ね！ 本日この舞台はもう間もなく！ 今しばらくお待ちくださいませしなりてやー！」

両手を広げて堂々と立ち回り右へ左へ慌ただしく存在をアピールしていく。

来ている人は疎らで多いとは言えないが、舞台が始まるまでに観客席を盛り上げて集客に努めるのが役目。

いつも通りのにへらとした表情は変わらないものの、観客を笑顔にする以外の与えられた道化師としての使命に燃えていた。

「ではでは始まりその時まで、ではでは道化の奇術をお楽しみくださいましてやー！」

いつもの得意なジャグリング。流石に瓶は見栄えが悪いと踏んだのか投げているのは借りてきた木剣だ。

手慣れた様子でまず二本を投げて、三本四本と増やしていく。

増やすと言っても取り出して投げる本数を足しくいくわけではない。投げてるうちに文字通り増えている。

マックスにとつては見慣れた物であっても、それを始めてみる観客は目の錯覚かと思う前例のないそれに驚きを隠せず盛り上がった。

それを見てリゴレーヌはご機嫌になり、あちらこちらと走り回り存在を再びアピール。掴みは成功したようだ。

「おとつとーっ！」

最後に舞台中央へ戻ろうとして、派手に転んだ。

投げていた剣も次々にぼこぼここと頭にぶつかって跳ねていく。当然見るからにわざと滑稽な姿を見せた道化師を客は笑う。

普段はマックスもニコルも呆れるか驚くかはするが滑稽を笑われるという道化師の基本をされていなかったりゴレーヌはますます調子が良くなるが、一度服に付いた汚れを払うように叩きながら立ち上がりごほんごほん咳。

それから数分に渡り見慣れた者からすればいつものかと思せ、しかし知らぬ者からは驚きのあまり声も出ないような芸を披露していく。疎らだった席も埋まり、それどころか立ち見まで出たのを確認した道化師は満足げに大きく頷き、そして堂々と名乗りを上げた。

「紹介遅れましたは吾の名を道化師リゴレーヌ！」

リズムよく靴を踏み鳴らす。

「その実現在には冒険者として師に仕える身……。しかし！ 故に弟子仲間伝手にてここへ呼ばれて一芸披露！」

たんつたんつ。

姿勢を整えたその背格好は舞台に立つ者にふさわしい整ったもので、手作りの道化衣装も気にならないほどしつかりとしている。

都会の大きな劇場に行かなければ見られないようなその堂々とした姿に圧倒され、元居た観客のみならずざわめきを聞いた通りすがりの民衆も心奪われた。

「さてさてよき盛り上がりにて一時失礼。彼ら彼女らメインの舞台はもう一瞬後！ ではまた場面切り替え幕間にてお会いいたしましょう。メインステージをお楽しみくださいませ！ ……ではではー！」

一瞬、それこそ本当に一瞬で誰にも気が付かれなかったものの、席を見渡した道化師から笑顔が消えていた。

それを誤魔化すようにぴよんと飛び跳ねるとリゴレーヌは二人に分裂してそれぞれ左右の袖へ姿を消す。

「……」

あのリゴレーヌから笑顔が消えたのに気が付いているのは、席に座っていたアイーダのみ。

ぎりりと軋む音がする程に杖を強く握りしめ震えていた。

.....

なんて気の利く、という冗談は通じないだろう。

手元のワインボトルのコルクが一瞬にして綺麗に吹き飛ばされるだけならそう言えた。

俺が中腰のまま動作を止めたのはそんな神速の剣技を披露してくれたメイド服を着た人物が、いつもの仏頂面なのを変えないまま仕込み杖の刃を振りぬいたまま止まっていたからだ。

昼を過ぎ結局今日は出かけず外のざわめきを聞きながらだらけ、日が傾き始めた頃に我が家を訪れたアイーダは一言も発する事無く刃をむき出しにして佇んでいる。

俺が一体何をしたという。

呼ばれていた劇に行っていないとはあるけれど今日行くとは言っていない。ニコルもそれは承知している。

「アイーダ？」

「.....」

高い金属のりんとした音が鳴り響き、刃は杖に戻る。

「心当たりはありませんか？」

「な——」

無い、と言い切る前に手の中でワインボトルが細切れになった。

昨日の猫といい、俺に禁酒をしろと天は言うのか？ .....という冗談もやはり通じないだろう。

アイーダが何か激昂する理由とすればリゴレーヌ関連。

リゴレーヌは昨日の段階で分裂する位しか別に変な所はなかったし、今日か。

今日あいつは確か劇の幕間で道化師として働いてたはず。何かやらかしたのか？

「あのような……」

ぷるぷると杖を持つ手が震えている。

「リゴレーヌから、あのような悲しみと怒りの入り交じった感情が出るとは……貴方のせいで……！」

「ちよちよちよ待て待て」

降伏。

まさか本気で斬りかかってくるとは思わないがロクに話も聞かず殺しに来た前科がある。

というか、悲しみと怒り？ あのだ化馬鹿が舞台に立てたのに？

ふと視界に紫の花が入る。アネモネという名前だが、これの持つメッセージがその答えだろうか。

誤魔化すように出た疑問を汲み取ったのか、アイーダはその中から一輪だけ手に取りゆつくりと匂いを嗅ぐ。

「あいつが朝置いてった花だ、分かるか？」

「この香りの花はアネモネ。色により意味は異なります」

「紫だ」

「私に色は分かりませんよ」

「すまん」

「冗談です」

花の匂いで少し気分が和らぎ余裕が出たのか冗談をくれたがあまり笑えないぞ。

まずその危ない杖から手を離してほしい。

「以前リゴレーヌに教えてもらった色それぞれの意味。紫は、貴方を信じて待つ」となります」

ああ、と納得してしまふ。

なんともぴったりの意味の花を置いて行ったんだあの道化師は。

「ご理解して頂けましたか？」

「存分に。あいつ、待ってたのか……」

「はい。ではお悔やみ申し——」

「待て待て待て」

「冗談です」

お前の居合いは冗談じゃ済まない。普通に死ぬぞ。やめてくれ。

「あいつが本気でそんな感情を出すのは意外だったが、分かったよ。明日もやるみたいだからそこで——」

「いえ、ですから冗談だと」

「は？」

リゴレーヌは普通だったのか？　とうかそんな冗談で俺は死を覚悟したのか？

「いえそこではなく。貴方が原因だと言った事です」

「んだよ……。って待て、じゃあなんでリゴレーヌは……」

「分かりません。ただ、あれほど機嫌の良かった彼女が一瞬にして憎悪をむき出しにしたのです。幸いにもすぐ抑えて誰にも気が付かれてはいませんが……」

手の震えは続く。

「あれは、あれほどとは、よほどの事でしょう。私には、耐えきれませんでした」

アイーダは、道化師の発したそれに恐怖していた。

先ほどのやり取りもアイーダなりに普段通りのふるまいをしようとしたり何とかして身に染みた恐怖を払拭したかったのだろう。小さく「申し訳ありません」と謝られれば責める気にもなれない。

しかし何が起こったか、この様子じゃ本人に聞くわけにもいかないな。

リゴレーヌが見ただけで負の感情を動かされるモノ？

全く想像が付かない。

「私は、リゴレーヌには笑顔でいて欲しいのです」



ねうねう語らいて

寒過ぎず、かといって生温くもない心地の良い風。

火照った顔を涼ませるには丁度良いが生憎と酒は飲んでいない。

だからと言ってわざわざ夜風に当たる為に飲むわけでもなく窓枠に腕を乗せて夜空を見上げた。

日が落ちても外は明るい。満点の星空とまんまるの月が照らしてくれている。

例年であれば旧知の仲であるギルマスやクラリスの父が顔を見せに来る程度とはいえ寄るものの、町の近くで魔物の群れが見つかりちよつとした騒ぎとなったりしているらしく今日はこれならしい。元より来なくても良いとは思っているが、今日に限っては来なくてよかったと思える。

窓の向こうの夜の闇。庭越しの塀の上に道化師は腰掛け少し大きめの楽器をゆつくりと鳴らしていた。

普段の騒がしさ慌ただしさとは反対にゆつたりとした子守唄のような旋律。

あれも確かにゴレーヌの故郷と仮定した国の伝統楽器だ。

弦を弾いて独特な音が鳴り、やがて道化師が口を開く。

「――鳥籠捨しアヒルの子、濁した後見ず飛んで去る」

一言一言に力の込められた、歌というより語りに近い物。

普段のあやふやとした喋りからは想像もつかない、地に足着いたと言える喋り。

「幼き我を遊ばせた、美しい庭園白山の、瓢箪池に蓮の池。庭師の誇りは雪椿」

ブレのない声が風に乗って耳に届く。

「……吾は我にあらざゆえ望郷の念は無し。親を去らぬ雛に父母を思い出させるものはあろうか？　そも故郷すら知らぬのだ」

段々と声のトーンが落ちて行き、その言葉に棘と憎しみが滲み出てきた。

被っている帽子は作り上げた当初の色合いに戻っており、普段は見

えていないここアガ国の紋章が浮かんでいる。

紋章を取り入れるというのはその国に忠誠を誓うと同じ。わざわざ一番目立つ所にそれを置くのだから、故郷に未練はないと言っているようなものだ。

「しかし吾も人の子。忘れたフリして生きれど過ぎ去りしを忘れ去られず。一片たりとも欠けることなく」

ぞわりと背中に悪寒が走る。

怒り、悲しみ、それらを内包した負の感情。そして確かな殺意。

アイーダの感じたものはこれに他ならないだろう。

リゴレーヌはあの場で何を見た？

「今更何をしに現れた！ 吾が平穩に暮らしておるといふに、何故現れる！」

感情の爆発。

あのリゴレーヌが、いつもにへらと笑いを絶やさないうりゴレーヌが、声を荒げて弦を握りしめ不協和音を鳴らした。

道化舞台の語り口調でも誤魔化せない程の感情が、憎悪となり身を包む。

「今日日になってよくおめおめ顔を出せたものだ！ 我に何をした！

我が何をした！」

——まさか、父親か？

小さく漏れた言葉に反応してキツと睨みつけたその顔からは道化の仮面が外れていた。

今のこれが素なのだろうが、とても人間らしいなどと感心している場合ではない。

俺の恐れる事、それはリゴレーヌの暴走だ。

百発百中すら可能なナイフ投げに始まり火吹きに瞬間移動、時を戻したり分身をしたり。

ともかく何にせよ未だ底の知れない能力を全て殺意の一点に乗せ全力で使い、勢いのまま父を抹殺しかねない。

冒険者として日々人間大の生物から命を奪っていれば攻撃へのためらいもなくなってしまうだろう。

若手の冒険者が酒場の乱闘で相手を殺してしまうなど珍しい事ではない。

「リゴレーヌ」

「言葉を恐れよ。吾は気が立っている」

警告通りだ。ここで下手な同情や父をかばう発言はまずい。

だが俺の言いたいことはそうではない。

「お前はリゴレーヌだろ？」

「うむ」

「親なんかいたのか？」

「おらぬ」

「だろ？」

知らない他人を見てどうして毛を荒立てるのか。つまり気にするな、そして忘れる……いいや知らないフリを続けろ。お前はリゴレーヌという個人だ。

そんな意味を汲み取った道化師は軋みを上げる楽器から手を離し、ふと息を吐いて落ち着いてくれたらしい。

「……ごめんなさい」

塀から降りて帽子を取ってから謝り頭を下げた。

いつもの客へ向ける挨拶ではなく、謝罪のもの。

今のリゴレーヌならこの言葉も理解できるだろう。

「早いところお前の家に帰れ。……分かるな」

「？ ……はいっー」

元氣よく答えて帽子を空に投げる。

それから跳ねて、満月を背に自身の影を帽子の中に消すとその帽子も風に吹かれて闇へ消えた。

窓を閉めてカーテンコールだとカーテンも閉める。いや、カーテンコールは幕が上がって舞台役者の挨拶だったか。

何にせよ、玄関が慌ただしく開く音がしてから続いてとたたたと廊下を走る音がするのを聞いて安堵した。

いつもの道化師リゴレーヌが帰って来たらしい。

振り向いたらカラフルな残像が眼下をすり抜けて突進をかまして

きた。

「御師様師様！　ただいま帰宅？　そう帰りまして！」

「うぐツ」

お、おま、おまえ、急に腹は、やめろ……？

「ふふ、ふふふふ、ふふふふふ。やはりは御師様故に、御師様なりて」  
何を言ってるのか知らんが腹が、ミゾが……。

「御師様！　明日の公演は見てくださりまするなりてぞや！」

「わ、分かったから離れる……」

「約束！」

んあ？

あ。しまった。

「にししし。では、明日に備えて御休みなりてー！」

慌ただしいやつだ。顔も見せずに部屋に戻りやがった。

——ま、泣いてたっぽいし許してやるか。

「一件落着、か？」

祭となれば隣国から見物に人が来ることも珍しくない。

向こうが気が付いたかは不明だが、恐らくは視察か何かでこの町を訪れていた所をたまたま発見してしまったのだろう。

魔王が復活してこれから魔物の活動が活発になるなんて話も上がれば、魔物の襲撃を受けた町というのは大事な資料となる。参考にして防衛へ役立てるために。

残りの数日、同じ場所で舞台に立つリゴレーヌが再び会ってしまうのかは不明だ。

俺は行くと約束してしまったのだし、もし接触してきた場合はうちの弟子が何かと言おう。

前に「こいつはリゴレーヌ」と言う決めていたのだし恐れることはない。

「そっぴや本名もあるのか？」

リゴレーヌが今の名前というのは知ってるが、それ以前は知らない。

仮に知らない名前を言われても素で知らないと返せるのだし好都

合  
か。

「アドリブ」

「御師様！」

「うっっ！」

ね、寝てたら急にリゴレーヌが腹に乗ってきた……。

朝からなんだよ……。

「おはようでした？…こけこっこー！ 御師様御寝坊許さん道化、故にて起床のお手伝い。お目覚めざめめ？」

「起きた、起きたから降りろお前、重い」

「む？ 軽やかさが足りぬと」

降りてはないがどういうわけか軽くなった。

とりあえずこのまま猫のように乗せとく訳にもいかないので布団ごとリゴレーヌをどけると、羽根のように軽くなっている道化師はそのまま壁に落ちていつてけらけら笑う。

まあなんだ、あいつにかかる重力だけおかしくなってるとかそんな感じだろうな。いつもの理不尽だ。

いつの間にか重力操作の能力も身に着けてるリゴレーヌは置いておき、窓を開けて薄暗い部屋に光を——まだ外も暗かったわ。

もうすぐ日の出ではあるけれど、今は料理の仕込みレベルの時間ではなからうか。

「のんののん。れーぬドーケサーカスに準備は多く。それは料理と同じく同じ？ そう！ 何ごとごとごと準備は大事、丸腰にて魔物へ挑むは愚者の事！」

「確かに準備もなしに出かける奴はいないな。だがな」

いくら何でも早過ぎではないか？

このまま二度寝もさせてくれなさそうで立ち上がり部屋を出ると、通常の重力へ戻ったりリゴレーヌが後ろを独特なリズムの足取りでふらふらとついてくる。

「ニコルもこの時寝ておられ！ 緊張足りなし舞台は直前なりて！」

「……昨日も叩き起こしたのか？」

「緊張感無く腑抜けのニコル！」

リゴレーヌのようなプロの道化師ではなくあいつは出し物として演劇をするだけの一般人だぞ。

「アマとプロを阻む壁無き、舞台に立つれば上下なく！ ゆえなぜ？ それは演技に立場は関係なし！」

だから朝早く起きて支度をしろと。

お前なりのこだわりとして受け取っておくが、それを他人に強制するのはよせ。

あるいはニコルは犠牲にしているから俺は寝かせてくれ。お前と違って若くないから疲れが残るんだぞ。

あと最近地味に腰痛も出てきたし休ませてくれ。

「ささき御師様席に着き、今日は門出の第一歩！ 過去と決別未来へ歩み、それはそれこそ東雲しのめあかつきれいめいき 暁黎明期！」

「なんの話だ？」

「カンブリア大爆発！ ……ではありませんでした？ オルドビス？ シルル？」

話を聞いてくれないのは知ってた。

促されるまま席に着くと、甲斐甲斐しくどこからか取り出したエプロンを装着させられる。

？  
見間違いでなければこれはアイーダの付けていた奴じゃないのか

反対の席に着いたりリゴレーヌも同じエプロンを身に着ける。ああ、増やしたんだろうな。

「観客皆様御師様含め、ちよつとやさつとじゃ驚かず。ネンマリマンネリ少し飽き？」

「まあ見慣れたというか。お前なら何したって納得するというか」

初期のような不安定さもなく安定してるし、芸も何したって「それもできたのか」で済むし。

リゴレーヌは自身の帽子を何も無いテーブルに乗せ、クローシユを取るようにどければ当たり前前のように出てくるのは朝食だ。

さりげなく帽子が巨大化していた事に驚かないのもそういうのに慣れた証拠だ。

「むむむう、ごはんを食べたら吾は孤児院へ。御師様はどうす?」  
「いや寝かせてくれよ……」

そして昼の鐘が鳴ったら起こしてくれ。

ここに孤児院は町のちようど反対側みたいな立ち位置でそこから離れてるとはいえ、その気になれば歩きでも一時間とかからず向かえる。

「楽しみあられや前日眠れずと言いませぬ?」

「子供じゃない」

「吾は準備ありてさらば! こねば脱出奇術にて!」

あの空間を通るのは嫌なので全力で起きよう。

約束なので遅刻はしない。

リゴレーヌの脱出奇術をただの移動魔法と認識して扱えば痛い目を見るし。

寄った孤児院に寄付をして、それからでも充分に時間は余っていた。

近くにある舞台の見える段差に腰かけて、途中の出店で買った軽食を食べているとどこからか見覚えのあるメイド服が歩いてくる。

声をかけると「おや」と小さく呟き、いつもは何かを斬るしか仕事をしてない杖でぺちぺちと地面を叩きながらこちらへやってきた。

「ありがとうございます。彼女が吹っ切れたと言えるのは貴方のお陰でしょう?」

「俺はただリゴレーヌと名前を呼んだだけだ」

「……そうなのですか?」

アイーダに詳しく説明するのも照れ臭いし適当に流す。向こうも興味本位でだけで詮索する性格ではないのか、それ以上はしつこく言うわけでもなく席に着いた。

声をかけなければ観客席まで歩いていただろうが、席についている客は思ったよりも多く、孤児院の演劇もそうだが登場する道化師を楽しみにしているとの声も聞こえた。



道化師リゴレーヌに人気が出るのはまあまあ分かるが、演劇もとは。

脚本を担当したニコルは当然素人だし用意できる小道具も限りがある。それなりにできれば上出来とは思っていただけに予想外だ。

「どんな内容だったんだ？」

「この町の昔話のようです。これ以上は言わない方が良いでしょう」

「ま、そうか」

実話ならニコルの昔話でもある。

ネタバレという訳ではないがあまり聞きすぎるのも良くないな。

開演まではまだもう少し時間があるものの、特に話題もないので沈黙が流れる。

しかし昨日はリゴレーヌの過去、今日は恐らくニコルの過去。

色々と続くのは今まで逃げてきたツケか？

ダメだな、思考にふける時間ができると気分が沈んできた。

「……話題が欲しいですか？」

「ああ、欲しいな」

ふとアイーダが呟いたその言葉に飛びつく。

酒も飲めないし誤魔化しが欲しかった。

「では丁度良い機会だと思いますので、リゴレーヌの能力についてお話ししましょう」

「それは……確かに気になるな」

ニコルや妻の使っていた魔法とは、シンプルに言うところ火や水と言った現象を魔力を使い発生させる物だ。

強弱扱いや火水雷の属性や幻覚等々、魔力を操るものは大抵魔法で括られる。

魔法を扱えるのかは生まれの血筋による物が多く、そしてあくまで魔法を使える才能だけで学んでいく必要があったり他の人と全く同じ魔法だったり。

特殊能力と呼ばれるものも魔法と同じく生まれの才能だが、こちらは血筋に関係なく本当に生まれた時の運で全てが決まる。

そしてその能力の内容も一定ではなく、魔法を大幅に上回る能力に

なる事もあれば雑魚過ぎて話にならないこともある。

そこでリゴレーヌの能力の話。

見るからに特殊能力に分類されるにも関わらず、後天的な習得の難しいというか不可能なその一部を教えられるらしい(まだニコルは習得していないが)のだからよくわからない。

本当にタネのある技術だから教えられるのか、魔法を補助にしたもので行っているのか、それとも全部特殊能力に頼りつつ人に伝授できるようなものなのか。

それが聞けるのなら聞いてみたい。全く予想が付かないので。

仮に瞬間移動や複製をそれぞれどちらかを一つだけ扱っていれば、そういう特殊能力なのかと納得はする。

だが実際はその二つだけでなく他にも時間も戻すし重力も操るし能力に統一性がない。

明らかにおかしい。

「その通りです。リゴレーヌは、おかしいのです」

「え、なんだその答えは」

「我々を見る誰かどこかの観客席へ向かって演じ続け、この世界全てを一つの舞台演技だと思いつけているのです」

「いつも通りじゃね?」

そうではありません。と一蹴された。

というか能力の説明にもなっていないし続きを頼む。

「私達のいるこの世界は一つの舞台壇上。我々は誰かの書き進める脚本をなぞる演者。リゴレーヌはその一人でありながら唯一その事を理解しているため、アドリブという形にて自ら台本を逸れる事ができるのです」

なんだそれは。

「申し訳ございません。貴方の過去を茶番だと言う気はありませんよ」

「いや意味が分からんし続けてくれ」

「では。と言っても、リゴレーヌがアドリブをしているとしか言いよ

うのない事なのですが」

それが答えなのか？

「この世界ぶたいを見ている観客が見て読んで確認し、ここで起こる出来事が確定となってしまう前であれば彼女はアドリブにて意図的に少し道筋を書き換える事ができます。例えば魔物に襲われて大怪我をしてしまうという出来事が気に入らなければ、観客に見られる前に「怪我をしなかった」とすることも」

「あー、えーつと、つまりなんだ？」

「シンプルにまとめますと現実の改変が近いですね」

は？

じゃあおかしくないか、じゃあ何であいつは一座が崩壊したのをそのままにしている？

「彼女は神様ではありません。すでに現実となり、前提となり、観客が周知し確定してしまっている出来事に関しての干渉はできません」

「制限があるって事か」

「はい。しかしまだ確定となっていないものであれば理論的には殆ど何でもできます」

丁度俺たちの横を黒猫を連れた獣人の子供が通った。

獣人の中には発声のできない者も多いと聞くが、あの子供は喋れるだろうか、それとも？

話しかけるまで確定していないその二つの選択肢どちらかをリゴレーヌは選ぶことができる。ということだろうか。

「そういう事になります」

「恐ろしいな」

「ええ、とても」

「なるほどなあ……」

「それと彼女は第四の壁と言えるそれを理解している為、その向こうにいる声を聞くこともできます。——こちらは、あまり私達に関係することではなさそうです」

リゴレーヌがたまに誰とも分からぬ「お客さん」を相手に期待に応えようとしていた事やどこからかおひねりを貰っていたのは、その

俺達を見ている観客から声をかけられたからってか？ 帽子を一晩で仕上げようとして力尽きていたが。

監視されてると思えばなんだか気持ち悪い。

気にしたところでその観客については正体が分からない……というか本当に実在するのかすら分からないので放っておくが、しかしこれならニコルとの模擬戦や今までの戦闘で一撃も攻撃を食らわないのも、道化師としての本番で失敗しないのも納得がいくな。

誰も認知していない所で失敗を隠してしまえば最高の道化師の出来上がりだ。

「また、観客が周知している事を覆せないという事は逆に観客の認知を利用する事も出来ます。『リゴレーヌならこれができる』となればリゴレーヌはそれを自身の技として扱えるのです」

「卑怯だな……」

丁度道化師による前座が始まった。

元気よく壇上へ飛び出したリゴレーヌがいつものものにへらとした笑顔で手を振り、軽やかに飛び回る。

特殊能力と、それを利用したタネを知ってしまえばあの演技もできて当たり前と納得してしまう。

「一つ言っておきますが、リゴレーヌは貴方の思っている程この能力を多用してはおりませんよ」

「そうなのか？」

「攻撃を見切る動体視力、思い通りに体を動かす身体能力。ジャグリングに宙返りナイフ投げ等々。あれらは全て練習によるものです」

「あれは自前なのか……」

確かに道化師に誇りをもってしているリゴレーヌなら誤魔化し騙しの卑怯な手を嫌いそうである。

最初は例のアドリブで能力を使い、それ以降は例の観客に『リゴレーヌはこの能力が扱える』と知られているので使い放題。ただし扱いはしつかり練習しておく。といった所か。

「アイーダはどうして能力を使っていないかとか分かるんだ？ 見分け方でもあるのか？」

「いいえ。何となく、使った場合は何か違和感を覚えるのです」

「感覚か……。俺が見分ける方法はないのか」

「もう分かると思いますよ。今この場で冒険者マックスはりゴレーヌの能力を知り、そして知ったという事実が確定したのですから」

## 非常識な出来事、 “偶像” にご感動を！

「では試してみましよう」

隣のアイーダがぽんと手を叩きながらそう提案した。

試す、というのは話の流れからしてリゴレーヌの能力の事だろう。現実の改変だのアドリブだの、あの道化師が割とやりたい放題な能力を持っているのは知れたしどういう風に変わるのかは興味がある。

興味はあるが、同時に身構える。

瞬間移動時の謎空間ですらニコルが発狂し俺も記憶がほぼ消えたというのに、それ以上を食らったら廃人になるんじゃないだろうか。

「向こうも終わりにするようですし」

じゃん、と効果音を鳴らして両手を広げたりリゴレーヌが拍手喝采を身に受けてとても良い表情をしている。

その顔に陰りはなく、やり遂げたという誇らしげで一杯だった。

「リゴレーヌ。少しあなたの能力を見せてくれませんか？」

この距離では流石に届かないだろうと思われた言葉はしつかりと聞こえていたらしく、一瞬だけ目線だけをこちらへ向けると恭しくお辞儀をする。

それからいつもの通り被っていた帽子を投げて、その中へ吸い込まれるように飛び込んで消えた。

帽子も風に流されて視界から消え、もう舞台上には誰もいなくなり終了だ。

さて、どこからリゴレーヌは現れる？

俺の視界の端か、あるいは近くに置いてある木箱の中からか？

それだといつもの瞬間移動と変わらないし別の手で来るか？

「その程度ではありませんよ」

アイーダが意味深に呟くが未だに道化師は現れない呟き、突如頭上から降って登場した。

すたっと綺麗な着地を決めて……待て、何か今おかしくなかったか？

「万有引力世界の定め、内的宇宙に道筋ありて。ふらふら漂ふリゴ

レーヌ！ の持つ裏設定。アイーダ姉ねえ知り申し？ 仕方なし！」  
「申し訳ありません。リゴレーヌの能力を知りたく、いつの日にか色々試しております」

「ではでは御師様話したりは……あー！ ふむう？ む。一人称！」  
相変わらず何を言ってるのか分からないが、今何をしたのか。

「それがリゴレーヌの能力ですよ」

「与えられし台本脚本無視するは道化演者キャラクターに反す故に、アドリブ最小無しに越したことなし。でもでもでも姉ねのお願いならば！」

「ありがとうございます。リゴレーヌが持つ力を悪用しないのは分かっていますよ」

「んふっふー。お褒めに頂き光栄」

いつものにへらとした顔でぽすんとアイーダの膝に乗った道化師は、足を投げ出して体重を預けじやれ付いている。

猫のように撫でられご機嫌なりゴレーヌはしばらくそのままになつていたが、ふと体を起こすと真顔でこちらを見つめてきた。

「なんだ？」

「御師様は、恐ろしき？」

なんの話だ？

「自覚とは啓蒙にあらず、全知とは良きものだけにあらず。知りうる事が笑顔に繋がるにはなく、暗き闇より目を背け、理想の所を見て終わる。舞台の美しさその後ろ張りぼて資材と廃材広場、舞台上がれぬ落ちこぼれもおらるるば壇上上がれてすぐ消える者ありける」

意味が分からなくアイーダを見るが向こうも何も言ってくれない。

それどころか、時が止まったかのように風も空気も変わらず、この世界でリゴレーヌと二人取り残されたかのような感覚にすら陥った。

まさか、本当に時間が止まっているのか？なんてありえないだろう。

……また何かがおかしい。何か、俺が自覚できたものが自覚できなくなっているというか、思考が変えられたというか。

リゴレーヌは相変わらず俺を見つめたまま動かない。

「全部、変わりますよ？ 思えば書けば変えられます。変えます。それせぬは、リゴレーヌの拘りなりて」

「……まさか、俺の認識を変えたのか？」

「ふ、ふふふ。訂正です修正です。誤字に脱字はお茶目にありて。けど、投稿前なら変えられますよ？ から、いつ何が起きたか分かりませんか？ それは、恐ろしい」

この喋りには覚えがある。

初めにリゴレーヌと会った頃や、俺が一座の滅んだ現場へ向かった後の心配になった時の、あのぎこちない喋り方だ。

精神が不安定な時はこのような喋り方となってしまうのだろう。

「御師様は、遠ざける？ これを知りて。力恐れるは人の常。羨ましく思いてヤキモキそれも」

おどけるように首を傾げたりリゴレーヌがそのままアイーダの膝から落ちて、糸の切れた人形のように地面へ転がった。

こいつの能力は恐ろしい。全てが茶番となるような、世界を馬鹿にしたようなもの。

「リゴレーヌになる前のお前の父親のようになってか？」

「この力を恐るるは同じです。よ？ 人は、未知と疑い怖くなる。しかしタネ明かし、未知への恐怖は既知への嫉妬へ」

「ありえんな」

能力の説明を兼ねて、能力を知る事の怖さを伝えたいんだろう。

俺が嫉妬に狂って追い出すなんて事はあり得ない。

いつの間にか現実が捻じ曲げられてるなんて知ったからといって、何か起きれば「お前がやったんだ」なんてことも言う気もない。

リゴレーヌは自分勝手に振舞うが、自分勝手に他人に害はなさない。振り回しはするが。

こいつが悪人ならその能力で幾らでも好きなようにできるし、そうしないのはどう動作しているのか分からない能力の制限以外にも理性による物。

凄いと思う心はあるにしろそこまでだ。

「ふむふむ。御師様独白くどくて長くてドロドロめんどい！」



「てめ、人が考えてやってるってのに」

地面を転がっていた道化師が赤黒い光に包まれると、遠くにある孤児院の舞台へ戻っていた。

「ままま、これより行われるは次回、ニコルの公演！ 時間もシリアスも長くてくどければ観客飽きるが話の流れるに仕方なし！」

「お前が原因だろ」

「吾の道化師舞い舞い好評お声を一身に受け、みな笑顔？ 吾は笑顔！ とうあ！」

またさつきと同じ赤黒い光で帰ってきた。その方が瞬間移動らしいしどこに出るか分かりやすいから今度からそれで移動してくれないだろうか。

「おや、リゴレーヌが消えました」

固まっていたアイーダが動いた。風も人々のざわめきも帰ってくる。

膝の上に乗っていた筈のリゴレーヌがいつの間にか頭の上に移動していれば不思議にも思うだろう。

俺も不思議に思う。なんで気が付かないんだ。重くないのか。

「ここですよ？ こちらです！」

道化師が力を抜いてとろけるようにアイーダの頭からずりりと垂れていく。

メイド服はあまり驚いていないようなのがシユールだ。

「アイーダ姉ねえ吾の力、分かりて？」

「ふあい」

無表情なアイーダの口に髪の毛が突っ込まれてえらい事になってる。

「一つ聞きたいのは、観客は何か申ししておりましたか？」

「ふむう？ お褒めの言葉大沢山！ 凄い意外と伏線ありきと言ってくださり！ 悔やまれるは姉ねの勝手なネタバレ……」

「それは申し訳ありません。つい」

つい、で最重要なりゴレーヌの秘密を話してしまうメイド服もメイド服だと思う。

こちらとしても未知の能力を知れたので満足だが。

「でもでもこちらへお声かけ、可愛いと？ 愛のある！ ……残念な  
るかな壁超えならず」

「なんだりゴレーヌ、お前告白でもされたのか？」

「気のせいです」

出たな素のレーヌ。その断り方は酷いぞ。

## ニコルの劇

ニコルの演劇はこの後すぐという言葉の通り、舞台上では孤児院の子供があたふたと駆け回り小道具や背景板の設置を進めている。

隣でぱたぱたと足を動かすリゴレーヌの方はというとそれを手伝う訳でもなく、俺が袋から出して身に着けた物を見て大げさにけらけらと笑っていた。

「ふひひひ、御師様なぜゆえ変な仮面？ 何と表現すべき？ ダサイ！ あはっ！」

「はしたないですよリゴレーヌ」

「んむふふふふ……くく……」

リゴレーヌにそう言われるの凄いいショックなんだが。普段の口調からして絶対言わなそうな単語だし。

とは言うが、指摘の通り身に着けているのはクソダサマスク。顔を隠せればいいとさつき適当な露店で買ったものだ。

理由は簡単。万が一ここで娘に見つかってしまったのは色々詰むかも知れないからな。

ベリテットと同じ孤児院なのが悪い。俺だってこんなマスク着けたくない。

「こつちの仮面がマスクレイ！ ど？」

リゴレーヌが新たなマスクを取り出すが、なんだそれ。

「パピヨンマスクはマスクレイ！ 舞踏会では見て見ぬふりするマスクレイ！」

クソダサマスクを剥がされぐいぐいとそのパピヨンマスクを顔面に押し付けられるが、目元しか覆わない物だし舞踏会でもないから相手側も困惑するだけだろう。

よく考えろ。久しぶりに偶然顔を合わせた親父が奇妙な事になってたらどう思うか。

元から低いだろう好感度がドン引きを経て他人扱いとすらなるだろう。

ベリテットよ、俺の事は忘れて好きに生きてくれ……。

「手遅れ遅れの御師様遅れ。そは遅れ？ 愚鈍なり！ 浅薄！」  
お前それすげえ失礼だからな？

「にー？」

小首を傾げて誤魔化すな。

ぱたぱたと足を動かす道化師の口元にアイーダがお菓子を持つていくと雛鳥のようにぱくりと食べた。

座る場所がないのは分かるが、ずっと人の膝に乗ってるのもどうなんでしょうなこいつは。

アイーダが気にしてないのならいいんだけど。

「平和ですねえ」

自分の口にお菓子を運びもそもそ食べながら平和を満喫していた。全く気にしてなかった。

「リゴレーヌ。ニコルは何の役なんだ？ 脚本を書いた云々は聞いたんだが」

「ふがふもふもがももも？ もがもが！」

「食べてからでいい……」

「ふもーむー」

仕方ない。アイーダに聞こう。

さっきは内容をぼかさされたが配役位なら教えてくれるだろう。

「アイーダ」

「……」

「アイーダ？」

「……………すー……」

「寝てんのか……平和過ぎんだろ……」

暗殺術を身に着けてるんじゃないやなかったのか？ このメイド服は。

軽く小突いてやりたい気持ちにもなるがよしておこう。腕を取られて折られたらたまったもんじゃない。

アイーダは初手で話も聞かずに殺しにかかったり模擬戦でガチ武器を使うようなやべーやつだ。下手に手を出さない方がいい。

膝に乗ってるリゴレーヌはこれよしとぐいぐい頭とか帽子を押し付けているが大丈夫だろうか。次の瞬間には真つ二つになつて

そう。

……リゴレーヌなら真つ二つになつてもそのまま分裂しそうだ。斬るたびにどんどん分裂して増えていく道化師。そしてそれぞれの個体が自由気ままに振舞うせいで收拾がつかなくなる。

地獄だな。

「ふむむんむふ？　ふむふふふ」

「まだ食つて……追加で食つてるし」

「んぐ。御師様食べる？　これ食べる？　ぽっぽー」

答える前に口へいつものお菓子をねじ込まれた。

「お前な」

「ニコルの準備が遅いが悪い！　本日今週予定であろうに劇を！」

「なんか手間取つてんじゃないのか。手伝つてやつたらどうだ？」

「他人の劇に踏み入るはリゴレーヌの美に反す。過剰な干渉せずして道化！」

「盛り上げとか客引きとかやつてたじゃないか」

「とは話が違ってよ？　道化師は道化を、舞台役者は劇を！　御師様には語り部を！」

語り部？　こいつの言う事は意味不明だしいいか。

意味不明というか、例の能力的に俺の知りえない事が必要だろうし。

「吾の舞台あらずんばでしやばり不要。舞台降りれば吾も観客」

「じゃあ今のお前は道化師じゃなくていち観客としてのリゴレーヌだな」

驚いたように目を見開いたりリゴレーヌがこつちを見る。

食べようとして啜っていたお菓子が落ちかけて、手で押さえてももと高速で咀嚼して飲み込んだ。

「よし」

被っていた帽子を寝たままのアイーダに被せた。

「うへーまちなげー」

……ん？

「つかあ、しよーじきあんまし話す事なしに？　ゆえ、ニコルんの劇始

まるまでの尺稼ぎ悩むやむやむー」

り、リゴレーヌ？

「あや？ 何見てんのー？ このギャルレーヌになんぞや不備ありてー？」

「おい、どうしたお前、頭大丈夫か？」

「は？ 喋っただけで疑われしは酷く思ふ。きれそう」

なんだろう。すげえうざい喋り方になった。

あれか？ 道化師じゃない一般人だって言ったからか？

それにしたって何だこれ。つかギャルレーヌってなんだ。また新しいレーヌか。

新しいレーヌとはって感じもするが。

「ニコルんまじ長くね？ 今日話す予定プロットなのなのー」

「だから準備に手間取ってるんだろって」

「もう尺なしよ。残りの文字数で話すとかまちありえなくね？」

「って俺に聞かれても知らんぞ」

「あーちゃんー、あーちゃんー」

それはアイーダの事か？ やばい、このリゴレーヌ……否、ギャルレーヌと接していると脳が溶けそう。

プロットだの尺だの文字数だの、たぶんまた能力云々だろうが次々に説明もなく言われたって分からん。

「……ん。どうかされましたか？」

「起きたー」

道化帽子をかぶったアイーダが目を伏せたまま目を覚ますと同時に、変に変を掛け合わせたギャルレーヌの喋りに気が付いたらしい。首を傾げてからふにふにと両手で元道化師現一般人(?)の顔を触り、頬を引き延ばし、傍らの残りのお菓子を食べさせ、

「特に変わりはないですね」

「いやいやいや、待てアイーダ。なんか色々おかしいだろ」

断言するな。俺がおかしいみたいだろ。

ほら、明らかにリゴレーヌの喋りというか態度がさ、おかしいんだって。

「ふむ」

「むふむふ？ 吾に謎とかねーんですけどお？ いつも正直喋られて  
おりますしー。隠し事はもうないない」

「な、おかしいだろ？」

「いつもと変わらないリゴレーヌでしょう」

「節穴か？」

「いやアイーダの場合は難聴か。」

「そこまで疑うなら試しましょう。ではリゴレーヌ。貴女の好きな食  
べ物は？」

「やわらかヨーグルト！」

「だそです」

「いや聞いたことねえよ。こいつの好みなんぞ。」

「飲めるくらいにやわつこいヨーグルトつとを飲んだことなし？ む  
ふふん、人生損してる」

「ヨーグルト一つで俺の人生否定されたんだけど」

「どうかさういうリゴレーヌが本人か偽物かって言うのを聞いて  
るんじゃないかってだな。」

「では第二問」

「おーい、聞いてるかー？ そういう話じゃないんだよ。」

「ギャルレーヌの喋り方について言ってるんだよ俺は。」

「どんとこいやばふどーん！」

「リゴレーヌの嫌いな動物は？」

「犬！」

「正解です」

「そして犬嫌いなんかお前。」

『何人も語ることなし』

「劇ー、劇ー」

元の口調に戻ったりゴレーヌがふんふんと鼻を鳴らしながら歌っていた。

舞台の準備はもう整い、残りは年少の子供達の衣装合わせ位なものらしい。袖というか後ろの建物からニコルがあたふたと走り回っているのが見える。ああも普通の恰好をしていれば流石に年相応の少女に……いやなんか男っぽいなやっぱ。

再び居眠りを開始したアイーダが足をぱたつかせるリゴレーヌに合わせて揺れ、長閑なものだ。

「ん」

長閑だと口にすれば平穩もすぐ崩れるのだろうか？

ご機嫌だったリゴレーヌの雰囲気が変わった。その原因は言わずと分かる。

「知り合いでも来たか？」

「いいえ」

縁も過去も切り捨て他人と割り切っても記憶が消えるわけではないし、一応人間であるリゴレーヌもすっぱり切り替えられるわけではない。

彼が、例の父親が現れたのだろう。

才能に嫉妬した、人気を奪われた、将来地位すら奪われるかもしれない……身勝手なそれだけで愛娘の人生を狂わせた、いいや愛娘というほど愛していたのかも怪しいクソ親父。

会ったこともないのに散々な言いようだと批判されようが、俺の評価はそれだ。

「……」

「どうしたりゴレーヌ」

「いいえ」

とはいいが、こちらがいくら「こいつはリゴレーヌ」としらを切っ



たところでじつくり顔を見られてしまえば隠し通せない。リゴレーヌの動揺もひどすぎる。

だったらもう顔も隠してしまうか。

クソダサマスクを被せ、パピヨンマスクを装備させ、ついでと悪戯心に眠っているアイーダからメイドカチューシャを奪ってつけて、出来上がったのはお祭りに浮かれた子供。

ゴチャつき過ぎて意味不明なシルエツトだが。

そんなこななをしていると、こつん、こつん、とやけに大きく聞こえる足音が耳に届いた。

雑多な町中とはいえ、まっすぐこちらへ向かってくる気配位分かる。

「祭りは楽しいか？」

「いいえ。……あ、いや、うむ……うん！」

俺は冒険者、安定のマックス。その名は安定して依頼を達成するとは別に、その気になればいかな事でも誤魔化せる面の厚さを出せる事にもある。

動揺せずにいつもの雰囲気安定して出し、つまりは交渉も得意だという事だ。

……最近ペースを乱しまくる連中だらけでそんな感じの欠片も出せてないが。

本来の俺はな、戦いだけじゃなくて悪だくみも得意だったんだよ。誰も信じてくれそうにないが手回しも得意だったんだよ。てかパーティーで誰もやってくれなかつたんだよそういう細かいの。

リゴレーヌのいうこの世界を見ているであろう観客とかに言い訳をしていると、目の前で男が立ち止まった。

コートを羽織った、顔は少しやつれているように見える中年だ。

服装は整えているがとても宮廷道化師のような服装ではない。地味な普通な感じだ。

道化師だからといって普段からそんな恰好をしているわけでもないのだろうけど。

「やあこんにちは」

「何か用か？」

「ええ、少し娘を探していまして」

にやりと嫌な事に最近よく見る笑い方と似た顔をしながら俺の隣を——仮装しているリゴレーヌを見た。

リゴレーヌの方はそれに気が付いているのかいないのか、ゆらゆらと揺れるのみで何も語ることはない。

今はそれでいい。俺が相手をしよう。

「大人を真似して自分の事を我と呼んでしまおうような変わった子でして。名前はヘンリエッタというのですがね？」

「悪いが聞いたことないな」

「そうですか」

残念ながら一人称を我としている少女も、そんな名前も聞いたことがない。

その気になれば出せる顔の厚さも出す必要がなさそうな位簡単な質問だ。

想定内ではあるが。

「知らないとは残念でした。ではこれにて失礼します」

俺の内面を見透かしたかのように気味悪く笑った男が背を向けて去っていく。

あまりにもあつさりと諦めて去ったので腹を疑ってしまうが、しかしあれがリゴレーヌの父親か。

まさかと思うがあいつもリゴレーヌと同じくこの世界が舞台云々とかして来ないだろうな。恐ろしい。

男の背中が見えなくなりもうこちらの会話も絶対に聞こえないであろそう程時間を開けて。

眠っていた筈のアイーダが杖を手にしてついに動いた。

「さて、消し去りますか」

「待て」

「私の技術は闇へ還す為にあります」

暗殺を回りくどく言うな。

相手はあくまでどっかの国王お仕えの宮廷道化師。つまりは名有

りのお偉いさん。

そして今日ここへ来たのは恐らく視察。

視察中に不審な死を遂げれば俺達というか、国際問題になりかねん。

「ご安心を。死体すら残さなければいいのでしょうか?」

聞いてたか? やめろと言ってるんだ。

「肉片全て粉微塵に斬り刻み血しぶきを上げる間もなく蒸発霧散させますので」

殺意が高すぎる。

「……お、おしさま……」

アイーダを宥めていたら押し黙っていたリゴレーヌが小さく呟いた。

色々盛り付けられているので小声になってよくわからないがどうした。

見ればぐらんぐらんと揺れている。

「これ……息苦しく思ふ……」

カチューシャをアイーダに返し、パピヨンマスクとクソダサ仮面を外してやる。

「ぶはっ。着け方間違い……空気無く……」

「それは、すまん」

急いで雑に付けたせいで酸欠気味らしい。

だが誤魔化せたんだしいいだろう。いつもの理不尽の仕返しだ。

「不安は絶えませんが、向こうから何もしなければこちらからすることもないでしょう」

「さっきまで殺しに行こうとしていたやつと言う事か? ……だが、まあそうだな」

自身と関係のない所で平穩に暮らしている娘をわざわざ探しに来たのは気になるがな。

似た姿を見かけて思うところあって探したか、あるいは何の目的があったか。

どこからか取り出した水を飲むリゴレーヌを見ると、視線に気が付

いたのかこちらを見上げた。

大人の事情に子供を巻き込むなど説教垂れてやりたいが、俺も娘をほっぽった立場上言える口でもない。

誤魔化すようにでかい帽子越しに雑に頭を撫でる。重心が不安定な帽子がぐらぐらと振動した。

「吾我はここにありても吾のみここにいて、憐れなるかな会われなし。心情不明の信条不明、かの者またもや手出しの恐れ」

「……また来るってか？」

「この町巻き込むならば吾も容赦せぬ。アイーダ姉ねは手出し不要」

「そうですか？」

あ、これ本気で消し去るやつか。

リゴレーヌが本気で戦うところは見てみたいが、絶対に思ってるようなことにならない。

そしてアイーダも止められなければやはり殺しに向かっていたかもしれない。

何にせよ町を巻き込むことにならなければいいがな。

「つて言うと、なんか起こりそうだな……」

目先の舞台上には孤児院の子供たちが並ぶ。

ようやく始まりらしい。

「……遅れてる」

隣のリゴレーヌが小さく呟いた。

『美しい愛らしい娘よ』

「……んにゅー。遅れ止まらずなぞ3分」

「ほらリゴレーヌ。始まるから静かにしろ」

隣でよくわからない事を言いながら揺れているリゴレーヌを宥めていると開始の挨拶も終わり、舞台脇で司会の子供が手元の台本を読み上げ始める。

——800年前に魔王を封印した勇者はその知恵と力をもって全土地域の復興に努め、その功績から各都市から推薦され大陸を統べる王の座に就きエチゴという大国を築きました。

しかし勇者の栄光の時代から数百年が経ち、勇者亡き後の世界は段々と混沌に包まれていきます。

平和の時代は平和を築いた者でなくてはなかなか長続きしません。やがて都市間での小規模なぶつかり合いが起き、段々と激しさを増し、内戦へと発展。

エチゴ国は分裂し、都市は独立して国家となり、そして今私達のいるアガの国が生まれました。

ここササカミの町は広い魔の森に隣接しており、かつては今より冒険者も多く所属しその中にSランクに匹敵すると謡われる4人の冒険者がいました。

進行に合わせ典型的な冒険者の恰好をした青年が袖から現れて舞台へ上がる。

——ひとりは、今はギルドでマスターをしている人物。

剣と鎧を身に纏ったオーソドックスないかにも剣士と言う風な恰好だ。

——ひとりは、今は鍛冶師をしている人物。

ハリボテのハンマーを持った、背の低いいかにもドワーフと聞いてイメージするタイプの容姿をした子供が出る。

——ひとりは、今も冒険者を続けている人物。

最初同じく剣士という風だが、盾を装備しておりどちらかというところ守備に重みを置いたタイプだ。

というよりも俺だろう。

過去のササカミ、ニコルが題材にする4人の冒険者といえば俺のいたパーティーしかない。

最後に魔法使いの女が出れば確定だ。

——そして最後は、冒険者を続けている人物の妻であり魔法使い。

やはり魔法使いだ。そして、唯一「現在」に触れていない。

「あいつ……い！」

袖から現れた姿を見て、思わず声に出し立ち上がってしまった。

横に座るリゴレーヌがちよいちよいと俺の服を引っ張りぐいぐいと座れと静かに諭しているが、そんな場合じゃない。

見覚えのあるローブ。

見覚えのある帽子。

見覚えのある杖。

そして、面影のある顔。

「ニコル……い！」

舞台上上がった魔法使いの恰好をしたニコルは、俺の妻の、ニコルの恰好をしたニコルが身に纏っているのは、見間違いないかつてニコルが身に着けていた物だ。

ぐらりと視界が揺れる感触に襲われ、ふらついた拍子にリゴレーヌに座らされる。

あの姿を忘れる訳がない。

あの日、あの時、俺が殺したも同然のニコルが、そこにいる。

似ていなければいいのに、帽子の影から覗く横顔はかつて連れ添ったニコルそのものだ。

偶然似ているにしては嫌な偶然だ。名前と言いもはや必然ではなからうか。

確かにベリテットを孤児院へ預けた際、母の形見くらいは残してやろうと装備一式を渡した覚えはある。

消息不明な訳ではない品だし目にする事はできるが、それをなぜニコルが身に纏っている？

そう易々と他人へ貸すなどしないだろう。何なら自身でも着る事ができるか怪しい。

まさかと思うが、俺だけでなく妻の事も見限ったのか？

ベリテットがそんなと肩が落ちる。……劇の続きを見よう。

何か意味があるのかもしれない。ベリテットが別の役割……それこそニコルの娘役として出てくるのかも知れない。

……それはそれで脚本ニコルがベリテットからどう衣装を受け取ったというのも疑問に……。

隣のリゴレーヌが大きく頷いた。頭の帽子も大きく揺れる。

——冒険者四人は町を中心にあちらこちらへ駆け巡り、発展途中の田舎町だったササカミの発展に大きく貢献しました。

それから舞台は事故も失敗もなく順調に進み、冒険者の恰好をした子供達とニコルは盗賊役や着ぐるみの魔物と戦い蹴散らしていく。

意外なのが手作りのハリボテハンマーを持ったドワーフ役は仕方ないとして、ニコルを含む他三人の動きがそこそこ良い。

見た顔ではないが誰かの弟子に取られているのだろうか？

「やーっ！」

ニコルが杖を掲げながらわざとらしく掛け声を上げ魔法を発動させる。

舞台袖で待機していた年少の子供達が籠一杯の花弁を掴んで投げ、それらが観客席の頭上で発動した風魔法に巻き込まれてひらひらと舞った。

観客席では感心する声が聞こえ、年少組は見慣れない光景に喜んでいる。

魔法の素質があるとは聞いていたがこんなことができたのか。よほど練習したのだろう。

ニコルの杖を使っている事はあまり無視できることではないがひとまず置いておき、素直に拍手すると俺に続いたのかりゴレーヌも大げさに手を叩き、それが他の観客へ伝播していき大盛り上がりとなった。

劇は順調に進み、ようやくあの事件——この町で起きた惨劇、今日の鎮魂祭の元となったあのスタンピードの話に移る。

魔の森の奥深くで大繁殖した魔物の一団が何かの拍子に暴れ、そのままの勢いでこの町へ侵攻した事件だ。

魔物にとって町も森も地形の一つにしか過ぎず、たまたま偶然駆け出した先にこの町があっただけの事。

しかし例えいかに弱い魔物が相手だろうと、数の暴力となれば人間にとつては充分脅威となる。

年長組が身長を生かして魔物役をやり、泣きながら逃げる年少組を追いかけてまわす。

だいぶ迫力は劣るがああ当時の雰囲気は思い出される状況だ。

孤児院の年長となれば当時に親を失いここへ来た者も、それでなくとも覚えている者もいるだろう。誰も不真面目にやらず、進行者も忘れてはいけないと念入りに唱えている。

4人の冒険者の動向は俺もはつきり覚えている通りだ。

きつとクラリス経由やギルマスに直接取材する等してなるべく当時の再現をとしたのでろう。



堅牢な石造りの教会を避難所としてニコルを防衛に配置。俺達前衛組で逃げ遅れた人の救助を行っていた。

切った張ったの前線組とは違い、どこから攻撃が来るかわからない混戦で魔法使いは危険が大きい。そう思って、指示を出したのは間違いない。俺。

それ故に、ニコルは死んだ。

何往復かをしてその時に、その時にニコルが疲れている事に気が付いていけば。

母を呼ぶベリテットの叫び声でようやく事態に気が付き、駆け付けた時にはもう遅かった。

……あの時に気が付いていけば、あるいは最初から誰かを配置していれば。

人命救助で人を死なせておいて、何が安定のマックスだ。そも避難所を落とされれば終わりだというのに、何故手薄にしたのか。

司会の読み上げがニコルの死を告げた。

倒れ伏すニコルとベリテット役の子供。本物のベリテットは……どこにもいない。

「さあよく見て。あの時、あの場所には誰がいて、何を言い残したのか。」

本当は何を想われ、何が伝わらなかったのか。

“——では真実を見るのだ”

無意識に作っていた握りこぶしにそつとりゴレーヌが手を乗せ、いつものおどけ口調の一切ない淡々とした声で呟いた。

まるでその台詞すらも劇の一幕と思えるほどはつきりと耳に届く。気が付けば周囲の騒めきは収まり、舞台上での物音だけが場を支配していた。

それが劇に見入った客を圧倒させて作られたものなのか、あるいはリゴレーヌが雰囲気作りを手伝ったのかは分からない。ただ、そこで

起こっている事には違いはない。

倒れ、帽子の脱げたニコルがベリテット役の子供を撫で眩く。

「〃今回は、たまたま運がなかっただけ〃」

違う。俺の考えが甘かったただけだ。

「〃マックスの剣はちゃんと人を守るよって、伝えてくれるかな。あの人ってバカだからさ、こんな助けても思い詰めて剣を置くと思うし〃」

子供達と教会を背景にして、幾年越しに伝わったその遺言が胸を締め付ける。

ベリテットしか聞いていないはずの、俺に伝わることのなかった遺言。言葉のニュアンスも何もかも全てニコルがそのまま話したように感じられた。

そこに嘘は微塵も感じられず、リゴレーヌの言う通りこれが真実なのだろう。

暗幕が降りて舞台が覆い隠された。

俺の剣が、人を守るに値する？ 妻すら守れなかったのに？

幕が上がり、そこに立っていたのはニコル一人のみだ。

妻のニコルじゃない。ニコルと似た顔をした、ニコルの恰好をしたニコルだ。

「冒険者マックスは、それからというものの人を救えなかったと悔やみ、石を投げられるだろうと思いい人目を恐れ、娘のベリテットすら遠ざけこの孤児院へ預けました。娘は妻を救えなかった自身を恨んでいるだろうと」

視線は真つ直ぐに観客席にいる俺へ伸びている。

言いたいことははっきり聞こう。言い訳はない。

「ここまで来たら逃げず最後まで聞こう。」

「誰も、あなたを恨んでなんかいません！」

そうか。

じゃあベリテットはどうしたと無然とした態度でニコルに顔を向けると、向こうはうつむき帽子の鏝で顔が隠れた。

意を決したようにローブを掴み、脱ぎ捨てる。

「ボクは……いや、わたしは！」

その中から現れたのは、時折見る剣士ニコルの恰好だ。

最初に会って弟子にしてくれと言った時に身に着けていたあの姿。

唯一違うのは首から下げたアクセサリーだ。

それは、そのアクセサリーは、妻が最期に娘へ渡していたもの。

もう言わずとも分かる。

ニコル。お前は、お前の本当の名前は――

「わたしはベリテット！」

冒険者マックスに憧れるただの子供、ニコルはもういない。

そこにいるのは、俺の娘のベリテットだ。

「これが全てです、父さん！」

## ひと段落

舞台へ続く花道のように客が避け、俺とニコル……いや、ベリテツトの間には誰もなくなつた。

リゴレーヌがその脇で恭しく頭を下げて、こちらへどうぞと舞台を手のひらを向ける。

最初からこれを狙つて俺に見に来て欲しいと言つていたのか。

そして素人の劇だというのに客が多かつたのも、まさかこの瞬間に立ち会いたかつたのか。

野次馬……にしては、やけに顔見知りが多い。そして拍手をしている。

「——おつかれさまでした」

促されるまま壇上へ立った俺がその言葉に、なんて返したのかは正直よく覚えていない。

殆ど気が抜けていたというか、呆然していたというか……。

なんにせよ肩の荷が降りたというには違いない。

たった一言、そういつて労つてくれたそれだけで、救われたというのなら俺も単純な男だ。

「んふふふふ、んうー。さてのらりてやたててのさささー！

いえす！ そう！ 花道おんすてーじー！」

相変わらず意味不明な事を叫びながら、庭ではリゴレーヌがナイフを投げてジャグリングをしつつ途中途中で果物を投げて空中で切つていく。

日も暮れて夜。

ニコルもといベリテツトは孤児院の打ち上げに参加せず、そのままの足で俺の家までついて来た。

今日の朝まで赤の他人だったというのに、一瞬で身内になつてしま

うとは。

孤児院での生活も悪くないというか手伝いは引き続きしたいとの事で、引越したいとまでは言わなかった。もし仮にいつでにこちらへ来るとなったとしても、残念ながらこの家は妻と暮らしていた頃とは別の家だし子供部屋は用意していない。リゴレーヌの使ってる部屋は元々物置にしていたのを無理やりどけて作ったものだし。

「前の家はどうしたんですか？　ボク……わたしの実家」

「売ってはないが、最近あまり手入れもできてないからなあ」

リゴレーヌが来てから掃除にも行けていない。

そろそろ換気程度はしないとな。

「御師様独楽の舞倒れ、これにて一件落着道化の終わりの終わり。吾を拾って始まりし物語これにて終わる！　とはまた新たな始まりにてまりまり！」

どこからか降り注ぐ光に照らされながら庭で道化師が舞い踊る。

最初からリゴレーヌがここまでの和解を狙っていたのかは知らないが、道化師らしい仲介だったと思う。

「……俺の所に弟子として来ようとした時、どうしてニコルと名乗ってたんだ？」

今更ながら聞くと、照れながら教えてくれた。

「今の名前、ベリテット・ニコルってなってるんです。でも最初からベリテットって言ったらびっくりさせちゃうから、気を見計らってネタバラし……ってする予定だったんですけど」

そういつて庭を見る。

視線に気が付いたらリゴレーヌは手を振りながら投げていた物を帽子に消して宙返りを繰り返し、ふと俺達の視線から消えると背後に瞬間移動してベリテットに乗った。

この道化師がいなければこんな回りくどい事もせず、もう少しスムーズに済んだだろうに。

リゴレーヌは肩車をされながらベリテットの短い髪をもさもさと乱暴に撫で、気が済んだのか顎を乗せた。色々とリゴレーヌの方が大きいのでベリテットも重いだろうに、鍛えられてるのか耐えてる。

「その実その時申し訳なく？ いえはやその時気が付かず！」

「手伝ってくれたから、いいですけどお」

「ほむむふふ」

「ちよ、くすぐったいですって、てか、重い……！」

色々言いたいことはあるがもういいか。

妻を守れず俺を恨んでいた……のは勝手な妄想で、実際の娘は恨みどころか父の剣を継ぎたいとまで言ってくれているのだ。

いつまでも腐ってられない。

「ふつつふー。ニコニコベリテテかわいい、と、お声あり！」

「なんですかそれえ！」

いい加減降りてやれ。首根っこを持って肩から降ろす。

「にしてもご機嫌だなこの道化師様は」

「元の時間を取り戻し、故にてのたたたらった！」

「たらたった？」

「お前の舞台の準備が遅いって少し不機嫌だったんだよ」

「ああー」

「ではなく！ なぜか時間が遅くなり！」

だから舞台の準備がだろ？

「ののの！」

わけわからん。

リゴレーヌがわけわからんのは今更だが。

「ベリテットはこれからどうするんだ？」

「どうするって」

「今のままじゃ弟子でも何でもない」

「あっ」

冒険者マックスの背中を追う理由も分かったし、隠してた秘密も分かった。

弟子入りを拒む理由もない。

「リゴレーヌさんからそこを奪う訳にもいきませんよ」

「剣はどうする」

「えと、弟子ではなく子として同行をさせてもらって……」

「やっぱりちやつかりしてんなお前」

まあいい。

「とりあえず飯にするか」

「ですな」

いつの間にか俺の首に手を回して背中にぶら下がってる道化師はさておき居間へ戻ると、いつの間にか誰かが食事を用意してくれていた。

充分に豪華な品々。誰か、と聞くよりテーブルの上に乗ったままの帽子と皿に盛られた果物がその答えだが。

ずっと庭で踊っていたと思ったのにカットした果物だけでなく料理まで用意できるとは器用なやつだ。

さてはまた分身したか。

「そーいやリゴレーヌの分身つてあれ原理も何もないよな。増えてるよなやつぱ」

「でも、片方は幻影というか触れませんでしたよ？」

「試したのか」

「気になって」

「ふむう？」

背中にぶら下がったままのリゴレーヌを肩越しに触ると少し癖のある柔らかい髪に触れた。

これは本物か。

「偽物は触ると霧みたいになるんですよ。高密度の霧に色を付けた、みたいな」

「……魔法だと思うか？」

「恐らく」

正直な話、リゴレーヌの能力と魔法の分け目が分からない。あと技術も。

行き過ぎた技術は魔法ともいわれ、それも誉め言葉だとはかつて本人が言っていた事だが、やっぱりよくわからん。

料理は……本物だな。

いつ材料とかも合わせて用意したんだか。

もしくは庭にいたりリゴレーヌ自体がすでに偽物だったか。席について全員で手を合わせていただく。

普通に「おいしい」と言える味だが高んだかりリゴレーヌ相手だと負けた気になって言いたくない。子供か。

「マックスさんはこれからどうするですか？」

「どうするって？」

「こう、昔みたいに大冒険、とか」

もう若くない。そんな事できる歳でもない。

大冒険は若者の特権だ。そしてそれを見送るのはおっさんの特権。ベリテットもいつかこの町だけでなく、見聞を広げるとかだけできなくんやかんやの理由で外へ行くことにもなるだろう。

そうした時に困らないようにするのが今の仕事だ。

「そっか。そしたらしばらく一緒にですね」

「そうなるな」

「リゴレーヌさんは？」

「んぬなちゆるにりい？」

リゴレーヌに関しては……何がしたいのかよくわからん。そもそも拾った理由もそのままにしておけなかっただけだし。

一応俺の弟子となるが、弟子は成長すれば師から離れるもの。リゴレーヌは俺から離れたらどこへ行くのだろう。

ベリテットにふらふらとついていくか、あるいはアイーダの元へ行くか。

なんなら新たに一座の立ち上げでもするだろうか？

「この物語が終わりし時の話を申す？」

「そのあとはどうすんだ？」

「どうしましょう？　しまししょうど？」

あまり考えてないらしい。こいつはそういう奴だった。

一家（と道化師一名）の団欒と相成っていたところ、夜中にも関わらず玄関が乱暴に叩かれた。

この力加減の分からない叩き方をするのはギルマスしかいない。重いし痛い腰を上げて玄関へ向かうと、少し焦った様子のギルマス



がいた。

「何かあったのか？」

「中で話そう」

ギルマス自身が走ってくるなんてよほどだ。

居間ではなく俺の部屋に通す。

「で、どうした」

「先日森の中で見つかった魔物の群れ、それが綺麗に消えた」

「何？」

理由もなく魔物が消える訳がない。

移動したではなく消えた、というのは異常だ。

「ああ。移動ではなく消滅の消えた、だ。そしてもう一つ嫌な話がある」

「嫌な話？」

「現地の調査中、痕跡を探していたらこの町へ宛てた手紙が見つかった。そしてそこには、ここに住む我が娘ヘンリエッタを渡せば良い」と書かれていたんだが……」

意味が分からない、とは言わなかった。

「この町にはヘンリエッタという名前の人物は存在しない。だが一人、俺はそうじゃないかと疑える人物がいる」

旅の一座に所属していて、その名簿から戸籍を作ったりゴレーヌ。

しかしその名前は偽名でありどこの国にもその名の籍はない。

国へ申請を出す際に登録に一役噛んでいるギルマスも、どこにもリゴレーヌという名が見つからずそれが偽名であることは勘付いているだろう。

消去法的にヘンリエッタがリゴレーヌであることは察せられる。

ギルマスが深刻な顔をしてわざわざリゴレーヌじゃないのかと聞くのは分かる。

大量の魔物を操れる相手が、娘を渡せと脅しつけているのだ。

「どうなんだ？」

「今日の昼、ヘンリエッタという子を探している男には会った」

「ぼかしたな」

リゴレーヌⅡヘンリエッタ、は推察でしかない。誰も同一人物だとははつきり言っていないのだから。

「それで、その男は？」

「残念ながら俺も手が読めん。娘を殺すことに執着してる事は確かだが、もしかするとその目的一つの為なら周囲を顧みないかも知れんな」

この時期に町へ来て歴史を知らないわけがない。これは脅しだ。  
スタンピートを再び起こすぞと。

## 作戦会議

いつ攻めてくるかも分からない相手を前に止まっている暇はない。早速町の地図を広げて作戦会議だ。

「……相手が嫌味な奴なら、まず脅してくるだろうな」

「もう十分脅してらるだろうて」

「魔物を操れるという証明と、町へ攻め込むという意味表示」

どう来るのは分からないが一つ言えるのは、恐らく小突いて来るという事。

だがだからと言って防衛陣を作ろうと回れば、交渉の余地なしとして町を滅ぼしにかかってこられる可能性もある。

町に被害が出ないための最善としてはヘンリエッタを突き出す他ないのが腹立たい。

「しかし件のヘンリエッタさんは行方不明、と」

「きついなあ」

疑問なのは、あの男はそんな立ち回りをして大丈夫なのかという事。

娘に嫉妬して国を追い出しただけに留まらず、わざわざ探し追ってくる必要があるか？

自身の地位が大事ならばそこまで執着する必要もない、あつたにしても自分から動く必要はあつただろうか。

いや、相手の考察はどうでもいい。今は、この町が優先だ。

「かしらかしら、ぐっ存じかしらっ？」

どうするかと思案していると部屋の扉が開き、隙間から覗く光が二つの三角と長い足の影を作った。

誰かと言うまでもない。リゴレーヌだ。

こつちが何の話をしてるかも分かつてるだろうし入れと促す。

わざわざ扉を開けた事には感動するが、それどころじゃない。

リゴレーヌの一番嫌いな人物の引き起こす騒動関連となれば、それもこの町を巻き込むのであれば容赦しないと云っていた。何をしてくすか分からない。

できる事なら例の現実改変で町に何も起きなかったとしてくれるのか……。

「御師様。聞いた、ですよ？　は、もしか、吾我ら一座の一枚噛み噛み」

「お前の一座……壊滅したあの？」

「多分ですよ。しですですよ。しですですよ！」

リゴレーヌの一座が崩壊したのは確かに何者かに操られた魔物の集団だ。

それを操っていたのがあの男ならば、その時からすでにリゴレーヌを狙っていたのか。

なんとも執念深いというか……。

「には考察ですよ？　の、お声！　お客様！　吾は実際詳細どうだか知りません」

例の見えないお客さんから教えてもらったのか。

「どうするんだマックス。お相手は相当頭にキてるらしい。そのヘンリエッタは何をしでかしたんだ？」

「俺が知るかよ。……ともかく、やりたくはないがその男を抹殺する必要も出そうだな」

「おっと不穏な」

「運のいい事にこっちにはそういう裏方ごと到手慣れてるやつが……」

……。

……。

……あれ、そういえばアイーダはどこに行った？

ニコルの舞台が始まる前、最初に男と会った直後くらいまではいたと思うが、それを最後に見てないぞ？

せっかく暗殺者の出だと思えるような言動をしてるし頼もうかと思っただのに。

「描写なければ姿なきに代わりなくですよ？　アイーダ姉ねは不確定存在なりて。てりな！」

「私達の存在とは文字によって成り立ち全て左右されます。……おや、見えておりますか？」

「故にゆえゆえ。ふ、ふふふ……。んゆ？ 謎の改行？」

「リゴレーヌも知らないか」

となればどこへ行つたんだ？

もうすでに事を済ませてる、とは考えにくい。だったら戻ってくるはずだ。

「ま、ともかくいないなら仕方ないか」

「結局どうするんだ？」

「打つ手なし」

「おいおい」

だって、なあ？

当時戦つてた一座のメンバーがどれほどの強さは結局はつきりしないが、相手がリゴレーヌを狙つたのなら有象無象の雑兵だらけではないだろう。

というか雑音だらけで分が悪かつたとはいえアイーダすら抵抗せず逃げた相手だ。

そんなの相手に後手に回つた時点で町へ被害を出さないなんてことは難しい。

ならば。

「リゴレーヌを差し出すか」

「この嬢ちゃんを？」

「……」

「あ、すまん。お前を見捨てるって訳じゃないぞ？」

「いえいえ。えいえい。えいえい」

不敵な笑みを浮かべてゆらゆら揺れているが、大丈夫だろうか。

主に何をしでかすのか分からないという意味で。

「このリゴレーヌの全霊を持って好きに道化舞台舞い踊ロンドでしなれば、ふふ、ふふふ」

「……嬢ちゃん、平気か？」

「やばいかもな」

正直、この道化師が全力で事に当たって相手を容赦なく打ち碎けるのならそれでもいい。

だいたいおとりにする作戦も、相手とリゴレーヌを会わせただけでそこからどうするのかはまだ考えてないし、地味に最大戦力である道化師が戦ってくれるで済むのならと考えている。

「ボクは反対です！」

「うおっ、いたのかお前」

あと一人称戻したのか。

いつの間にか部屋に入ってきていたベリテットの語る内容によると、リゴレーヌ探しの男は以前から孤児院の周辺で目撃されていた不審者らしい。

周辺地形は把握済みとこちらに伝える意図を持ち、子供達を人質に抵抗するなど言っているのであれば……と、そこまで一気に話して息をついて席に座る。

俺よりも付き合いの長い家族達を人質に取られればこうも焦るだろう。リゴレーヌに言つて水を用意させてやるが、しかし状況はより悪くなったな。

リゴレーヌとて周囲を顧みない訳ではない。知った事かと人質を無視する訳がないだろう。

「ここまで色々手が回されてる上、時間の指定も無いのは怖いな。そこまで入念なんだ。手紙を持ったギルマスがここに走つた事すら把握されてるかもな」

「迂闊だったか」

「いや、早かれ遅かれだ」

しかしどうするか。

リゴレーヌを向かわせる作戦は、リゴレーヌの危険が最大級に大きくなる事が確定した。なんせ無力化されるのだから。

「……」

「……」

「……ふん。ゆいー」

「……」

「さて、どう動きますか？」

沈黙。

せめて最初に相手が孤児院を狙ってくるというのが分かった所で  
防ぎようも……?」

「……相手が孤児院に最初のターゲットを絞っているのなら、そうか。  
リゴレーヌ」

「いはな?」

「孤児院の子供達は全員覚えているか?」

「一度見聞きし物事忘れず。全員言えます言ってみましょう? 樹付  
キエルフのエンリカに——」

よし。おーけーおーけー。全員読み上げ始めたらキリがないから  
言わなくていいぞ。

「ベリテット。リゴレーヌに部屋割りを教えてやってくれ」

「いいですけど、何をするんですか?」

「マジックショー」

「はい?」

ギルマスはスタンピートに備えた緊急招集用のサインがあるだろ  
う。あれですぐ孤児院に人が集まれるようにしてくれ。

ベリテットは孤児院で待機。

「何を……?」

「何って、リゴレーヌを向かわせて俺と一緒にショーをするだけさ」

「お前さんもその嬢ちゃんに毒されたか? ショーだなんて」

「ちよ、ちよっと待ってくださいよ!」

「マックス。それでいいなら俺は先に戻って準備してるぞ」

「おう。頼んだぞ」

「あの、ねえ! ちよっ!」

ええい。うるさいぞベリテット。

「見捨てるって言うんですか!?!」

「いい機会だろ。改築とか」

「そんな!」

立ち上がって掴みかかろうとした手が留まって、ふらりと倒れそう  
になった。

それをすかさずリゴレーヌがバレエのように抱き留める。

「冗談だ冗談。何も子供らを犠牲にするって訳じゃない。ちゃんと脱出してもらうさ」

「……脱出って、今からじゃ間に合いっこないですよ……」

「だろうな」

「父さん！」

「まあまあ聞け」

避難経路も限られる密室からの脱出なんて、普通は不可能だろう。

まして周囲は危険な魔物に取り囲まれているんだ。防衛に戦っている人たちだって、時間稼ぎが良い所で完全に防ぎきれるとは思わない。

つまり絶対絶命のピンチ。ここから全員生還するなんて誰も思えない。

だが、だからこそそれをひっくり返せば盛り上がる。

この場で盛り上げるためならば幾らでも無茶苦茶をするのは？

「……あつ」

ようやく悟ってくれたらしい。

なら俺らもすぐに動くべきだ。

「リゴレーヌ。大変だと思うが」

「いえいえいえいえ。吾が全霊を持って事に当たろう。なぜならこれは終幕最後の大事な仕事」

「そろそろ私も待機しますか」

「道化舞台第一部。その終幕事件。……ふふ、ふふふふ……折角ならればド派手に回って舞って……」

今回やることは単純で、リゴレーヌの大得意な脱出奇術をやってもらうだけ。

一番危険なのは何も知らない孤児院防衛隊だが、そこは頑張ってもらうしかない。



## 月明りの下

のんびりとしている時間はありません。

予定合わせに預かった砂時計はその大きさに反してゆっくりと、しかし確実に落ちていきます。

「エンリカー！」

夢のような、あるいは悪夢のような。そんないつもの移動空間を通り抜けて孤児院に飛ばされたわたしは、ふらつく足を慣らしながら薄暗い部屋を魔法で軽く照らし、ベッドの梯子を一気に駆け上がる。

そして、二段目で心地よく眠っているエンリカを文字通り叩き起こします。

成長の遅い長寿種のエルフであるため幼い見た目に反して実はわたしよりも幾らか年上ではあるけれど、二人で部屋を共有して喧嘩が一度もない位には仲良しだ。

最初に起こしたのはただ、一番仲のいい親友だからってだけじゃない。

リゴレーヌさんの脱出奇術で全員逃げた後、たぶんというか絶対混乱が起きる。わたしひとりですべてを説明してまとめられるとも思えないので、賢いエンリカなら助けになってくれると踏んだからです。

「……ベリー……？ どつたの……？」

「えっと、説明は後！ とにかく起きてください！」

「んいーっす……」

もそもそ動いて、揺らしていたわたしの手を左手で掴むと力を込めて上半身だけ起き上がる。

しばらくぼーっとして、

「ベリーって、おいしそうななまえだね……」

変な事を言った。

「もう、寝ぼけてる暇ないんですってば！」

「わかってるよ……」

あとベリーは愛称なだけでベリテットです！

「えーい！ 起きろーっ！」

「うわっ」

目の前でいきなり思いつきり光らせてやった。

流石に目が覚めて緊急事態と分かってくれたのか、毛布を蹴飛ばすと軽々と柵を飛び越えて床に降りてくれる。

追いかけてわたしも下へ降り、軽く今回の説明をします。

といっても、わたしだって実のところ色々詳しいことは分かっていないんですけど、ともかく分かってる範囲の情報を与えて、とにかくここが危ないから避難するって事を伝える。

今はわたしがやるべき事をする。今は、それでいいんです。

「ふうむ。魔物を操る人が、ここを人質に」

「そう！　で、これからリゴレーヌさんの奇術でみんな逃げます！」

「ほんほん」

昔から掴み所のない喋りをしてるし、普段から何を考えているのかわかりにくいけど、なんとか噛み砕いて自分のすることを分かってくれたみたいです。

でも、何だか変な顔をしている。

まるでこれはまずいぞと言いたげな。

「リツちゃんの脱出奇術？　ってさ、誰も見てない事が条件なんでしょ？」

「え？　うん」

「そりゃあ、やっぱちとまずいよ」

リゴレーヌさんはたまにここへ遊びに来るので、すっかり馴染みになって脱出奇術と言われてすぐ何をするのか分かったらしい。

分かった上で言っている。

「みんなが寝静まってるからオーケー。ベリーは別口で逃げたりする予定だったんでしょ？」

リゴレーヌさんの奇術は、消える対象が誰の視線からも途切れた瞬間に、消える瞬間を確認させず消す。そういうもの。

今回はエンリカの言う通り、みんなが寝ていて何にも見ていないことをいいことに移動させようって作戦です。そのために人数と部屋の確認をした。

わたし自身も、全部の部屋を確認して誰もいなくなってるのを見てから脱出する予定です。もし夜泣きや何かで奇術に失敗した子がいても、そこで一緒に目を瞑って第二陣として逃げる事になっていきます。

砂時計で瞬間移動のタイミングを合わせますし、なんら不備はないはずですが……。

「おとなしく寝ていてくれりゃあねえ……」

嫌な予感がする。

珍しく真面目な顔をしたエンリカはエルフの長い耳をぴくりと動かし、軽く膝を曲げて高く跳ぶと手早く自分のベッドに放置していた愛用の大きなローブを引つ掴み、着地する頃には既に小さな身体へ身に纏う。

遅れて重力に引かれたフードが目深に被さり、立ち上がると同時にローブの内側から木の杖を手品のように出すと宙で掴み左手に持ちます。

冒険者ではないけれど自衛用生活用にとそれなりに魔法を扱え、わたしにも魔法を覚えてくれたエンリカの戦闘スタイルだ。顔と左腕しか見えていないし本人も暑いと話していますが、拘りだそうです。「ベリテットの新たな人生の節目、お祝いつてんでみんなでドンチャン騒いだ訳よ。年少組は疲れてすぐ寝ちゃったからいいだろうけど、あたし以外の年長組はまずいぞお」

ここそと窓に近づいたエンリカがつま先立ちになりながら外を見て、手招きするのでそれに習いわたしもこっさり伺うと、外には異形の魔物が蔓延っています。向こうの手が既に回ってきているようです。

助けに来てくれるはずの冒険者さん達の姿はまだ見えないのに、もういつでも攻められる状態になっている。

「やっこさん達やまだ威嚇。けど、みんなが騒ぐのも時間の問題かもねー……」

「そんな……!」

「起きてる連中が気が付いて騒がなきゃいいけど、急がないとね」  
だからと言ってここで私が焦って駆け回ってもそれで気が付かれてしまう。

早く、みんなが外を見てしまう前に急がないと……！

「ベリー。人を集めるポイントは決めてあるんでしょ？ 食堂にまだみんないると思うから、ちやちやつと行って声かけてきて。年少組の確認はながらだったたりその後の手分けしてやっちゃったり効率よく」  
「……エンリカは……？」

第二陣が脱出する場所は確かに固定してあります。

けど、今の話じゃエンリカは、エンリカはまさか！

「まあまあそう慌てなさんなや。あたしは玄関脇とかで待機して、いざとなったら」

ぶんぶんと左手の杖を振った。

アイーダさんのとは違い、中に刃が仕込まれてる訳でもない本当に魔法を使うためだけの杖。接近されればすぐやられてしまいます。  
「危ないってー！」

これじゃあ、母さんと一緒だ。

ひとりで残って、死んでしまった――

「――あたしが疲れる前に来てくれりゃいいの。ベリーのママさんだって耐えて疲労してたから駄目だったんでしょ？ き、問答してる暇なし！」

ばしんと背を叩かれる。

確かにここで言い争ってる場合ではないですけど……。

……いや、今は魔法の扱いに長けたエルフ種の力を信じよう。エンリカだって引き時は心得てる筈です。無理せず逃げてくれるはず。

あの日の、母さんの死んだあの日のようにはさせない。魔物が攻めてくる前に急いでエンリカを呼ぶんだ。

部屋を出たわたし達は廊下で別れて、食堂に向かうまでにある小部屋はチェックしていく。

エンリカの方も玄関に向かうまでの間で見てくれているようだ。

「……よし、いない」

隣の部屋には誰も寝ていない。ほのかに温かみの残る寝具を触つて、脱出がうまくいったのだと安堵する。

いいや、まだ安心しちゃダメだ。

はやく食堂までたどり着いて、はやく皆の確認をして、はやくエンリカに伝えなきゃ！

「いやー。かつこつけちゃいましたなあ、あたし」

扉の閉まったままの玄関。

薄暗闇の中で杖を持って仁王立ちするエンリカは、冷めたようにしみじみと呟く。

「大の為に小を切り捨てる覚悟。そして自身も小であるならば……なんてね」

命を天秤にかけない戦闘などない。大だの小だの切り捨てるだの、自身を守るために戦うというだけの話……。と、格好つけて回想しつつ耐えきれなくなり口元をローブで抑えて笑いを堪える。

本人としては緊張を誤魔化したい為の格好つけたさは確かにあるが、殆どが緊張と不安の誤魔化しだ。

外からの唸り声と、孤児院内部で幾らかの人間が駆ける音が微かに聞こえている。

ベリテットの首尾はどうだろうか？

幾分と立ち……ついに時間切れと悟った。

扉の一枚越し、すぐそこにまで敵が来ている。

もうふざけている場合ではないと背を預けていた壁から離れて身なりを整え、こつんと杖で地面を叩き目を伏せる。

次の瞬間には木製の扉は軽々と魔物の突進と爪によって粉碎され、侵入を許した。

しかし襲いかかった魔物はエンリカの張った障壁を砕けず、容易に弾き返される。

敵はその一体だけではない。続けて二体三体と襲いかかるが、どの爪も牙も大した成果も出せず、カウンターとして放たれた風魔法によつて逆に吹き飛ばされてしまった。

ぱらぱらと一瞬にして荒れ果てた玄関を踏み越えて、暗闇から月明かりの下へ乱れなくローブを纏ったエンリカが姿を表す。

すっぽりと頭を隠したフードと低い身の丈は幼げを隠しきれないが、何者も寄せ付けない大魔法使いのような威圧的な雰囲気がある。

「この数は流石に骨が折れるねー」

もう既に自身の出てきた背後以外、周囲全てを見たことのない半人半獣のような恐ろしい容姿の魔物に囲まれているというのに、全く怯えた様子を見せず杖を持ち直し自慢げに言い放った――

「どうやら……本気を出す必要があるそうかな」

――足元の瓦礫に躓いて転びかけながら。

.....

「たららったららったららっ」

相手がどこで待っているのかも分からないのに、前を歩くりゴレー又は目的地が分かっていると云わんばかりにま真つすぐ道を進んでいた。

その後ろを歩く俺としてはいつどこから敵が現れるのか心配でたまらない。

俺が同行している理由としては、単純にこいつを一人にしておけなかったからだ。

元より交渉をする必要はないし交戦する可能性しかない。リゴレーも戦うことは分かっているだろうが、うまいこと動けなかった場

合を考えれば心配過ぎる。

「リゴレーヌ。どこまで行くんだ？」

「んゆ？」

そんな俺の心配を分かっているのかわかっていないのか、前を歩く道化師はなぜかご機嫌だ。

「時間はこちらが少し前、さっきの話は少し後。それゆえ実質未来予知？ 確定未来！ あの場所その場所防衛成功エンリカその実とても良き働き」

「防衛成功……孤児院が？」

「んふっふっふー。樹付きのエルフよエンリカ強し。さもありません？」

「りんさもなー！」

「エンリカって、さっき言ってた子供か」

確かちらつと聞いた話によると、ベリテットの親友だとか。

しかし強いといっても子供が防衛に役立ったのか？ よくわからないが、リゴレーヌの口ぶりだと不満のない結果ではあったらしい。

さもありませんの意図するところは分からないが。

「それはその作それはそれ、これはこの作これはこれ。今は関係なくなくいずれ」

「そうか。で、どこまで行くんだ？」

「にししし」

怪しく笑うだけでやはり答えてはくれない。

もう町を抜けて森に入り、舗装された道もなくなり、明かりは空に浮かぶ月しかない。

今日は満月だっただろうか？ やけに大きく、そして青みがかつた風に見える月明りは予想以上に頼もしく、前を歩く道化師を神秘的に照らす。

——普段と変わらない筈なのに、まるでこの世の存在ではないように見えた。

何故だろう。月明りに目が慣れていないのか？

月光の下でリゴレーヌの存在はあやふやに見える。

先が二つに分かれた道化帽子や癖のある紫の短い髪、黄緑色の少し

眠たげな瞳とそれを隠すような長いまつげ。いつの間にか巻いている付け襟。

あとは目につく胸と身長を底上げするシークレットブーツ……。それらは何となく理解できるのだが、他はどうだろうか？

服装も手足の長さも、何なら一番分かりやすい身長すら今の俺にははつきりと想像がつかない。

「それもそのはず描写なし。なしなれ全編通して描写なし。掘り下げよう？ 機会なく。

吾の姿不確定？ しかしそれゆえ想像任せの千変万化<sup>せんべんばんか</sup>」

戦闘前の高揚感に、あるいは月の魔力に酔ってしまったか。俺も。歌うような道化師の綺麗な声が耳に響く。

「思えば長きの付き合いリゴレーヌ。原初は二年も近く前？ 今より見て一昨年八月最初の一筆」

何を言っているんだろう？

リゴレーヌと会ったのは割と最近だ。少なくとも季節は一巡してない。

「二筆それより一年近くの後臯月<sup>のちせつつき</sup>。なんとなくなしなしにや投稿。それからお声もかけられ続き、供養は週間移行しラストへ移ろう」

ダメだ、俺は着いていけない。またこいつの能力の話か。

「ここまで続くは全てかかりし声援お陰。評価もつけられ真つ赤つか。いつもいつでも感謝忘れず」

リズムに乗せて、テンポよく歩くりゴレーヌは何となくいつも通りを装ってる風に見えた。

舞台に立つ者は観客席側を第四の壁と呼び、あたかも本当に壁がように不干涉を貫く。

今までリゴレーヌがそちら側を理解しつつも話さなかったのはそんな理由だが、それが今や崩れ、まるで舞台挨拶のようにふるまっている。

本人が語るように本当にこれで終幕なのか。

俺にはさっぱりだが、これでリゴレーヌが普段通りに戻れるならいい。



相変わらず俺にはリゴレーヌの姿があやふやに映り想像がつかないが、この際どうでもいいでしょう。

俺がここについて、リゴレーヌはそこにいる。いつも通り。それでいい。

「……吾は幸せにございます」

道化師が振り返り、真っ直ぐにこちらを見ながら言い、ペこりと柔らかい体を腰から深々と下げた。

俺の方を向いていたが、俺ではない。俺を通してどこかへ礼を言った。

「さて。ラストダンス！」

顔を上げたりリゴレーヌが片足を支点にくるりと反転して、いつの間にかたどり着いた森の切れ目……いつか来た地下遺跡のある草原を見やる。

そこには、あの例の男が立っていた。

「おお、待っていたよ！」

「初めまして。宮廷道化師ジャコモ・シーザー」

「愛らしい美しい娘よ！ 良く知るお父様を知らぬと呼び捨てにするのか、ヘンリエッタよ！」

やわらかな風の吹きつける草原とそこで再開する父と娘。

和やかな気配は全くもって存在せず、そこには微かな殺意だけがぶつかり合っていた。

表面上はお互い笑顔で、ていだけは良いのが憎たらしい。

「どうやら仲良くは出来なさそうだ。」

「ヘンリエッタよ。どうして私の下から逃げ出したんだい？ 大人しくしていれば君にとっても皆にとっても幸せだった事だろう？」

「幸せとは自ら決めるリゴレーヌ。吾は冒険者にして道化師のリゴレーヌ。ヘンリエッタ・シーザーはもういない」

「リゴレーヌ？ ……アハハ、そうか、そうか。アイーダから貰ったのかい？」

妙にねっとりとした声で男——ジャコモはアイーダの名を出した。接点はない筈だ。なのに、なぜ？

リゴレーヌも疑問に思ったのか、少し首を傾げる。

「アツハハハ！ これは素晴らしい！ 本当に何も知らないとは！」

大仰な奴。何がそんなに楽しいのか。

「君が身を寄せた一座。それが一瞬で壊滅するほどの魔物の群れ。どうして抵抗もできない全盲のアイーダが、全く怪我一つなく逃げ切れたと思うかね？」

……何？

「そしてヘンリエッタ、君もどうして逃げ切れたと思う？」

……

「自身の罪を償いたまえよ！ 私と同じ、否それ以上の苦をもってして！」

……

「あ的一座は君のせいで死んだ！ そして新たに得た友も死ぬ！」

アイーダが、内通者としてジャコモと通じていた？

手引きによってリゴレーヌが悲しみ苦しむように図った？

わなわなと肩を震わせ沈黙していたリゴレーヌが、ついに声を荒げる。

「——黙れ！」

そして容赦なく、いつの間にか手にしていたダガーを投げ放った。

## 一座

残像のように幾本も連なって投げられたダガーは、さくさく、と軽い音と共に深々とジャコモの胸へと真つすぐ刺さった。

——しかし、血が噴き出る事はない。

「身代わりか？」

倒れたその体は人間の物でなく、ダガーによってえぐれた部分からは藁が覗いている。

この親にしてこの子ありと言いたい訳ではないが、何とも俺の知ってる道化師らしいやり口だ。

『そうかそうか、私の事を悪魔め鬼めと罵るか』

ともかくジャコモ本人はそこにおらず、だがどこからか声が響く。

全方位から同時に話しかけられているような、大まかな位置の特定すらできない気持ちの悪さ。

『でも真実だよ。アイーダは私直属の部下でね、暗部の中でも王もその存在を知らないんだ……。ヘンリエッタ、君が知らなくたって無理はない。』

けれどね、流石に力の一片は見たことあるだろう？　なのになんて、彼女にそんな力が備わっているんだと疑問に思わなかったんだい？』

暗殺術を極めた暗殺者。俺が最初に感じたSランク冒険者レベルというのは間違っていないかったということか。

過去に詮索しなかったとはいえ、だからといって国の暗部とまでは考えは及ばなかった。なんせ、一座に所属しリゴレーヌを拾ったという完全に味方であるポジションにいたのだから時系列的に考えて矛盾への疑問しか思い浮かばない。

一座にはリゴレーヌが到着する前に先回りしたのだろうか？

何らかの手段で自身の存在を潜り込ませたには違いないが、それにしたってリゴレーヌへ向けていた愛情のような物が嘘であるようには見えない。

あれが演技だとは到底思えないし本人に問いただしてやりたいが、

今そのアイーダはどこへ行ったのだろうか。

『さて本題に入ろう？ ヘンリエッタ。君はこの私から地位を奪い、席を奪い、王からの信頼も奪った！ ただ殺すだけじゃ割に合わないんだよ！』

「どうするんだ？」

口を挟めばまた愉快的な笑い声が響く。いちいちうるさい奴だな。

というか、計略で娘を魔女と罵り追い出したのにそのジャコモまでもが追われたのか？

何が起こったのかは知らないが、発端はジャコモの娘に対する嫉妬なのだから逆恨みも度が過ぎる。

しかし良い事を聞いたぞ。こいつ自身に国へのパイプがなくなっただのであれば、もう抹殺を拒む理由はない。

……まあ、もうこうなつては殺す他ないのだが。敵対しているのだし、なんなら現行犯の犯罪者だし。

『魔王の手下だの魔王復活だの騒ぎが大きくなってしまったが、それも君のせいだよヘンリエッタ、君が生きる限り皆不幸になるのだ！ だから君は苦しまねばなるまい！ 今親しいのは誰だ？ その男か？ それとも孤児達か！』

語ってくれるのはいいが、俺の質問は無視かい。

どこにいるのか知らないがぶん殴りたい。

「——どうぞご勝手に」

表情を変えずに冷たくリグレーヌが呟いたその瞬間、宙に浮かんだ砂時計がカチリと鳴ってひっくり返り、一瞬この世界全ての時間が止まったかのような錯覚に襲われる。

次の瞬間には全て元通りだが、何かがずれたような夢心地。それは向こうにも伝わったようで舌打ちが聞こえた。

『……つたく、しょうがない魔女だ！ 観客の反応を見るためだけに得た力であろうに！ 物語を崩すつもりか！』

もう名前でも娘でも呼ばない。魔女呼びだ。

手は込んでいるようだが、とことん小物になってきた。

「空き箱、空箱そらばこ、宇宙箱うちゅうばこ。箱庭宇宙よ自由はそこに。思考は光より早くろう？ 過去へ未来へ飛び交うこと出来て、故に不可能なきしは不在の在。吾あを魔女と称しよう？ ならればその期待応えよう——」

沈殿した泥が巻き上げられて水が濁るように、浮かんだままの砂時計の中身が不気味な闇の煌めきで満たされていく。

ふわりとリゴレーヌ自身も空に落ちて重力を無視しひっくり返り、宙で逆さになったまま不気味に、いつもの通りにへらと笑った。

何が起る？ 何が起きる？

かち、かち、と何かが鳴り響く音が響き続け、最後はぱりん、と砂時計が割れ闇が解放される。

それだけで表面上は何も変わった所は見られない。

リゴレーヌが空を飛べる事自体に関しては、「こいつならできるか」と納得している。

ただ謎の儀式のようにも思えたが、ジャコモの焦る声だけはその危機感を知らせていた。

『もういい、もういい！ やはり殺す！ このままでは滅茶苦茶だ！  
全てが終わってしまう！』

なんだかとてもない事だったらしいな。

同時に森の木々の隙間から半人半獣のような、獣人のそれとは違う見たことのない醜い容姿の魔物が飛び出して空中に留まったままのリゴレーヌに飛び掛かるが——

「お望み通りは魔女のように振る舞いませよ？」

Insane Incident, 非常識な出来事  
Impress IDOLA, 印象的感動を！

——空中の道化師へ向かって跳んだ魔物が、誰かの放った鞭によって弾かた。

一体、また一体と次々に正確な攻撃が放たれ蹴散らされていく。鞭だけではない。誰かが鳴り響かせる弦楽器に突き動かされるように、地上にいた多数の魔物が命令を無視し、ぎこちない動きで同士討ちを始めてもいる。

「……何が起きてるんだ？」

周囲にはカラフルなテントが立ち並び、あちこちで賑やかに楽器が鳴らされ花火も飛んでいる。

気が付けば、そんなサーカスのど真ん中に俺はいた。

まるでかつての一座がここに復活したかのような、あるいは、今このジャコモの騒動すら出し物だと言わんばかりの……。

出し物？

確かに俺はショーをすると冗談で言ったが、まさか、本当に行おうとしているのか？

見渡す俺の視線の先で誰かと目があつた気がした。

誰か、というのは顔どころか輪郭のみで後は宇宙のように闇と煌めきで構成された、人の姿をしただけの影のようなものだったからだ。目があつた気がするだけで、視線は分からない。

メイドのようにスカートと思われる部位を持ち上げながら軽く頭を下げると、手に細い棒状の武器を持ち駆け出す。

鎧袖一触。軽やかにステップを踏む影が次々に魔物の首を跳ね飛ばす。

あれは、あの影はアイーダなのか？ 動きも速度も全く見劣りしない、あの動きはアイーダで間違いない。

じゃあ、あそこで飛び回りながら鞭を放っているのは、前に話していた鞭使いのツバキヒメか。

とすれば敵を同士討ちさせている音楽を奏でているのは演奏のナブコドということになる。

あるいは、そちらでは誰かが駆け回り、あるいは、こちらで誰かが駆け回る。

しかし一座を蘇らせた訳ではない筈だ。

自由と何をしても良いをはき違えず、しかし常識には捕らわれない

非常識な出来事。

この舞台を作り出し、テントを組み上げ、今も空で月のように巨大な魔法陣を背に逆さになって笑っているリゴレーヌの生み出した幻影か何かだ。

何か、というのはハッキリしない。魔法なのか、あるいはまた別の特殊能力なのか分からない。

先ほどの呪文のような言葉だって意味が分からない。

「吾は道化師。吾は原初。吾の存在そのもの始まり故に、吾の描く創造融通まかり通る」

『それが傲慢だというのだ！ お前も、私も、所詮物語の登場人物だ、決められた道筋へ戻れヘンリエッタ！ お前のやってることは破綻にしかない！』

「ふふふ……ふふふふ……」

リゴレーヌの真下では依然と変わらず殺戮が繰り広げられている。

ジャコモの焦りの声は、次第に笑いへ変わった。

『ならば君のせいで孤児院どころかあの町も滅びよう！ 私を殺しても君の罪は消えない！』

孤児院の防衛は成功すると言っていたが、町か。

それほどの戦力が残っているのか、はったりなのかは分からないがもうリゴレーヌに全て任せよう。

下手に俺が動くとかえって邪魔になりそうだ。

「御師様——ジャコモはどこにいる？」

手出しはやめようと決めた時、ふいにリゴレーヌが問いかけた。

まるで俺にあいつが見えているような、あるいは何かのフリのように思える。

だが、残念な事に俺にだってジャコモがどこにいるのか分からない。

「ズィンズィンズィン……」

再びの問い。

何の狙いか全く分からない。

答えは変わらずジャコモはここにいない、だ。

「ジャコモはここに？」  
いない。

「ジャコモはどこに？」  
回りにくい。

一体何を言ったら正解なんだ。

「ふ、ふふふ。御師様瞳でそこにいる。御師様瞳で答えそこ。そこに  
応えは瞳ひとみしさまさま御師おし」

『よせ、もう何も言うな！ 何も考えるな！ 貴様さえいなくなれば  
いいのか!?!』

眼前でナイフが光ったように見えた。

アイーダの斬撃を以前に目撃した経験もあつてか容易に盾で防げ、  
しかしジャコモの姿は見えない。

……もしかしたら、今ナイフの飛んできたその先にいたのか？

あのテントのカーテンの向こう、その先に。

「ふ、ふふふふふ……ふふふふふふ……そこにいますですね？」

ですよ。御師様はそういった。ならば、そこにいる。確定現実」

地面に降り立ったリゴレーヌは右手を掲げ、左手を水平に伸ばして  
伸びをしてからゆらりと歩く。

「認識宇宙は認識そこに。御師様語れば認識される。御師様、そこに  
確定ジャコモいる？」

言葉の意味は分からないが、ここははつきり堂々と言え  
いいのか？

なら少し合わせてみよう。

『……よ、よせー』

焦る声のしたあのカーテンの向こうに、絶対にジャコモは隠れて  
いる。

間違いなく、リゴレーヌの瞬間移動のような物はなく、先ほどの藁  
人形のような姑息な手でもなく。

ジャコモ・シーザー本人が、そこに隠れている。



「うむ、うむ。なら、そこにおられしジャコシーザー？」

リゴレーヌの横には三つの影が立ち並んでいた。

それぞれアイーダ、ナブコド、ツバキヒメの三人だろう。

これは復讐だ。

アイーダはまだ生存しているが、一座という単位の復讐のために、代表したメンバーが集っている。

『ああ……うあああああああ！』

発狂したジャコモが、カーテンを引き裂きナイフを手に飛び出した。

なんとも情けない奴だ。

追い詰められればこうもなるのか？ 小物というか、あっけない。

接近するより早く早くツバキヒメが鞭でナイフだけを弾き飛ばし、続いてアイーダが駆け利き腕を斬り飛ばす。

よろめいたジャコモの体を、振りかぶったナブコドの楽器が捉え殴った。そう戦うのか。演奏はしないのか。

「あ、ああ……」

かつ、かつ、と音を鳴らしながらリゴレーヌが歩み寄り、ジャコモが扱っていたナイフを手に取り見下ろす。

倒れ伏したジャコモの体は酷い物だ。

他の魔物のように、半獣半人と言っている。

魔物と人間の合成生物、獣人とは違う歪なそれがこいつの操っていた魔物の正体か。どう作ったのかは知らないが、まさか文字通り悪魔に魂を売ったとでもいうのだろうか？

前にこの遺跡で出会ったはぐれの盗賊も、こいつが戦力にする魔物の材料としてついでに襲撃されたのだろうか。少しは同情する。

だが、こいつ自体には同情しない。

そんな事ばつかやってるから巡り巡ってだ。因果応報。

「……ん？」

動きが止まった。

親子関係なんぞもう無いと捨てているが、流石に親殺しというかそもそもリゴレーヌ自身、殺人は憚られるか。俺が代わりにやってやる

うと歩み出したら手で止められる。

「どうした？」

「いえ。いえいえ……んくくくふふふ……」

含みのある変な笑い方だ。

どうしたというのか。

いつの間にか幻の一座は消えており、夜空といつもの草原が戻っている。

まさか、このまま帰るのか？ ジャコモは既に魔物に片足を突っ込んだ、もしかしたら復活してまた来るかも知れないというのに。

「いえいえいえ。少し……面白い事に。なりぞや！」

「お前がいいならいいんだが」

道化師の狙いは分からない。

さっきの一座の幻影を出した能力といい、リゴレーヌには謎が多いな。

「まあ、いいか」

深く考えたって仕方ない。

くるりと反転して背を向けても向こうは不意打ちもしないらしい。

ご機嫌に歩むリゴレーヌの背中を追って、俺も町に戻ることにした。

……

「……もしかしてこれ、置いて行かれた感じ？」

背後から人の気配が一齐になくなるのを感じて、エンリカは少し焦った。

もうだいぶ蹴散らしたし、町の自警団も援護に来てくれたとはいえまだ子供のエルフ。戦い続けられるほどの持久力はない。

ベリテットを信頼し、これなら大丈夫だと殿を務めたが失敗だった

かと脳裏をよぎる。

「いんやー、辛いねえ」

もう逃げ出したい。そう思っても、逃げ出す場所はない。

皆が飛ばされた先は知らず、そもそもこの場を抜け出す手がなく戦うしかない。

「ぶるうく……ばーすとー！」

気の抜けた詠唱で魔法を放ち、魔物が水に貫かれて倒れる。

そして、その亡骸を乗り越えて別の魔物が襲い掛かった。

「だあもう！ キリがない！」

ぎりぎりのタイミングで障壁を置いて防ぎ、ステップを踏んで蹴り飛ばす。

もうこれ以上攻撃に魔力を回せない。防御に重みを置いて、耐え忍ぶしかない。

自分は最強。自分は世界樹の加護を受けている、自分は……。

色々と言い聞かせて、襲い掛かる追撃が障壁を削る音を聞く。

「ううう……だあ！ ベリイーツ！」

「——間に合った！」

障壁に纏わりついていた魔物の首が飛ぶ。

そこに立っていたのは、剣と盾を構えたベリテツトだ。

「遅くなりました」

「んもー。早く来てくれてもよかったじゃんか」

「色々あったんですよ。話付けたり」

魔法使いと剣士が並び立ち、魔物に向かって立ちふさがる。

その様は、かつてこの町を守った4人の冒険者の——

「——それには！ 人が！ 足りてないってのおっ！」

……突然、少女の止める声と共に大剣が降ってきた。

大剣が投げられたのではない。影に隠れて見えなかったが、それは

小柄な少女が携えている。

ドワーフの鍛冶師の娘、クラリスだ。

重くて使い道のないと思われていたビッグ剣を持ってきて加勢に来たらしい。

冒険者ではないし戦いの心得はないが、力任せに振り回すだけでも頼もしく感じる。

「あ、クラリスじゃん。おひさ」

「避難の移動先は工房でしたので、一緒に戦って貰おうと思って」

「てか、これおつもいんだけど！　なんでリゴちゃんは軽々しく持ってたかなあ！」

そういつつ充分に扱えている。ドワーフの腕力とはかなりの物だ。

「魔法使い、剣士、ドワーフ……この町を守った英雄達のパーティー完成かね」

「しかもニコル……じゃないや、ベリテットと私はその娘っ子だしね」「ひとり足りませんが」

ギルマスは独身だし弟子もない。

こじつけるならここの防衛を行っている冒険者がそうとも言えるのだろうが、微妙だ。故に、カウントはしない。

「加勢します……！」

たたたと軽い足取りで黒い影が通り抜け、魔物を倒すとはいかずとも次々と足を斬りつけ機動力を奪っていく。

以前にリゴレーヌが助けた事のある獣人の子供が、騒動を聞きつけて救援に来てくれたのだ。

「えと、誰？」「さあ？」

「そのナイフって、リゴレーヌさんの？」

紹介もないので誰も知らなかったが、ベリテットは何かしら関係があると思いついた。

「何にせよ町を守った英雄の冒険者風に四人揃ったんだし、なら、なんかもういいかな！」

エンリカが雑に場を仕切って杖を構えなおし――

「——ならば、ならば、いりましょう？　リゴレーヌ！」  
「う、おっ！」

女子とは思えない汚い声で驚いた、突如として空からリゴレーヌが降ってきたからだ。

いまいち締まらない。

「あ……」

「どっから降ってきたんさ、あんた……」

「リゴちゃんなら仕方ないよ」

「リゴレーヌさんだから仕方ないですよ」

「おふたりさん、適當過ぎない？　ほら、この子もびっくりしてるよ」

黒猫のような獣人の子供を左手で撫でるエンリカが、同じ手に持つ杖でリゴレーヌを器用に小突く。

「というか、リゴレーヌさんはもういいんですか？」

ベリテットが聞いて、道化師はにへらと笑って揺れた。

今この場面では平行して丁度ジョコモと対決している時間ではあるが、対決の描写は先ほど終わっている。

手空きとなりこちらへ来れたと言っても、誰も意味が分からないだろう。

流星にそれは分かるので、リゴレーヌはゆらゆら揺れるだけではつきりとは答えなかった。

「ま、いつか！　さあて、やっ तरीますかあ！」

『おーっ！』

「うむ！」

エンリカがやけくそ気味に声を上げて、それにベリテットとクラリスと獣人の子供が乗り、リゴレーヌが頷く。

目の前には一座壊滅の現場に残されていた巨大な爪痕を作り出した、他の魔物と比べずとも分かるほど凶体の大きな魔物がいる。

戦闘能力的には冒険者で食べている連中にはまだ及ばないが、全員が負けないという勢いを持っている。

そして事実、負けなかった。

## ひと段落と裏切り者の始末

「主目的は逃げる事じゃなかったのか？」

「う、ごめんなさい……」

「まあ、結果的に良しとはいえ」

ジャコモの事件から数日。

祭りは終わり、元の平穏な日々が戻った。

例の当日、結局ハツタリだったのか町への襲撃はなく、孤児院の子供達も全員無事。平和。

殿としてエンリカが残ったと聞いた時は驚いたが、すぐにベリテツトが救援を連れて戻ったと聞いてさらに驚いた。

一歩間違えればの状況でも無茶をするのは妻ニコルの癖が血に流れているのかなんなのか。

ともかく、結果的に万全。何も悪くはない。

「らー、ららー、ら？ んー……、らっ！」

眺める先では再建中の孤児院の梁の上で、リゴレーヌが膝に黒猫を乗せて歌っていた。

今回の件はあいつにとって色々と区切りとなっただろう。

今までにへらとしか笑わなかったその顔に、真の笑みが……

「……いや、変わんないな。あいつの顔」

「多分ですけど、あれ素で笑顔が下手なんですよ」

「マジか」

過去の出来事で表情を失ったとかじゃなくて、ただ単純に笑顔が下手とか。

人間なんだし苦手な事のひとつやふたつ……にしては、いやしかし客の笑顔が好きなのに自分は表情作るのが下手くそとはなあ。

「あとは犬が怖くて嫌いだったり、実は猫が好きだったり」

「猫が好きなのは実はって程じゃ無くないか？」

餌付けした野良猫がいくら家にいついてると思つてやがる。

「リンゴも好きみたいですけどね」

「……もしかして、ナイフ投げの練習つつって大量にリンゴを買ったのは……」

「練習をダシにしていますよ、それ……」

リンゴくらい、いつも通り増やせばいいのに。

食べ物にダメなんだろうか。あるいは何かこだわりがあるのか。

帽子を手に入れるのには執着していたが衣装は後回しだったし、金を使う優先度が分からん。

「はっほー、んふ？ やはー！」

こちらに気が付いて、道化師が大げさに手を振ってから膝の黒猫を隣にいた獣人の子供へ預け、座ったまま後ろに倒れこむようにして落ちていった。

「御師様本日何御用？ こちら孤児院設計色々！」

ふと視線から姿が消えた瞬間には横に座っている。

いつもの通りのリゴレーヌだ。

「何となく暇だったからな。お前こそどうした、こんなところで」

「んふふふ。笑顔なきとこ道化あり。家失いしに違いなく」

「子供達を慰めてたのか？」

全員無事だったとはいえ、魔物の襲撃を受けて家が破壊されたんだ。

しょうがないと割り切れるものでもなく、年少組にとっては路頭に迷うような心細さもあるだろう。

復興が追い付かず貧困地区もまだあるとはいえ、孤児院自体への配給や一般の募金もそこそこある。実際迷う事はないのは安心できるが、精神的な所まではフォローできない。

それができるのはやはり、リゴレーヌのような明るい道化師だろう。

そこにいるだけで嫌な事を忘れられるような、安心感のある存在。

「なありゴレーヌ。お前、師匠の俺から離れたらどうするのか決めてあるのか？」

「んゆ？」

「冒険者として拾ったのは偶々だし、師を離れた後は好きな事をすれ

ばいい。当然、冒険者として色々な所へ行くのもいいが……」

聞くとやはりよくわからないと言った顔で首を傾げ、ベリテットの背中に乗った。

「冒険行商吾は道化。ベリベリエンリカおまけの公演とつとこ歩く！」

「……着いていくのか？」

「海の向こうにある大陸に行ってみようって話をエンリカがしてて、じゃあ見聞を広げるついでにボクもと思ったんですけど……」

「お前は知ってたのか」

聞くとところによると、絶海を超えた先にある大陸にあると言われる世界樹をエンリカは見に行きたいらしい。俺も噂話程度に聞いたことはあるが、見に行こうとまでは思わなかった。

かわいい子には冒険をさせろとは思うし見聞を広げるなら丁度いい。リゴレーヌが着いていくなら危険も少ないだろう。

「3人で行くのか？」

「といつても、わたしもエンリカも準備がまだまだですけどね」

「そりやそうだ。旅は楽じゃないぞ」

エルフのエンリカは外観から年齢が分からないしかもかくとして、子供な事に違いない。

焦って旅に出す必要もないしゆっくり教えていこう。

何とか逃げ延びたジャコモ・シーザーは、闇夜の屋根の上にいた。片腕をまるごと失い、ちまちま集めた手駒も消えた。今回は失敗に終わったが、しかし諦めはなく苦い顔も一瞬でジャコモの顔に笑みが浮かぶ。

機会さえあれば、幾らでも復讐してやると――



その実ジャコモは既に国を追われている。

娘であるヘンリエッタを魔女と呼び、復活した魔王の手下とホラを吹き、国兵を総動員させた騒動を引き起こしてただで済む訳がなく、かねてよりヘンリエッタもといりゴレーヌと仲のよかつた庭師——先代の国王が全て見抜き真実を現王へと告げていたのだ。

先代国王だけでなく、それ以外にも愛嬌が良いヘンリエッタを擁護する声は多かつた事もあり、あつという間にジャコモの化けの皮は剥がれ醜い自己愛が露呈した。

だが既に正気でなかつたジャコモは自身の椅子が蹴られたのを魔女の呪いとし、復讐は執念と化した。やはりとんだ逆恨みである。

もはやこんな親にしてよくぞ子が、と言える。

処刑を免れるため国を逃げ出し、復讐心は悪魔に買われた。

優秀である事に嘘はなく、暗記していた王国秘蔵の禁術により人間と獣を合成させた歪な魔物を支配下に置き、自身も身体強化の為半獣と化し、手駒としてヘンリエッタへ接触させたままのアイーダもいる。ならばと……。

そして、一座を襲った。

泣きながら、そしてスタボロにされほうほうのていでようやく生き長らえるヘンリエッタを見るのはさぞ楽しかつたであろう。

その後はアイーダが有給を取得し離脱してしまい、町の裏路地へ消えたヘンリエッタを見失ってしまうが、アイーダは再び接触し居場所を教えてくれた。

休日出勤だったアイーダは再び有給の続きと今回休んでしまったが、冷酷な暗殺者らしく情に流されることなく手下として暗躍してくれている。

もはやただの狂人となつてしまった男が次はどうしようかと思案を巡らせ、ふと何かに気が付き視線を上げる。大きな満月を背にし、いつの間にか尖塔の針に女性が立っていた。

長いロングスカートをたなびかせる風に揺らぐことなく、片手に杖を握り締め、一切瞳の輝きを覗かせない。

しばらく表舞台に顔を出さなかったアイーダが、そこにいた。

「アハハハ！ 少し待ちたまえよ、しばらくすればまた——」

言葉は続かなかつた。ジャコモの顔から余裕が消える。

盲目のアイーダが右手に杖を持っているのはいつもの事だが、左手にも何か短い筒のような物を持っていた。

あれは何だと思案し、ひとつ思い浮かんだ可能性をジャコモは認めたくない。

「……君、それはなんだい？」

恐る恐るジャコモが問えば、いつも通りの抑揚のない受け答えが風に乗って耳に届く。

「仕事道具です。国へ取りに戻っていたため、しばらくお休みとさせて頂きました」

命令はまだ出していない。

なのに、なぜ道具が必要となった？

「悔やみ申し上げる言葉はありません」

今日日に至るまで国王と宮廷道化師しかその存在を認知していないほど、目標はきつちりと仕留め自身に関する痕跡も残さない暗部の中でもトップレベルの人物。

その仕事ぶりと手腕は知っており、そして、前口上も知っている。

「お悔やみ申し上げます」とは、アイーダが手向けに授ける言葉だ。今回は少し違ったが、そんな差異を気にしている場合ではない。

「ま、まさか、貴様！」

——まずい。

後ずさろうとして足が止まる。

どこへ逃げればいい。どうやって逃げればいい。

アイーダが、まさか自身を裏切るとは！

焦るジャコモとは反対にアイーダは刃の仕込まれた杖を軽く撫でると、たったそれだけの動作にも関わらず全体が轟々と燃え盛る。そしてそのまま杖をさらに振ると、するりと鞭のように伸びた。

——たーん。

突然響く破裂音。

とにかく距離を取らねばなるまいと下げたジャコモの足は、矢に射られたかのように熱い感覚が襲い、動かさんとする脳からの命令が激痛で止まる。

流れ出る血と痛み。溢れる脂汗を拭うに意識も力も割くことができず、膝をつき顔を上げたジャコモが見たのは、アイーダが左手に握る銀の筒から細い煙が立ち登っている所だった。

それは「銃」と呼ばれ、技術を伝えた800年前の勇者がその持つ暴力性から闇へ消し去り、しかし王国の暗部で密かに伝えられていた物。

その中でも短銃と呼ばれる、シンプルかつ信頼性の高いアイーダの愛品。

発砲時に大きな音のなるそれは聴覚に頼る彼女にとって毒であるが、それを持つてしても余り有る効果を發揮する。

「苦しいでしょう?」

「う、あ、アイーダ……!」

「信頼していた者に裏切られるとは、悲しいでしょう?」

霧と化したかのようにかき消えたかと思えばアイーダは一瞬の内に肉薄しており、膝をついたままのジャコモへ致命的な一撃を与えた。

血を撒き散らしながら屋根を転がる男へ続け様に情け容赦なく、燃え続ける鞭のようにしなる杖を振るい仕込まれたその鋭利な刃で肉を削ぎ落としていく。

だが簡単に死なせはしない。

暗殺者として生き、どうすれば死ぬかはしっかりと理解している。それゆえに、ではどうしたら死なないかも分かっていた。

メインは殺す仕事であるので、その逆である死なないようには慣れないが、幸いにもジャコモは自身を死にくくしているし不馴れで

も問題はない。

斬撃により傷付けられていくが傷口は焼かれ出血はほぼなく、全身を薄く、満遍なく斬り刻んだ次はもう少し深くえぐり、そしてまた深く傷口をほじくり返し、お楽しみと言わんばかりに終わらない苦痛を与え続ける――。

ぐちやり。

めりめり、ばきばき。

それでもなお、もはや原型を留めぬ肉塊と化しても　ジャコモはまだ辛うじて途切れ途切れの意思を保っていた。

いいや、保たされていた。

いつその事もう死ねれば良いと思っても、メイド服の暗殺者はそれを許さない。

永遠とも思える地獄と自身の焼ける臭いを嗅がされ続けても発狂する余裕すらなく、気付けの痛みに襲われ続ける。

それほどまでに、燃え盛る業火に包まれた杖が示すようにアイーダはジャコモに対して怒り狂っていた。

最初から、なんならリゴレーヌがまだヘンリエッタであった時代からアイーダは味方であった。

国にいた頃。物陰より無垢な存在を認識した時、全盲で感じることのなかったはずの「光」と言うものを教えてくれたヘンリエッタ。

ハンデと表社会に決して生きられない仕事を請け負っている自身がそれでも生まれ生きてきたのは、その天使のような道化師を守護する為だと初めて見かけたその時確信した。目は見えないが、一目惚れと言っている。

だからこそ、ヘンリエッタ暗殺の任を受けた際には提案としてすぐに殺さず泳がせる選択を出し延命させたし、一座襲撃は予想外でありここでついに死なせてしまったかと生きる意味を見失いかけてしまった。

だが、ヘンリエッタは生きていた。  
そしてジャコモもまたまだ追っていた。

先んじて遠からず再び相見え、事が起きると察したアイーダは、あえて生存と現在を告げ口し、自身の信頼を勝ち得ると共に正面からぶつかり合うよう遠回りに提案し仕向け、マックス側が勝つ所まで完璧に予想しレールを引いた。

そして最後の仕上げ。

それはこの男に、自身の愛するヘンリエッタが今まで味わった苦しみと悲しみ以上の絶望を与える事。

最終的には殺す。だが楽には死なせない。

——最も信頼していた者にあつさりと裏切られ味方なんていない、誰もあなたを助けませんよ？

残り少ない肉が弾け飛ぶ。

——あなたの味方なんていません。当然ですよね？  
がりつと多少の手応えと共に弾けて骨が跳ねる。

——もう終わりですか？ あつさりですね。残念です。

空が白むまで続き、もうそこにジャコモの存在はない。

最後の肉の一片までも潰れて液体と化し、焼かれ蒸発するまで刻まれ、骨は粉末になるか炭となり果て踏み砕かれ、夜明けの光が町と屋根の一部に残った赤いシミだけを照らす。

手首のスナップをきかせれば鎮火した連なる刃が生き物のように動き、元の杖へ戻るが芸術的なまでの美しい刀身すらそこになく、焼き潰れて武器としてはもう扱えない状態となっていた。当然、杖としても使えるはずもない。

鍛冶を営む家系の娘であるクラリスですら見抜けないほど精密な作りをした蛇腹剣。それこそがこの杖の本来の姿であるが、打ち直せる者もおらずもはや捨てるしかないだろう。鉄屑にもならない。

「……彼女には……リゴレーヌには、嫌われてしまいました。これで良いのです」

流石のアイーダも疲れ果て、息も絶え絶えに呟く。

ヘンリエッタもといリゴレーヌにとつて、自身は姉のフリをして近付いた裏切り者の暗殺者だ。

血生臭い暗殺者。

焼き潰れた刃が剥き出しになったこの杖と同じで、元の鞘には戻れないだろう。

それでも、これで良い。

最大最悪の害なす悪は潰えた。

それで良い。後は、彼女とその仲間達がいれば彼女は幸せに暮らしていける。

夜の終わり、朝を伝える鐘の音を遠くに聞きながらアイーダは近くの煙突に背を預け座り込む。

もういらぬ杖を放り、手放すことを忘れ夜通し固く握りしめたままだった左手の物体を確かめると、無表情だった顔に少しの笑みを浮かべ、そして鐘が鳴り終わる頃。

意を決し。

銃をそつと持ち上げ――

……

……

……

カーテンコール！

「ふむー。ふふっふ」

「どうした？」

「ようやく終焉世界の終わり、世界の果て故あいさつ悩み。えんでいんぐー！」

数年が経ち、あれ以来姿を見せないアイーダの飼っていたニワトリも老いた頃。

どういう訳か背丈も全く成長していないリゴレーヌが朝から唐突によく分からない事を言った。

よくわからない事を言うのはいつもの事なのでスルーするが、ベリテットと年齢が変わらないのになぜこいつは成長が止まっているんだ。成長期はどこへ行った。

「それは吾の姿時経たず。一週間！」

前にも時間を巻き戻してたしまあいつか。

「むー。そろそろネタ切れ御飽き飽き。新ネタ開発吾にできること……」

リゴレーヌがいつもの落ち着きのなさから一転して紙に何かを書き始めたので静かになる。

——ジャコモ事件から年数も経ち、周囲の様子は大きく変わった。

ベリテットはギルマスの（余計な）手回しによって俺の正式な弟子となり、指導を付けた結果、センスもあるしすぐに冒険者として立派に成長を遂げた。

今や親友のエンリカと組んで簡単な依頼をこなし、ひとり立ちしている。エンリカの方は魔法使いとして知識役になっているらしくバランスはいい。

だから以前のように俺一人の時間が増える……と思ったんだが。

「……ん？ 吾に御用？ 何かYOU！」

変なポーズを決めながら小首を傾げる道化師を見てため息。

こいつはいつまで弟子になっているんだ？ 後輩のベリテットは

既に旅の前準備すら始めているというのに。

「だって何故ゆえお答えしましょう、吾の名は道化師リゴレーヌつ。変わらぬ日常お届けするのがお仕事仕事の大仕事！」

「頼むからちよつとは成長してくれ」

背丈とか子供のままだぞ。

「その辺お許し年数経たず。現実干渉その不利益、このリゴレーヌにも予想外！」

まさか、不老にでもなったのか？ こいつ。

ついに人間の枠を外れてしまったか……。

「いえいえいえいえ！ リゴレーヌは人に変わらずここにおり！」

いやだって、ねえ？

「アイーダ姉！」

おらんやろ。

って思ったんだが……。

「リゴレーヌはいつもと変わりませんよ」

「ほらー！」

いつの間にか席に着いてる!?

数年越しに現れたその姿は以前のメイド服に変わりはないが、杖を持つていない点だけ異なる。

そういえばアイーダも神出鬼没だった。

「どうして、という顔をしていますね」

「あ、ああ。まあ……」

「私が死んだというハッキリとした描写がなかったので、と申しますか」

何の話だ？

横目にリゴレーヌを見ている辺り何かしたんだろうが……。

というか、ジャコモの手先だって話はどうなったんだ？

「その辺りはリゴレーヌが詳しいですよ。彼女はここに至るまで、地の文どころか裏の設定まで覗いて立ち回りましたから」

そうなのか？

道化師は帽子をふらふらさせながらメイドに抱き着いている。



「どうなんだリゴレーヌ」

「今は平穏世界は平和、アイーダ姉ねもお疲れさまさま」

「ありがとうございます」

うーん。話が全く分からん。

「あー……」

珍しく道化師が言葉に詰まった。

「どうした？」

「そのー、ですね？　これで憂いもなく終わりなんですけどー」

「けど？」

「締め方が思いつかないと言いますかー……」

急にまともな口調になったかと思えば、やはり言ってることは分からん。

アイーダに助けを求めるように目線を向ければ肩を竦められた。

「道化師リゴレーヌの得意とする役目は幕間や場繋ぎ、あるいは宮廷道化師風に進言です。締めは座長が行うのですから」

なぜ俺を見る。

俺は別に座長でも何でもないぞ。

「でもでもあるいは主人公ー」

どうしろってんだ。

てかその前に、何を締めろと言うのか。

そしてまともな口調になれるならずとそれでいてくれないか。

意味不明なのに疲れて椅子にもたれかかり、色々あったなと思いつつ返す。

何もかもリゴレーヌを拾ってから起こった事だ。

「父さんー」

ベリテットが帰ってきた。今度はどうしたっていうんだ。

「あ、リゴレーヌもいた！　……って、アイーダさんお久しぶりです！」

慌ただしいけどどうした。

今更何か発表かなんかあるとすれば心当たりはない。

「ギルドに見に来てくださいよ！　ボク、おっきな魔物倒したんです

よ!？」

「あー、うん……」

それ、そんなにいう事か……?？」

「凄いおつきな魔物ですよ、建物位の！ 運ぶの大変だったんですから！」

それはどちらかという倒した云々より、付近にそのレベルの魔物がいた事に驚きなんだが。

というか、センスがあるとはいえ成長し過ぎでは？

一応褒めてはおくが、このまま旅に出すと何するかわかんないな……。

リゴレーヌも着いていくらか大丈夫、とは思えど。

いざという時は何とかしてくれと目線で指示を出したら頷いてくれた。

「旅、ですか?」

アイーダはいなかったし聞いてなかったんだろう。ベリテットがそのうち旅に出るといふ事を教えておく。

「アイーダもリゴレーヌと一緒にどうだ?」

「……いいえ。もう十分に働きましたから」

そうか。まあ無理強いはしない。

「姉ねはお休み? 杖なしおつけー仕方なし!」

盲目の身で旅は辛かろう。

またしばらくの沈黙。リゴレーヌがアイーダに甘える音だけが響く。

「……って、なんでみんな静かなんですか?」

再びのんびりとした時間が流れようとして、ベリテットが声を上げた。

そういわれたって特に話題もないし。

というか騒いでたのはベリテットだけだし。

「もうっ。かわいいひとり娘が帰ってきたっていうのに……」

かわいいひとり娘であることは間違いないが、最近ちよつと生意気

だから意地悪したくなるんだよな。

……俺も気持ち悪いおっさんになったか……。

「んー、んー……」

「な、なに？ どうしたの？」

リゴレーヌがベリテットを見る。

「締めなくてよき？」

「何の話？」

「俺も知らん」

さつきから何かを終わらせたがってるんだよ。

「この物語もようやく終わり、されど旅立ち未来の指標！ 舞台はまだ見ぬ新天地！」

あ、締めるのか？ リゴレーヌ自ら締めるのか？

俺はよく分からんからやってくれるなら別にいいけど。

「ベリーー！ ギルマスが話聞きたいってー！」

「あ。すぐ行くよエンリカーっ！」

慌ただしくベリテットが家を出ていく。

アイーダはいつの間にか席を立ち、メイド服らしくお茶の準備を始めていた。

椅子の上で高らかに何かを宣言するリゴレーヌだけにスポットが当たり、その目の前にいる俺はどうしろというのだろう。

とりあえず拍手を送っておく。

なんだか話からして、この地での物語は終わったので次は旅の話をする、といった感じだ。

何となくそんな感じだろうと言う予感というか天啓というか、なんかそんな感じする。

「そうか、終わりか」

「はいなはいはいはなはな！ そうです終わりの物語！ 続きはあれど続きなく！」

道化師の帽子を投げて、俺に被せた。

「またいずれ、ではまた！」